財団法人暹羅協會々報

第十一號

昭和十三年六月

昭和十三年六月

財團法人 運羅協會々報 第十一號

財團法人 運羅協會

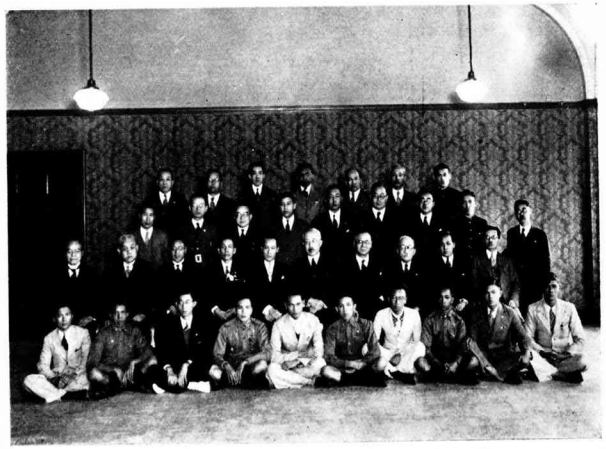
（記事參照）

駐日暹羅公使ピヤ●シ一●セナ閣下歡迎晩餐會　（昭和十三年五月廿三日・於東京會館）

（記事參照）

在神戸岡崎忠雄氏招致羅遲學生旅行團（於岡崎氏邸）

（中央和服姿岡崎氏）



（記事參照）

同上霞山會館ニ於ケル羅遲協會主催歡迎茶會

前列拾名羅遲學生・二列目矢田常務理事・三列目右ヨリ石射東亞局長・向ツテ左ニ・理事北島・理事拓東勝齋・理事岡部・長理事・羅遲公使・三木榮氏

財團法人 暹羅協會々報第十一號 目次

口絵寫眞

一、駐日暹羅公使ピヤ・シー・セナ閣下歡迎晩餐會
二、（上、在神戸岡崎忠雄氏招致暹羅學生旅行團（於岡崎氏邸）
（下、同上靈山會館に於ける暹羅協會主催歡迎茶會

新聞論調報告欄

○極東問題（三月五日、盤谷タイムス紙所載）……一
○暹羅と隣國佛領印度支那（三月十二日、盤谷タイムス紙所載）……三
○國防　暹羅と緬甸の立場（四月八日、盤谷タイムス紙所載）……五
○支那の前途（四月二十三日、盤谷タイムス紙所載）……六

資料欄

○佛曆二四七九年暹羅營業登記法……九
○暹羅國一九三九年度豫算……一六
○最近暹羅教育界の展望……奥野金三郎……二七
○暹羅に於ける英國資本……三四

雜苑欄

○暹羅留學生と日本語教授法……星野政市…三七
○ムアング・タイ（大自由國暹羅）……磯部美知…五七
○暹羅訪問紀行……淺野研眞…八四
○暹羅の象狩（其の由來）……一〇四

雜報欄

○秩父總裁宮殿下戰線御視察……一〇八
○秩父總裁宮殿下の有難き御思召……一〇八
○秩父總裁宮殿下へ前暹羅公使ラクサ氏より手長猿獻上……一〇八
○駐日暹羅公使歡迎晩餐會……一〇九
○暹羅新銀行法實施……一一三
○對日貿易額（一九三六―三七年）……一一三
○盤谷日暹貿易斡旋所の開所……一一五
○盤谷市長の更迭……一一五
○暹羅國より註文の機關車完成……一一六
○帝國練習艦隊の暹羅訪問……一一六
○暹羅國海軍潛水艦受渡式……一一八
○暹羅國海軍留學生と潛水艦の出發……一一八
○暹羅國海軍砲艦受渡式……一一八
○暹羅燃料局長の來朝……一一八
○暹羅國政府官費留學生來朝……一一八
○暹羅國政府留學生の警察事務實習……一一九
○暹羅學生旅行團來朝……一一九
○東京商科大學並專修大學々生の暹羅國視察旅行……一二三
○石黑外務事務官轉任……一二三
○暹羅公使館附海軍武官交迭……一二三
○暹羅公使館附海軍武官の交迭並に商務官の新設……一二三
○前駐暹公使館附武官中堂海軍中佐歸朝……一二四
○貴族院議員の暹羅視察旅行團派遣決定……一二四
○東京外國語學校暹羅語速成科本年入學者氏名……一二四
○暹羅新聞從軍記者の歸暹……一二四
○拓務省より本協會へ補助金下付……一二四
○本協會臨時理事會の開催……一二四

○會員異動……一三五
○會員動靜……一三五
○寄贈圖書及寄贈品……一三六
○財團法人遲羅協會總裁及役員……一三八

新聞論調

○極東問題

（三月五日、盤谷タイムス紙所載）

一九三二年三月一日、滿洲國は支那から獨立して、正式に共和國たる事を全世界に宣言し、次いで一九三四年一月八日、滿洲帝國を設立した。一九三三年二月、國際聯盟は四十二對一の決議に依り法理上に於ても事實上に於ても滿洲國の不承認を表明する報告を採擇した。滿洲國の建設に當つて同國政府は諸外國に正式の國交關係の確立を要請し且つ滿洲國に於ける諸外國民の既得權益を侵害せざる事及び門戸解放主義の遵奉を保證する旨の通牒を發した。現在、日本、サルヴァドル、伊太利、獨逸はこの新帝國と正式なる國交關係を開始してゐるが、亞米利加をも含む他の列强（合衆國は國際聯盟の決議に何等拘束されざる事勿論である）は今尙右の通牒に回答を與へてゐない。

該通牒に於ける保證は對支條約に依つて諸國民の享有せる治外法權をも含む旨を承認してゐる。けれども日本の指導下にある滿洲國が其の當初暫らく斯かる治外法權を享有せしめて、正式なる外交關係を開始せんと、期待してゐたに相違ない事は世間周知の事實である。從來世界各國は此の國から多額の貿易利益を搾取してゐた。斯くて新政府は諸外國の貿易に對して差別的法規を制定して實施した。斯かる法規の實施は滿洲國の態度が次の樣なものである事を

語つてゐる。「諸外國が吾國を承認せざる以上、何故吾國が諸外國を承認し得るか」。さて日滿條約に依り、滿洲國の治外法權は昨年十二月一日を期して撤廢された。事實此の條約は日本臣民にのみ適用されるのである。蓋し日本は自國民が既に有せざる權利を享有して滿洲國を承認せざる列强の國民と一致する事がないのは不思議な事ではない。

此の問題に關する記錄は二月號の「オリエンタル・アフエアース」誌（上海發行）の記事に依るものであるが、同誌は滿洲國內に於ける治外法權は記錄すべき一の抗議も受ける事なくして消滅すべきものと思はれるとの結論に達してゐる。それ以外に同誌は問題とすべき二つの論點を有してゐる。卽ち、假令國際聯盟が堂々たる正義觀を振りかざすとしても、聯盟加入國も合衆國も極東の紛爭に對して干涉に乘出さんとする氣配は見えないし、且、之等列强は五十萬平方哩の領土と三千二百萬人の人口を統治せる政府を無視して行ける譯はない。この外に起るべき可能性あるより大なる問題がある。若しも日本が支那に於けるソヴエート體制の打倒に成功した曉にも、國際聯盟は從來の如くに滿洲國を取扱ひ、同國の承認を差控へなければならないであらうか。此れに關し「オリエンタル・アフエアース」は次の樣に述べてゐる。國際聯盟は日本を束縛せん事を期してゐたが、事實上は日本を强化する結果となつた。支那に於ても又滿洲國不承認は日本の地位を强固にするに與つて力があつた。「不幸にも聯盟の歷史は聯盟違反者が何等の困難なく利益を得てゐる幾多の例證を示してゐる。」歐羅巴列强は本問題に關しては愼重なる考慮をなさなければならないと思ふ云々。

○暹羅と隣國佛領印度支那

（三月十二日、盤谷**タイムス**紙所載）

近頃の諸新聞切拔には何時も暹羅に關する記事があるが、その大部分は旣に吾々が論評し、どちらかと云へば下らない記事であるから、玆に繰り返す必要はない。但し最近オウトレイ氏が印度支那の調査に關する巴里委員會席上に於てなしたる談話は聊か注目に價する。氏は嘗て印度支那の官吏で永年交趾支那を代表して下院に議席を有してゐた。以下印度支那の防衞に關する氏の談話を要約して見よう。『本委員會は現在極東に勃發しつゝある事件及び其の將來の見透しに關しては絕えず研究を重ねなければならぬ。現在、佛暹の國交關係は非常に親密であるが同時に二國が、メコン河沿岸千八百粁を共同國境線として居る事及びこの境界には防塞がない事は兩國共に忘るべからざる事である。暹羅の如き小國の維持のために同國は平時に於て七萬人の軍隊を常備してゐるとの噂があるが、同軍隊は戰時に於ては二十五萬人、一說には三十萬人をも召集し得るとの事である。尙又羅暹は百五十臺乃至二百臺の軍用航空機及び若干艘の潛水艦を所有してゐる。

以上の外に佛國は暹羅が獨逸並びに日本、伊太利と密接な關係を有する事實を見逃してはならない。故に佛國は暹羅が斯くの如く突如として歲入豫算の約三分の一にも達する全額を充當して軍備をなす背後に、如何なる企圖が隱されてゐるかを吟味する必要がある。余は暹羅へは數回派遣され、佛暹條約の「ラボルター」でもあつたのであるが、余の見る所では暹羅が如何なる時にも佛國を攻擊せんとの意圖を有してゐたとは信ぜられないのである。然し暹羅人

はメコン河左岸の佛領老撾を吾國民に掠奪されたものと考へてゐる事は眞實であり、暹羅當局は暹羅と印度支那との境界線を安南山脈となせる教科書用地圖を發行してゐる事も事實である。假令過去に於て全メコン左岸地方をアンナン王が統治してゐた事を口實として老撾が印度支那に合併されたとしても、その合併の當時は佛蘭西の勢力强く、暹羅は佛國の勢力を右岸に撤退せしめて同地方を回收するに足る實力を有してゐなかつた事を忘れてはならない。

然し、以上の事で暹羅が此等の地域に關する凡ゆる要求を決定的に撤回したと見得らるゝかは疑問である。極東に紛議が勃發した場合（余は紛議の危險性ありと見てゐる）暹羅が自國の利益を齎らす側に味方するに躊躇しないと確信する。余の見る限りに於ては、暹羅はメコン河の左岸とバタンボーン・シヤムラープ及びシーソーボオンの存在する東浦塞の一部をのみ要求してゐるのである。然らば何故印度支那地方に於て暹羅の軍備に直面せざるを得ないか。印度支那には約一萬八千の土民軍、一萬の佛國印度支那派遣隊、及び最近本國から到着した四臺の大型飛行機がある。更に極東の事件を考慮して艦隊の强化が決定された。……アンナン兵は暹羅兵よりも優秀であると云ふのが余の個人的な意見である……

全世界の四分の三の金を所有し、豐富なるガソリン、石炭、護謨及び錫を產出し、何等武器に訴へる必要なくして日支事變を終了せしめ得る布告をさへなし得る三大民主々義國たる佛蘭西、英吉利及び亞米利加はかの悲しむべき結果を見た、「ブラツセル」に於ける九ケ國會議の範圍にその行動を制限してゐる事は兎も角困つた事であり、斯くして三ケ國の重要性が如何に無能なるものかの明白なる證據を全世界に示すのである。

暹羅は日本に焚きつけられて萬一今後佛領印度支那を占領する樣な場合、吾々はこの侵略軍に對する爲めの軍隊を母國から派遣すべきであらうか。余は斯く信じないものである。故に吾々は暹羅軍隊と戰ひ得る軍隊を印度支那に常備して置かねばならない。」

オウトレイ氏は更に日本による印度支那の危險を縷々として述べた。

○國　防

暹羅と緬甸の立場

（四月八日、盤谷タイムス紙所載）

緬甸の議會に於て國防豫算の審議が去る三月行はれたが、その中に我々にとり特に興味ある問題があつた。それは日本並びに暹羅の意圖に關して「世間は大なる誤解」をなしてゐない。乃ち、日本は現在の非常時體制を將來の重大なる秋にも備へんとしてゐるのであるが、暹羅は勿論何等侵略戰爭を計畫してゐるのではないといふことである。然し自國の新しい義務の遂行に熱心な緬甸が全歲入の一三・三パーセントを國防費として提出してゐるに對して、暹羅は全歲入の三一パーセントを同目的の爲に費して居るのは注目に値する。

右の數字は緬甸國防省の當局者が緬甸總督に提出したものであるが、暹羅の數字は一九三七年――三八年度豫算のパーセンテーヂであり、緬甸のは一九三八年――三九年度の豫算である。暹羅の豫算には暹羅海軍の追加豫算六百萬銖が含まれてゐるが、これは今年四月から初まる本年度の豫算には計上されてゐない。而も本年度の暹羅歲入は幾分の增加あるを見越されてゐる。それ故に歲入額に對する國防費のパーセンテーヂは前年度の三一・四パーセントに比して二四・六パーセントと減少を示すことになる。緬甸當局者は緬甸のパーセンテーヂは暹羅に匹敵するものである

と考へてゐたかも知れないが、周圍の事情は決して兩國同一でないのである。

緬甸では現在緬甸人を軍隊に編入して訓練を行ひ、又國防の爲に必要なる全費用を支辨しようとしてゐる。いづれにもせよ緬甸存亡の危機の際英國がその後ろに儼として控ふるは言ふ迄もない。然し今は非常にデリケートな時期であつて、支那に勃發した事變が世界戰爭の導火線となり、緬甸をも捲込むに至る場合、同國の位置は事實上進退の國防力に依つて定まる事は周知の事である。事情斯くの如くであるから、陸・海・空・軍費の尨大なる支出に對する兎や角の批評は慎むべきであらう。

若し平和を愛好してゐる國が破壞の機械類を積上げる事に滿足してゐるとすれば、それは不快な種類のものであらうとの言は至當である。英國の立場に關して「エコノミスト」誌は「現下に於て吾國軍備刷新の斷乎たる遂行は免れ得ざるのであるが、然しそれは吾國財政の破壞を齎す政策である」と述べてゐる。佛蘭西に於ても又莫大なる軍事費は或程度の不景氣材料を提供してゐるが兩國の場合、軍備刷新計畫は國家保全の爲には不可缺事として一般人民に承認されてゐる。故に「マンチエスター・ガーデイアン」の「當局者は尨大なる軍事費を賢明に使用するやう更に嚴重なる監督をなすべきである」と云ふのが右に對する唯一の明白な批評と云ひ得るであらう、云々。

○支那の前途

（四月二十三日、盤谷タイムス紙所載）

四月號の「オリエンタル・アフエアース」（上海發行）は上海の多數居留氏が日支事變に對して如何なる態度を取つたかに關して興味ある記事を掲載してゐる。（同誌の論調は世人に慎重なる考慮を與ふるものとして有名である。）同記事の概略は次の如くである。乃ち、上海居留民は經濟方面からのみ戰爭を見てゐた。故に戰爭勃發の原因に關しての意見發表等は避けてゐた。蓋し上海の急速なる復興は同地に於ける日本軍の勝利に俟たざるべからざる事を知つてゐたからである。事變勃發の當時、既に支那軍の決定的な勝利と日本軍の上海撤退は不可能なる事、而も地方徵募の、訓練の行屆かない支那兵が參戰せざるを得ぬ時その災過は甚大なりと豫想してゐた。

以上が同誌の意見であるが果して豫想は適中して、日本軍は支那軍を驅逐した。但し、そのため諸外國と日本の關係は甚だ險惡となつた。實際兩者の感情は離反して行く計りであつた。同誌に依ればその理由として日本軍隊は先輩將校によつて反英思想を皷吹された結果であると述べてゐる。兎も角軍事方面から見れば日本は昇天旭日の勢である。日本側は幾多の例を擧げて次の如く公言してゐる。「支那は我政府を侮辱し、我國民男女に許容し得べからざる暴行を加へ、全支の我國民の生命と財産を甚しき危險に陷入れしめた」と。

兎も角、日本にとつて上海居留民の愁訴は實際取るに足らぬ些事なのである。日本を苦慮せしめるものは支那通貨に對する囂々たる非難である。先日、日本は北京に新しく中國聯合準備銀行を開設し、その發行紙幣を北支に於ける法貨とした。既に一九三五年、支那の銀本位制は立行かなくなつたので、サー・リース・ロスの指導に依り幣制を改革したのであるが、これは英米政府に好感を與へてゐたのである。

權威ある月刊雜誌「東洋經濟新報」（東京發行）でさへ、經濟的に見て支那の幣制改革は健全なる發展をなしてゐる事を認めてゐた。日支事變は必然の結果として財政的危機を齎らした。けれども支那政府は支那の銀行の資金の回收と讓渡の嚴密なる制限をなして之に備へた。爲替市場は制限を免がれ外國銀行は正當なる理由ある場合にのみ爲替

取組をなす事を保證した。その結果支那弗の爲替は殆んど變動のない相場を維持し得たのである。

中國聯合準備銀行の新通貨は事變以來外國資本を脅す最も惡材料であると信ぜられてゐるとは、天津商業會議所會頭の意見であるがこの危險に抗する爲に支那政府は政府の外國爲替賣買の管理を上海の中央銀行から香港に支店を有する漢口の銀行の新しい本店に讓渡した。けれども「オリエンタル・アフエアース」に依れば上海の市況は新準備銀行の活動開始の結果、「混沌と痲痺」狀態に陥入り、事實上杜絶してしまつたと見てゐる。尙北支の狀況が如何であらうとも香港、上海の爲替相場は日々發表せられてゐて大なる變動は見られない。我々はその成行を靜觀すべきである、云々。

資料欄

○佛曆二四七九年運羅營業登記法

佛曆二四七九年營業登記法

第一條　本法は佛曆二四七九年營業登記法と稱す

第二條　本法は官報公布の日より施行す

第三條　經濟大臣は本法の實施を管掌し本法實施の爲め省令の公布係官の選任及其の他必要の命令を發する權限を有す

右省令は官報公布と同時に施行する事を得

第一章　總　則

第四條　本法に於て別段定なき限り

一、大臣とは本法の實施を管掌する職務を有する大臣を謂ふ

二、營業登記官とは大臣の任命せる本法規定の登記を受理する官吏を謂ふ
三、係官とは大臣の任命せる者又は文書により委任を受けたる係官の代理人にして本法の實施に當る者を謂ふ
四、營業人とは生業として營業する人又は法人を謂ひ出資者取締役又は支配人を包括す　但し株式會社の株主を除く
五、營業所とは營業の本據を謂ふ

第五條　左記の事業は本法に因る營業とす
一、賣買、交換、賃貸
二、製造業又は產業
三、仲介業又は營業代辨業
四、陸海空輸送業
五、公　賣
六、兩替業、金貸業、銀行業、不動產抵當貸付業又は信局
七、保險業

第二章　營　業　登　記

第六條　大臣はプラナコーン縣に營業登記所を設置し之を中央營業登記所と稱しプラナコーン及トンブリー縣內の登記を受理する係官を置く　其の他の縣に於ては大臣は登記を受理する營業登記所を設置し中央營業登記所に直屬せしむ

第七條　營業登記につきては營業人は本店所在地の營業登記所に於て登記をなすべし
本店を外國に有し暹羅國にて營業に從事する者は支店所在地の登記所に登記をなすべし

第八條　登記の申請に於ては大臣が省令によりて規定せる書式代の外は手數料を徵收するを得す　但し右書式代は一銖を超過することを得す

第九條　大臣は官報を以て營業人に對し第五條に列擧せる營業の內何れの種類を何れの地區に於て省令規定の書式により營業登記をなすべきやを隨時命令する權限を有す

第十條　大臣が第九條により商業の種類を公布せる時は營業人は其の日より起算し三十日以內に指定地區內の營業登記所に於て登記をなすべし
前項規定の期間は大臣の裁定により更に之を延期することを得

第十一條　大臣が第九條により布告をなしたる後營業に從事する營業人は營業開始の日より起算し三十日以內に登記をなすべし

第十二條　本法の規定は左記の者に對しては之を適用せず
一、呼賣露店
二、宗教又は慈善事業の爲めにする營業
三、政　府

第十三條　營業登記は左記事項につきてなすべし

一、營業人の姓名、年齢、種族國籍及住所
二、商號あるときは商號
三、營業の種類
四、本店、支店及商業代行者の所在地
五、邏羅國に營業開始の日
六、營業登記申請の日
七、以前に營業に從事せることあるときは其の最後の營業の種類と場所及廢業の日と其の理由

第十四條　第十三條に列擧する事項に變更あるか又は營業を廢止せるときは三十日以内に其の旨登記をなすべし

第十五條　營業登記官が登記申請を受理し右申請が法令の規定又は本法によりてなす布告に照し合法なるときは之を登記し申請者に登記證明書を交付す

登記證明書は營業所内の見易き場所に掲示すべし

第十六條　登記を了したるときは營業人は營業に使用する名稱の表札を掲揚すべし　商號なきときは營業人の姓名を記せる表札を掲揚すべし　右名稱は營業登記と合致するものたるべし

右表札を外國語にて記載するときは明白に邏羅字を以て見易き樣添書をなすべし

第十七條　凡ての支店營業所は本店と同一の名稱を使用し且つ同一の表札を掲げ支店なる意味を表示すべし

第十八條　表札の掲揚は營業所の正面に露出して掲揚すべきものにして登記の日より三十日以内に之を完了するを要す

第十九條　營業登記官は營業人を喚問し登記に關する本項の取調をなす權限を有し且つ營業時間内は何時にても營業登記官又は係官は本法實施の爲め營業所を臨檢する權限を有す　此の場合營業人は營業登記官又は係官に對し必要なる便宜供與をなすを要す

第二十條　何人たるを問はず大臣が其の權限に基き省令によりて規定せる手數料を支拂ひたるときは第十三條の登記事項を閲覽し又は其の謄本を申請することを得

前記手數料は一件につき一銖以上を徴收することを得ず

第三章　罰則及起訴

第二十一條　營業人にして

一、本法の規定する登記をなさゞるもの
二、虚僞の事項を表示せるもの
三、出頭せず又は申立をなさず又は第十九條規定の營業登記官又は係官の臨檢を拒むものは五百銖以下の罰金に處し且つ引續き違反する場合は本法の規定を遵守するに至るまで一日四十銖以下の罰金に處す

第二十二條　本法第十五、十六、十七及十八條の規定に違反するときは五十銖以下の罰金に處し且つ引續き違反する場合は本法の規定を遵守するに至るまで一日五銖以下の罰金に處す。

佛曆二四七九年十一月十九日裁可
十一月二十九日公布

營業登記に關する經濟省布告（第一號）

佛曆二四七九年營業登記法第九條の規定により經濟大臣は左記布告を公布す

プラナコーン及トンブリー縣管内にある左記營業人は本布告公布の日より起算し三十日以内に經濟省商務局中央營業登記所に於て營業登記をなすべし

一、精米業者

一、玄米、白米、碎米、糠の賣買業者にして一回の賣買量麻袋十箇以上又は十八擔以上に達するか或は之等の商品を麻袋十箇以上賣買のため所有する者

佛曆二四八〇年八月二十三日公布

營業登記に關する經濟省布告（第二號）

佛曆二四七九年營業登記法第九條の規則に依り經濟大臣はプラナコーン縣内にある營業人に對する本公布の日より起算し三十日以内に經濟省商務局中央營業登記所に於て營業登記をなすべき布告を發す

一、末尾明細書第一號中の一種又は數種の商品の或る一日の賣上合計二十銖以上なるか又は總計五百銖以上商品を保有する營業人

二、末尾明細書第一號中の一種又は數種の商品を取扱ふ仲介人又は代理人にして其の取扱商品の或る一日の合計二十銖を超過するもの

三、末尾明細書第二號中の一種又は數種の產業に從事し或る一日の製品賣上げ價格總計二十銖を超過するか又は或る一定の時に其の製品價格合計五百銖を超過する商人

四、末尾明細書第三號中の何れかの營業に從事する營業人

佛曆二四八〇年一月三日公布

營業登記に關する經濟省告示（第二號附錄）

第一號明細書

一　生　動　物

獸類、鳥類、魚類、爬蟲類等の生命あるもの

二　飲　食　料　品

粉類にて製せる食料品

小麥粉及其の製品、マカロニー、豆麵、パン、ビスケツト等

食料用雜穀

大豆、落花生、胡麻、玉蜀黍、蓮實其の他米以外の食料用雜穀

獸肉及獸肉製食料品

生獸肉、鹽藏乾藏肉、腸詰、家鴨、鳥鷄肉及其の製品

魚類及水棲動物

鹹水淡水魚及其の鹽藏乾藏、燻製、蒸製品、鑵詰

野　菜　薯　類　果實類　卵　類　燕　巢　乳、乳酪　食料用油

椰　子　調味料　茶、珈琲　酒精類　飲料各種

三　原　料　品

原棉、生絲、木棉、麻、ジュート其の他繊物用原料

樹　皮　樹　脂　生樹及スチツクラツク　木　材　樹木又は果實の油

生　皮　鞣　皮　鑛　物　鑛　油　海産原料品

四　工　業　品

機械類　運輸具　藥劑藥種　染　料　香料化粧品

煙　草　紙　紐及絲

第二號明細書

各種製造業（屠殺業をも含む）百三十一種引擧（省略）

第三號明細書

水陸運送業　公賣業　土地賣買業　金貸業　兩替業

銀行、金融業、信局等　質屋業　宿屋業　製材所

○暹羅國一九三九年度豫算

暹羅大藏省は佛曆二四八一年度（一九三八年四月一日より一九三九年三月三十一日に至る會計年度）の豫算を次の如く査定し之を發表した。

一、歳出豫算　一〇九、三九七、九八八　未滿

二、歳入豫算　一〇九、四二五、九四〇　未滿

三、資本的支出　二二、一〇八、五二四　未滿

（大藏省準備金ヨリ借入レタルモノ）

歳入豫算

項目	一九三八年度豫算	一九三九年度豫算	增減
政府財産收入			
一、森林收入	三、六六三、三〇〇	四、〇二〇、〇〇〇	(+) 三五六、七〇〇
二、鑛山收入	五、五一〇、八〇〇	五、四四九、五九八	(−) 六一、二〇二
三、政府財産賣却竝賃貸料	五四〇、七六七	四四四、三六九	(−) 九六、三九八
總計	九、七一四、八六七	九、九一三、九六七	(+) 一九九、一〇〇
政府事業收入			
一、鐵道收入	一三、二二〇、〇〇〇	一三、八六五、〇〇〇	(+) 六四五、〇〇〇
二、郵便電信收入	二、五〇〇、〇〇〇	二、七一〇、〇〇〇	(+) 二一〇、〇〇〇
三、盤谷水道收入	九六〇、〇〇〇	八五〇、〇〇〇	(−) 一一〇、〇〇〇
四、サムセン及チエンマイ發電所收入	一、〇一三、六〇〇	一、一〇四、〇〇〇	(+) 九〇、四〇〇
計	一七、六九三、六〇〇	一八、五二九、〇〇〇	(+) 八三五、四〇〇

利子及手數料	一、〇四七、五〇〇	九四二、〇〇〇	(一) 一〇五、五〇〇
直接稅			
一、土地收入	五、四二八、五〇〇	五、七九八、五〇〇	(+) 三七〇、〇〇〇
二、家屋稅	一一、〇〇〇	五八、〇〇〇	(+) 四七、〇〇〇
三、人頭稅	六、四五〇、〇〇〇	六、八〇〇、〇〇〇	(+) 三五〇、〇〇〇
四、所得稅、俸給稅	一、三〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、〇〇〇	(+) 一〇〇、〇〇〇
五、銀行稅、保險稅	八〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	
六、營業稅、職業稅	二五〇、〇〇〇	四七〇、〇〇〇	(+) 二二〇、〇〇〇
計	一三、五一九、五〇〇	一四、六〇六、五〇〇	(+) 一、〇八七、〇〇〇
其ノ他ノ租稅			
一、關稅	三一、〇七二、五〇〇	三四、九一五、一二〇	(+) 三、八四二、六二〇
二、消費稅	七、二九二、〇〇〇	七、二〇七、〇八〇	(−) 八四、九二〇
三、漁業稅	六〇〇、〇〇〇	六三〇、〇〇〇	(+) 三〇、〇〇〇
四、印紙稅	二四〇、〇〇〇	二九〇、〇〇〇	(+) 五〇、〇〇〇
五、財產稅、相續稅	七五、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	(−) 四五、〇〇〇
計	三九、二七九、五〇〇	四三、〇七二、二〇〇	(+) 三、七九二、七〇〇
阿片收入	一〇、八〇〇、〇〇〇	一〇、〇一〇、〇〇〇	(−) 七九〇、〇〇〇

手數料、罰金及特許料			
一、司法手數料及罰金	一、二四〇、〇〇〇	一、二九一、〇〇〇	(+) 五一、〇〇〇
二、地方官廳手數料	四一九、五〇〇	五三五、三〇〇	(+) 一一五、八〇〇
三、屠殺所特許料	二、九九一、二九三	一、〇九〇、〇〇〇	(−) 一、九〇一、二九三
四、カルタ及賭物特許料	一、四〇〇、〇〇〇	一、五五〇、〇〇〇	(+) 一五〇、〇〇〇
五、船舶登錄手數料	七四〇、〇〇〇	七一〇、〇〇〇	(−) 三〇、〇〇〇
六、地券登錄手數料	六六七、〇〇〇	八〇七、五〇〇	(+) 一四〇、五〇〇
七、入國手數料	一一、六〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	(+) 四〇〇、〇〇〇
八、車輛特許料	九三八、三七六	六二六、〇八八	(−) 三一二、二八八
九、其他手數料及罰金及特許料	一、八一八、二六九	二、二一〇、一〇五	(+) 三九一、八三六
計	一一、八二四、四三八	一〇、八一九、九九三	(−) 九九四、四四五
雜收入	一、〇二一、七三九	一、五三二、二八〇	(+) 五一〇、五四一
歲入總計	一〇四、八九一、一四四	一〇九、四二五、九四〇	(+) 一、五三四、七九六

項目	歲出豫算	一九三八年度豫算	增減
內帑金	一九三七年度豫算		
國債	四五五、二〇〇	四五五、二〇〇	

項目	一九三八年度豫算	一九三九年度豫算	增減
外債	七、二六八、九二九	五、四四九、五〇七	(−) 一、八一九、四二二
內債	一、二〇二、五〇〇	一、四五三、〇〇〇	(+) 二五〇、五〇〇
計	八、四七一、四二九	六、九〇二、五〇七	(−) 一、五六八、九二二
契約ニ依ル支辨			
一、ラオ王族給與	一六七、四〇〇	一六七、四〇〇	
二、森林稅轉附	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	(−)
三、雜轉附	二一、八七八	二〇、六七七	(−) 一、〇〇〇
四、國際聯盟費	三〇、〇〇〇	九六、四六七	(−) 三三、五三三
五、文武官恩給	六、四三〇、〇〇〇	六、七六〇、〇〇〇	(+) 三三〇、〇〇〇
計	六、七五九、二七七	七、〇四五、五四四	(+) 二九五、二六七
議會	四二四、一七三	五二六、九六四	(+) 一〇二、七九一
總理官房			
秘書課	一〇七、八九七	一〇八、六〇四	(+) 七〇七
國務參議院書記課	二五二、八三六	二五三、五八二	(+) 七四六
法制審議委員會	一三九、一四二	一三九、一四二	
文官登庸委員會	五三七、九四二	六六〇、七三九	(+) 一二二、七九七
會計檢査會議	二六一、九六五	二六四、九六五	(+) 三、〇〇〇
情報部	一〇七、六二七	一〇〇、四〇八	(−) 七、二二九
計	四〇七、四一九	一、五二七、四四〇	(+) 一二〇、〇二一
國防省			
大臣官房			
總務部			
陸軍	二六、〇〇〇、〇〇〇	二六、〇〇〇、〇〇〇	
海軍			
空軍			
海軍擴張費	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
計	二七、〇〇〇、〇〇〇	二七、〇〇〇、〇〇〇	
大藏省			
大臣官房	四一、四六三	四一、八二〇	(+) 三五七
總務部	四〇、〇八一	一五七、九八五	(+) 一七、九〇四
國庫局	五六七、五八三	六〇五、六〇三	(+) 三八、〇一七
會計檢査局	八一七、五〇一	八三四、四三八	(+) 一六、五三七
倉庫局	四七、四四八	四八、〇〇〇	(+) 一、二五二

關稅局	八六三、九八二	九二二、三〇五	(+) 五八、三二三
消費稅局	二、二二四、三一五	二、一九六、〇二六	(−) 二八、二八九
主稅局	二、六一一、一七三	二、六二九、四二四	(+) 一八、二五一
計	七、三一三、五四六	七、四三六、二九八	(+) 一二二、七五二
外務省			
大臣官房	二五、一四一	二五、〇八〇	(−) 六一
總務部	一七一、一一八		
政務局	八九、三四〇	八五七、一三七	(+) 二八、〇四五
在外公使館及領事館	五六八、六三四		
計	八五四、二三三	八八二、二一七	(+) 二、九八四
文部省			
大臣官房	二六、七六〇	二六、七九六	(+) 三六
總務部	八九五、二〇九	一、〇〇五、九八二	(+) 一一〇、七七四
宗教局	一九七、一九五	一九四、一三六	(−) 三、〇五九
體育局	一三二、三四一	一三一、九四一	(−) 四〇〇
大學局	九二九、〇八一	一、二六二、七七四	(+) 三三三、六三九
美術局	三二四、二一七	二八九、一六〇	(−) 三五、〇五七
教育局	一、三四四、〇四八	三、七一九、五五〇	(+) 三七五、五〇二
初等教育局	六、一九七、八二六	七、六九七、八二六	(+) 一、五〇〇、〇〇〇
國立試驗所	八、〇〇〇	八、〇〇〇	
計	一二、〇五四、六七七	一四、三三六、一六六	(+) 二、二八一、四八九
內務省			
大臣官房	三六、一三五	五〇、五四四	(+) 一四、四〇九
總務部	四六九、八九二	六二七、八八八	(+) 一五七、九九六
內務局	四、八八九、六三八	四、四四一、七五四	(−) 四四七、八八四
警保局	六、八一二、二一二	七、四九〇、〇一一	(+) 六七七、七九九
刑務局	二、一五〇、六〇六	二、五〇四、一〇〇	(+) 三五三、四九四
衛生局	二、〇一六、四一一	二、〇一六、〇二八	(−) 三八三
檢事局	八七三、四四六	一、〇〇四、九一一	(+) 一三一、四六五
地方局	三、四三〇、四九五	三、八八七、三九九	(+) 四五六、九〇四
計	二〇、六七八、八三五	二、〇二二、六三五	(+) 一、三四三、八〇〇
司法省			
大臣官房	二三、三九六	二三、四〇〇	(+) 四
總務部	一九八、八〇九	一九九、〇〇二	(+) 一九三

裁判所	二、一〇一、三五八	二、一六四、七四三	(+) 六三、五八三
計	二、三二三、五六三	二、三八七、一四五	(+) 六三、五八三
宮内省			
大臣官房			
總務部	四八六、六二三	六一七、七二三	(+) 一三一、一〇〇
内帑局			
侍從職	五〇、三七三	四九、七五八	(−) 六一五
計	五三六、九五六	六六七、四八一	(+) 一三〇、四八五
經濟省			
大臣官房	四三、三〇三	四三、二九六	(−) 七
總務部	一〇二、六九九	一四〇、一四四	(+) 三七、四四五
港務局	三八八、九四四	四三五、三四四	(+) 四六、四〇〇
商業登錄局	一二二、二九九	一二二、四六四	(+) 一六五
郵便電信局	二、三六〇、〇四七	二、四三四、五九四	(+) 七四、五四七
通信局	二三九、八九七	二九五、二五六	(+) 五五、三五九
調査局	二一五、〇七四	二九四、九九三	(+) 七九、九一九
鐵道局	八、三六九、五一六	八、九三九、一七五	(+) 五六九、六五九
計	一一一、八四一、七七九	一二、七〇五、二六六	(+) 八六三、四八七
農務省			
大臣官房	二六、七四七	四〇、一六〇	(+) 一四、四一三
總務部	六七、五九八	六六、四八一	(−) 一、一一七
水産農務局	一、二三二、〇四三	一、三九五、〇〇九	(+) 一六一、九六六
灌漑局	一、二九四、七四七	一、三九〇、一二四	(+) 九五、三七七
土地鑛山局	一、〇四七、一五〇	一、四〇九、二八七	(+) 三六二、一三七
森林局	八二二、六五〇	八四五、一五〇	(+) 二二、五〇〇
産業組合局	一六八、六〇三	二四六、九一四	(+) 七七八、三一一
計	六六〇、五三八	五、三九四、一二五	(+) 七三三、五八七
雜	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	
總計	一〇四、八八一、六六五	一〇九、三九七、九八八	(+) 四、五一六、三二三

資本的支出

項目	一九三八年度豫算	一九三九年度豫算	增減
鐵道建設	二、三四九、七〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	(+) 一五〇、三〇〇
灌漑工事	一、九五〇、二二四	二、〇〇〇、〇〇〇	(+) 四九、七七六
郵便局	六三三、九五三	三五二、〇七〇	(−) 二八一、八八三

産業組合	一、〇〇〇、〇〇〇	――	(一)	一、〇〇〇、〇〇〇
民間飛行場	一七、九〇〇	二三、二八〇	(+)	五、三八〇
國道建設	五、七〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	(+)	一、三〇〇、〇〇〇
其他道路建設	三〇〇、〇〇〇	四一一、二〇〇	(+)	一一一、二〇〇
製紙工場	八三六、五五二	四五七、四一四	(一)	三七九、一三八
ナショナルスタディアム	八八、一八六	四〇〇、〇〇〇	(+)	三一一、八一四
水先案内料	四九、五〇〇	――	(一)	四九、五〇〇
ガソリンタンク	六八四、七二三	一、一二六、七〇〇	(+)	四四〇、九七七
紡績事業	七七六、五一〇	七五九、四三〇	(一)	一七、〇八〇
家畜産業	二五、〇〇〇	――	(一)	二五、〇〇〇
製藥事業	五〇、〇〇〇	――	(一)	五〇、〇〇〇
サムセン發電所用タービン	一〇〇、〇〇〇	七五、〇〇〇	(一)	二五、〇〇〇
製糖事業	一、二五〇、〇〇〇	二四三、八〇〇	(一)	一、〇〇六、一〇〇
家内工業	五三、四〇〇	六、六八〇	(一)	四六、七六〇
絹糸紡績業	七五、〇〇〇	三七、八五〇	(一)	三七、一五〇
初等教育基金へ償却金	一、九五一、七〇〇	――	(一)	一、九五一、七〇〇
盤谷港改修費	二、九二四、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	(+)	一、〇七六、〇〇〇
放送局	一三〇、〇〇〇	三七〇、〇〇〇	(+)	二四〇、〇〇〇
海軍充實費	六、〇〇〇、〇〇〇	――	(一)	六、〇〇〇、〇〇〇
農事試驗所	二一〇、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	(+)	七〇、〇〇〇
馬匹飼育場	――	五〇、〇〇〇	(+)	五〇、〇〇〇
職業學校校舍	――	一、四〇〇、〇〇〇	(+)	一、四〇〇、〇〇〇
ツーリスト ビューロー	――	五、〇〇〇	(+)	五、〇〇〇
繊維工業助成費	――	五〇、〇〇〇	(+)	五〇、〇〇〇
植物油製造工場	――	二〇〇、〇〇〇	(+)	二〇〇、〇〇〇
暹羅米輸出助成費	――	五〇〇、〇〇〇	(+)	五〇〇、〇〇〇
總計	二七、一五七、三八八	二、一〇八、五二四	(一)	五、〇四八、八六四

○最近の暹羅教育界の展望

奥野金三郎

筆者は嘗て在暹日本公使館に勤務せられた事がある。暹羅研究家で現在は臺北高等商業學校講師をして居られる。

教育制度の刷新

三大國策の一としての教育の普及發達、プラヤー・パホン内閣は教育の普及發達を三大國策の一に掲げ、革命の元動にして有力閣僚の一人たる軍令部長ルワン・シン・ソンクラームチヤイ氏（嘗て我國に來朝したることあり）を文部大臣とし、一九三七年度に於ては一二、〇五四、六七七銖（總豫算の一一％）を更に本年度に於ては一四、三三六、一六六銖（總豫算額の一三％）といふ遲羅文部省としては空前の大豫算を以て教育の振興、普及發達に格段の努力を拂ひつゝあり。

學制の改革、一九三七年三月十七日附を以て實施せられたる新學制によれば、第一次普通教育尋常科四箇年は之を義務教育として、學齢（普通八歳なるも事情に由り一〇歳迄延期することを得）に達したる兒童に對し義務的に入學せしめて、一四歳迄に必ず修得せしめ、從來に於けるが如き各人勝手な修學方法を採擇することを許さず、又五、六年の補習科は廢止されることゝなつた。又第二次普通教育に於ては修業年限を從來の八箇年より六箇年に短縮して尋常中學三箇年高等中學三箇年とし、以上義務教育四箇年に第二次普通教育六箇年都合一〇箇年を以て普通教育を修了したるものと認め、更に進學を希望するものは、大學豫科に入學するのである。尚職業學校は義務教育、尋常中學、高等中學の修了者を、夫々相當學年に編入し、本人の希望する職業知識を授けるもので、政府は本年度に於て豫算八〇〇、〇〇〇銖を以て地方六六縣に九〇校の職業學校を設立する計畫を立てゝ居る。如上の如く第二次普通教育年限が六箇年に短縮せられたる結果は將來地方の普通教育を振興する上に非常な便益を與へるもので、從來の如き盤谷偏重による教育の機會均等を失するの甚しき缺を補ひ、且上級校への進學をより圓滑ならしめるものとして各方面より歡迎せられて居る。

奬學規定、文部省に於ては學制改革の外、左の如き奬學規定を設け左記各項の一に該當する者には學資の一部又は全部を補給することゝした。

一、成績特に優秀なる者

二、一定數以上に多數の學童を持つ親達

三、特に學校に功勞ある者の子弟

四、邊陬の地より選拔せられ、將來教育者として立つ希望ある者

五、師範學校生徒

教員の地位改善、從來教員の進級は一に在職年限のみにより裁定せられるの弊あり、斯る方法は時代の趨勢に合致するものに非ずとなし、右の制度を撤廢し、實力本位による選拔主義が採用せらるゝことゝなつた。

私立學校令、佛暦二四七九年私立學校令は私立學校の基礎を強固にし、その統制發達を主眼として制定せられたるもので、右の外私立學校に對する補助金規定をも設けて居るが、現在右規定により補助を受けつゝある私立學校はアムヌエイシラパ、シータブツト、バムルグナンタスクサーの三校である。

次に義務教育、職業教育、普通教育、專門教育に就き、最近の趨勢を辿れば、一九三六年末、義務教育令追加條項が地方未就學區に適用せらるゝや、之等各町村に於ては、急遽小學校の設立に着手。翌一九三七年末には全國各町村に漏なく、小學校が設立せられるに至つた。政府は昨年度豫算に於て義務教育實、六、一九七、八二六銖を計上し之を、地方各縣に交付して、更に義務教育の普及發達に努めしめ、校舍の本建築に就いては、文部當局に於て愼重研究を重ね、其の決定を待つて、更に豫算を計上することゝなつて居るのであるが、政府の斯かる意氣込に好刺戟を受けた地方の篤志家や僧侶は進んで學校設立を計畫し、各自に金錢を據出し、或は勞力を提供して昨年中に小學校の設立

を見たもの六四縣、四一九校に達し、右に對する文部省の補助額は二二二、八七五銖に上つてゐる。

右の外寺院學校も續々建設せられ、ラチヤブリのプーン寺院學校（設立費一〇、九三三銖）又カーンチヤナブリーのインタラーム寺院學校（設立費一三、一三九銖）の兩校に對してはその功績最も大なるものとして特に文部省から賞狀が授けられてゐる。尙之等公立學校の直接監督に當る縣及郡各學務當局の人員を充實し、其他、公立學校の設立移動、教員に對する賞罰規定を設け、教員給料を從來の最低月額三銖を一擧八銖に引揚げ、圓滿退職者に對する退職賜金の規定をも設けられた。

職業教育

舊學制によれば職業教育は補習科たる小學五六年修了者を收容し居たるが、新學制により補習科は廢止され、義務教育四箇年卒業者も職業教育を受け得る資格を有することゝなりたる爲、新に之等の生徒を收容する初等職業教育の制定に迫られ、差當り先づ教員の短期養成の便法として各縣より公立學校教員を召集し、一箇年乃至三箇年間に職業知識を授けることゝした。一九三六年及一九三七年の之等受講教員數及配屬場所は次の通りである。

一九三六年

一、ワツトソタツト裁縫學校（女）	二名	木工	九名
二、農學校（男）	三二名	塗料職	六名
三、バーンタワーイ女子職業學校	一二名	鍛冶	七名
四、家政女學校	—	左官	四名
五、工業學校	—	計	七二名

一九三七年

	給費生	自費生	計		給費生	自給生	計
一、家政女學校	六八名	二九名	九七名	機織	—	一四七名	一四七名
二、工藝學校				四、工廠			
木工	六三名	五〇名	一一三名	鍛冶	—	六〇名	六〇名
手藝、眞田編	—	四五名	四五名	洋裁（男子）	—	六二名	六二名
左官	—	三六名	三六名	合計	一三一名	四二九名	五六〇名

三、刑務所內授職所

第二次普通教育

第二次普通教育は從來の八箇年制が六箇年制に短縮せられた爲、尋常中學、高等中學共に教育科目及び教科規定に改變が加へられた。而して今回の改正は公民教育に主眼點を置き、公民としての自覺を促す爲、特に公民教育なる一科を設け、現在の遲羅の國家組織及公國民としての權利義務を明かにして、憲法所定の民選議員のみを以て組織する第三期人民代表議會に向つて邁進しつゝあり（現在の人民議會は所謂第二期にして官選民選相半す）。又文部省は國防省と提携して、高等中學生徒に國防の知識を普及せしめんが爲、ユワチョン即ち青年訓練の制度を設け、一朝有事の際に備へると同時に、右訓練終了者には兵役年限を短縮するの特點を與へて居る。

大學教育

チユラロンコン大學、大學長 A. G. Ellis 氏退職の後をうけて、陸軍大臣ルワンビブーン大佐が新に學長に推戴さ

れたことは、種々なる意味に於て非常に歡迎すべきことで、革命の元勳を迎へた同大學の今後の進路が明瞭に指示せられた感がある。昨年中同大學より在外研究を命ぜられたるものは米國三名、英國一名、佛蘭西一名で研究學科は數學、機械工學、醫學、生物學等である。又同大學は電氣工學室の完成、文學科、藥學科教室の擴張、及びラジュームを購入したる外、國母陛下が藥學科の爲、冷房裝置機を御寄贈相成たるを始め、バーヌバン殿下外二殿下より時價三千銖に上る書籍の御寄贈、ピヤー・ピチヤーヌサートの紫外光線セツトの寄附等あり、同大學の內容は近年益々充實し、一大躍進の途上に在りと言ふことが出來る。本年一月現在同大學在學々生數は、文科二三九名、理科八五名、師範部文科二三名、師範部理科九名、生物學科三〇名、醫學部豫科一三五名、醫學科一〇二名、土木科一二六名、建築科三四名、看護助產科一九二名である。

チュラロンコン大學と共に國立大學として、高等行政官を養成するものに文政大學がある。前學期三年、後學期二年とし、前學期は分科を設けず後學期は法科、行政科、經濟科、外交科に分れ、一九三六年、同大學前學期の課程を修了し、大學規則により學費を補給せられたる者一二六名に上つて居る。尙今回制定せられたる新學制により普通教育卒業者を收容する爲上記二大學共に修業年限二箇年の豫科を新設することゝなつた。

體育

暹羅國民の體位の向上を計る爲、文部省體育局は教育局と戮力して體育學校設立の案を立て、目下內閣に上申中である。尙體操教師の養成については文部省は國防省の援助のもとに地方公立學校教師を召集し、九箇月修了の短期體育講習會を開催、六箇月を教練に、三箇月を體操に割當て、一昨年に於ては八〇名、昨年に於ては一八〇名の講習終了者を出した。運動競技に就いても、啻に學生のみならず、一般民衆の此の方面に對する關心を喚起することに努め

今年は特別豫算四〇萬銖を以て綜合大競技場を建設することになつて居る

少年團運動も體育重要部門の一として、體育局の夙に重視するところであり今後益々その發展を期する爲、時代の進運に適應するやう、少年團規定、及組織を改編し、新に海洋少年團を獨立せしめ、其他團服の改裝、綱要の改訂が行はれた。

以上を要約するに暹羅の教育界は今正に黎明期を過ぎて、力强き行進の第一歩を踏出したるものと言ふを得可く、今後の發展は當局者の良き指導と、國民の熱意に待たなければならない。

最後に昨年中に於ける學校數、教員數、及生徒數を示せば次の通り。

	學校數	教員數	生徒數
文部省直轄學校	三〇五	三、〇八〇	六六、八六五
公立學校	八、八一七	二四、〇二九	一、一一三、二九一
寺院學校	六五九	六九四	二八、一三八
私立學校	一、二三一	四、〇七三	八一、〇六五
州立學校	八三	三八〇	一五、八一三

（暹羅教育誌に據る）

○暹羅に於ける英國資本

Institute of Pacific Relations（邦名――太平洋問題調査會）米國事務局機關誌 "Far Eastern Survey," 一九三七年十二月二十二日號にイ・オウ・ハウザ氏は「南東亞細亞に於ける英國の經濟的地盤」と題し長論文を寄稿して居る。右の内「暹羅に於ける英國資本」と云ふ箇所を玆に譯出する。「ハウザー」氏はスキスの「新チューリッヒ新聞」の極東特派員たりし人で、近來屢々その論述を太平洋及び極東關係の諸雜誌に發表してゐる。

二十萬二百三十四平方哩の面積を有し、約一千三百萬の人口を有する暹羅王國は南東亞細亞に於ける唯一の獨立國である。地理的及び軍事的諸理由から、暹羅が英國に接近することは極東に於ける英國の地位にとつて死活的な重要性を有する。暹羅は英國に對し經濟的及び金融的に依存してゐるため、從來政治的方面に於て英國に公然敵對的な態度を採ることができなかつた。しかしながら暹羅に於て自已の勢力を擴大せんとする日本の企圖は英國の立場から見て事態を多少危險化してゐるかの如くである。

暹羅は殆んど英國資本のみによつて發展せしめられて來た。一九三五年三月三十一日に於て暹羅の公債は九千七百二十萬八千七百五十九銖に上つたが、その中八千七百二十萬八千七百五十九銖（七百九十二萬八千六十九磅）は磅公債より成り、殘餘が國際的に募集されたものであつた。鐵道、灌漑及び水道の如き公共事業のために幾回となく起された公債の殆んど全部が倫敦で賣出された。尙ほ倫敦に對する暹羅の經濟的依存は暹羅政府の對外債務償還資金三千十六萬九千八百五十三銖の中、二千萬銖以上が倫敦の諸銀行に預金されてをり、殘餘は暹羅の在外磅基金とされてゐるといふ事實から見ても、明らかである。最後に暹羅は所謂スターリング・ブロックに屬してをり、その通貨は一磅對十一銖の割合で磅にリングされてゐる。暹羅通貨準備の大部分はスターリング有價證券及び紙幣で保有されてゐる。暹羅政府には英國人の財政顧問が常駐せしめられてをり、盤谷にある六つの外國銀行の中三つは英國系である。

英國は暹羅の各種公共事業に莫大な金額を投資してゐるばかりでなく、その私的投資も少なからざる額に上つてゐる。暹羅の重要産業たるチーク伐採經營の根幹は英人の手に握られてをり、一九三七年九月二十八日に倫敦に於て發表された「英暹聯合會社」（Anglo-Siam Corporation, Ltd.）の最近の年次報告は利潤の著しく增大したことを告げてゐる。

暹羅と英國との貿易は所謂「片貿易」である。英國から暹羅への輸入額は一九三五―三六年に於て一千二百五十九萬銖であつたが、英國への輸出額は僅かに百三十萬六千九百九十銖であつた。同年日本からの輸入額は二千七百七十九萬三千銖、日本への輸出額は三百二十四萬七千銖であつた。日本は今日、暹羅の總對外貿易の一一・六％を占めてゐる。しかし全體としての大英帝國は依然として第一位を保持してゐる。一九三五―三六年に於て大英帝國は暹羅の總對外貿易の三七・〇％、輸出の二九・八％、輸入の四二・〇％を占めた。しかもこれらの數字は、暹羅の對外貿易に於て重要な役割を演じてゐる香港及び新嘉坡經由の積換を控除した大英帝國貿易の純價額を表示するものなのである。大英帝國への總輸出額は一億三千四十萬三千三百六十四銖であつた。日本はまだ特別の制限策によつて拘束されてゐないため、最近長足の進出振りを示すに至り、重要な綿製品貿易では事實上の獨占を獲得した。

暹羅の海運では英國は、傳統的特權を有する諸威船に次いで、第二位に立つてゐる。一九三五―三六年に於て盤谷港出入船舶總數二千四十九隻、總噸數二百七十一萬八千八百六十噸の中、英國船は四百四十二隻、八十六萬八千二百五十五噸であつた。

一九三六年十一月五日に暹羅は同國と外國列强との關係を規定した各種條約の破棄を宣言した。それにも拘らず爾來幾多の新條約が締結されたし、又暹羅は日本に對して特惠的諸權利を與へるであらうといふ、二三の外國が抱いてゐた危惧は遂に實現を見なかつた。羅暹に於ては英國の地位は依然として强固なものがあり、暹羅の繁榮は著しく英國の融資と結びついてゐる。とは言へ英國貿易竝びに投資の機會の維持が政治的現狀の持續に少なからず依存してゐることは言ふ迄もない。

日本の陸海軍勢力は現在專ら支那に集中されてゐるし、一方日本を自棄自棄に陷らせる虞れのある國際的制裁行爲も先づあるまいから、日本が南東亞細亞に於て冒險的行動に出る危險は目下切迫してゐるとは思はれない。寧ろ、日本は現在その勢力を北方に集中しなければならない爲、南東方面へのその進出は掣肘されさうな樣子である。若し日本が支那に於て完全な勝利を占めれば、日本支配下の支那領土は日本の對外進出の足場となるわけであるから新たに南方への進出が見られるであらうことは明らかである。（外務省歐亞局第三課譯）

雜　苑

○暹羅留學生と日本語教授法

黑　野　政　市

暹羅學生の現況

暹羅留學生に日本語を何處で、如何なる方法で教へて居るか、又日本語は如何に教授すべきか等の事について筆者の見聞した事、日常考へ、實行して居る事を述べて識者の御示教を仰ぎたいと、多忙な生活の中からペンを取つた。

今日日本に百人餘りの暹羅留學生が居るが、彼等の留學目的が先進國日本の政治經濟、商工業、醫學其他の知識習得であり、この準備に日本語を學習するのであるから、暹羅學生は、日常談話が出來、普通の本が讀め、學校の日本語の講義が理解出來、官廳、會社、工場等で實習したり、研究したりするに間に合ふだけの日本語の知識を必要とするのである。即ち、彼等は、日本語の形態方面の研究でなく、實用方面の知識を必要とするのである。これに對して、何處で、如何なる方法で、日本語が教へられて居るかを述べる。

現在暹羅學生に日本語を教へて居るのは、外務省に直

接關係のある大久保の國際學友會館と、目白英語學校で暹羅學生本位の組をつくつて居る協會員の野口氏と、千川の私塾と、協會所屬の學生會館で主として政府學生の教授に從事して居る私だけである。故に、これ等の所で習つて居ない者は、大抵學生先生から、例外なしに「サイタ　サイタ」を教へられて居る。日本語を學ばないで毎日社會學？　を實習して居る學生も稀にはある。早稲田の國際學院で勉强して居る學生も二名ばかり居るが、芝の日語文化學校には一人も居ない。それではこれ等の處では如何なる方法で日本語が教へられて居るかと言へば、日語文化と私を除いて、皆一樣に、小學校國語新讀本卷一から順次上卷に進んで居るのである。日本人學生先生の教授法もこの例に漏れない。この國語讀本は、私が爰に言ふ迄もなく、東京の中產階級の人達の間に話されて居る言葉を中心とした、所謂標準語であるから、これを教科書と　て教へる事は、誠に結構な思ひつきの樣であるが、これを使用して、暹羅留學生に教授するのが最善と思つたら、暹羅學生への教授の熱意と研究を私は疑はざるを得ない。その理由は後で委しく述べるが、卷一が六七才の幼兒の用語で滿たされて居り、わかり切つた例ではあるが、「サイタ　サイタ　サクラガ　サイタ」「オヒサマ　アカイ　アサヒガ　アカイ」「ココ　マデ　オイデ　ソロソロ　オイデ」等が語法に於ても、內容に於ても、高等學校や大學を卒業した暹羅學生の心理に、如何に合致しないか、これを使用して教へる事が、如何に不適當であるか、何人も疑はぬと思ふ。恐らく、國際學友會館の法學士先生も、經濟學士日本語先生も、「幸に今の小學校の讀本は非常によく出來て居ました好都合です」と言語文化と國語教育（臨時增刊號）で述べられて居る國際學院の神學博士先生も、片手間教授も、學生先生も、この不適當性を少しは氣付いて居るに違ひないが「コイ　コイ　シロ　コイ」を、例外なく續けて居る所に一大原因があるのである。それは暹羅學生の特質の項でも、一面を述べるが、暹羅學生に日本語を教へて居る教師は、何時仕事が無くなるかも知れないのであるから殆んど全部、眞の教授法を研究する意志もなく、餘裕もないのである。この點では、主として英米人宣教師に教へて長い歷史と繁榮を誇る日語文化學校でも同じである。同校十二年度の規則書を見ると、十四名の教師の中十一名が婦人であり、その大部分が花羞しい令孃である。若い娘の方が教へ方が上手なのか、この方が外國人學生を吸收するによいのかと思つても見たが、教師の大部分が學期初めの生徒の多寡に依り、英語で言ふ「ヂョブ」を與へられ、夏休中等は實質的に職を離れるのださうだから、若い女は何かにつけて便利なのかも知れない。筆者が次の樣な事を書いても、この人達の約婚を破る事もあるまいから述べるが、この人達には非常時が附き物で、小學校の先生方より低い報酬で、文字通りの奉仕をして居るとの事である。早稲田の國際學院にしても盛大なものではない。全生徒五十六人ばかり居るが、其中本春入學者の一年生は僅かに九名ばかりである。この樣に、日本語教授機關は、何所も同じ春にならずで、暹羅學生が習つて居る所だけではないが、斯かる狀態から有効な教授が行はれて居ないのは當然すぎる歸結である。これは暹羅學生の日本語教授上大いに考へねばならない問題である。

暹羅留學生の特質

前駐日暹羅公使の歸國談に「日本留學の暹羅學生の中日本人の家庭に下宿して居る私費生は往々下宿を移動する風がある」と言ふ事が會報十號百三十二頁に揭載されて居る。この感は、多數の暹羅學生を知つて居る、筆者も深く抱いて居る。實際「こゝがいけない」「あそこが不都合だ」との下宿に對する不平をよく聞く、そして、日本語學習についてもこの傾向があると大抵の教授者達は言つて居る。一人の個人教師なり同一の學校なり、私塾なりで、一年乃至二年習つて、大學なり、專門學校なり、會社なりに入る生徒は、私費生には少ない樣である。暹羅學生自身、遊ぶ者が多いと言つて居る。官費學生には、斯う言ふ者は少なく、多年教育界にあつて、若い學生を知悉して居る私を驚かす位勉强して居るが、八割以上が私費生であるから、これも、暹羅學生指導上考へね

ばならない問題である。

もう一つの特質は、遲羅學生が、全體として、學校なり、官廳なり、會社工場なりに早く入るのを焦る事である。日本へ來て半年も日本語を習はない中に、入つて、私達を驚かした者も居るが、この種の學生は大抵中途半端な研究で歸國しなければならない運命に置かれて居る。一例を擧げればBはR大學の本科一年である。學校へは毎日の樣に行つて居る樣だが、豫科三年間を日本語の教科書なしで通つて來た。不思議な樣だが、これは事實である。試驗の時には、英語の參考書だけ讀んで行く。そして、英語交りの假名で名答案？ を書く。日本文法だつて、よく出來ないのであるから、隨分新式な活用形が出來上つたらうと、餘計な世話だが、筆者は時々考へて見る。三年の長い年月、筆記しない、讀まない、聽くだけの學校の講義を、よく辛抱して聽いたものだと誰でもこの學生に同情されるであらう。聽く日本語すらも、十分の一以下しか理解出來ないのであるから。然し、このBが遲羅學生中隨一の東京通だと言はれて居るから、御親切な方々は、心配の鉾を收めても大丈夫である。大變な親切者で、新しい學生が來るとすぐ銀座へ連れて行く。それからそれからとほんとうに忙がしいBだ。Bの友人Rも同樣の學校生活を送つて居る。學問に忠實な學生なら、斯んな狀態を續ける事は、到底堪へられないであらう。そして、これはこれは早すぎた。ピョン〳〵〳〵ともとの日本語準備へ戻つて行くであらうが、さうしない所に、一つの特色がある。彼等に取つて、日本の大學は不思議な魅力を持つて居るのかも知れない。多くの遲羅學生にこの傾向が強いから、日本語の準備期間が、全體として、非常に短い。早く〳〵夜が明けて、であるから落付いて勉强する事が出來ない。隨つて、下宿を移すばかりでなく、日本語教師を替へる。そして、結果は大抵惡い。途中で歸國した者もあれば、日本語の勉强を捨てて、社會學？ の研究を熱心にして居る學生も居る。新宿でも、本牧でも、浦和でも、私より通人が居る。玉の井までも探し出したる名探偵學生も居る。然し、これには、この種の一部の學生の放浪狀態だけを責める譯には行かない點がある。東京には、まだ彼等に與へる安息所がないのである。そして、大部分の遲羅學生を赤ん坊として育て上げるのはまだよいとしても、育てる人達が產婆の素養も經驗もないとしたら、生來丈夫な者は何れでも、普通な者や弱い者は、病氣となり生命までも失ふに至るかも知れない。丈夫な者でも、不注意（教授法の缺陷）のため、あたら一命を失はないと誰が保證出來るか、弱い者でも、名醫の看護に依り、立派に成長する事は多多あるし、丈夫な者は、一層丈夫になる事は、あまりにも明かである。所が、實際に於て、遲羅學生の大部分は田舍の取上婆にも劣つた手に委ねられて居るのである。そして遲羅學生は、產婆の善惡は知らないのである。大抵安い方の產婆の店へ流れて行く。其處に滿足が出來なければ、外の店へ行く。どの產婆でも、人の手掛けた赤ん坊の世話はやり惡いのである。それであるから、斯う言ふ遲羅學生の爲に、立派な產院を建てゝやる責任は、日本人にはないだらうか。さうすれば、彼等は立派に育て上げられて、將來感謝の涙に咽ぶに違ひない。私は、彼等のために、遲羅のために、日本のために、この種の機關が一日も早く出來る事を祈つて、日本語教授法へ移る。

初步の日本語教授法

日語文化學校の松宮國語部長は、或日「世界中に日本語位平易な國語はないと思はれる。教へ方が惡いから六ケ敷いのである」と言はれた記憶がある。日本語が、外國語に比して、極めて困難な事は、外國人も日本人も、普通認めて居る樣に、筆者には思はれる。科學的頭腦の持主獨逸人すらも、「日本語を極めるには努力あるのみ」と言はれた話は、あまりに有名である。それでは、外國語に比して、どの位むづかしいかを爰に述べて、これを如何に教へるかに進むのも無益ではあるまい。文理科大學保科教授の國語政策に依ると、世界で一番平易と言はれて居るイタリー語は、表音的で學び易い爲に、小學兒童は入學後六ケ月にして、日刊新聞を音讀する事が出來るとの事である。これに對し、英語は、綴字が歷史的なた

め、イギリスの小學兒童は、イタリーの兒童が九百四十五時間で學ぶ量を三千二百時間要するとの事であるから兩國の兒童が同一の頭腦を有するとすれば、英語はイタリー語の約三・四倍むづかしい事になる。更に前文相平生氏の著書に依れば、英國の小學兒童が或數の語を三十六分で習ふのに、日本の兒童は同數の日本語を學ぶに二百六十八分要し、普通の新聞が讀める樣になる迄に、英國の兒童は二年であるが、日本兒童は八年である。これに依ると、日本語の困難な事は、英語の七・五倍でありイタリー語の二十五倍强になる。

　遲羅語の知識の乏しい筆者は、公使館の山口氏の二著書、協會發行の最近遲羅の話　遲羅日本人會發行の遲羅の事情、其他數冊の英文の書を讀んだが、不幸この難易についての發見が出來なかつた。遲羅學生に聞くと、文法は不整であるが、小學校の二年生でも遲羅語の新聞が讀めると言つて居るし、綴字が英語より規則的であるとの事であるから、表現法の少ない遲羅語は、英語よりも易しいに違ひない。そして、日本語は何倍かむづかしい事になる。斯くすると、日本語は、他國語に比して、極めて困難と言ふ事になるが、これを世界一平易とするには神の如き日本語教授の秘訣があるに違ひない。筆者は昨年五、六二ケ月に亙つて、松宮氏の日本語教授の講習を受け、本年三月まで引續き研究會で部長の指導を受け、身體に無理をした爲に病氣にまでなつて、この神秘の手箱日本語教授法の鍵たる同氏の日本語教科書を手に入れて研究したいと、一度ならず願つたが、同校の嚴重な掟に依つて、同校で講習を受けた他の五百人の日本語教師の卵と同樣に、玉手箱の內容だけは教へられたが、これに必要な鍵は、ある事と、いゝものである事だけは教へられたが、どうした譯か與へられなかつたのである。それ故、筆者としては、松宮氏の日本語教授法、日本語會話卷一、卷二、日本文典を重ね〴〵讀んで、遲羅學生へ日本語を教へるに、少しでも有効にと努めたのである。松宮部長の教授法から引用されてあるのも、其の爲である。

　遲羅學生に日本語を教へる場合に、文字を教へないで言葉だけの日本語を初めに教へるが、私はこの教授に約二週間二十時間を費して居る。日語文化學校でも、殆んど同じ位である。然し、松宮氏は、その著「日本語教授法」五十八頁に、最初「ハタ」を教へる方法に於て、教師は、生徒に對し本も何も見せないで、たゞ音だけを聽取させる事から、着手する。そして、教師が十回位「ハタ」を繰返し、明瞭且正確に發音する。生徒は其をよく聽取し、よく聽取らせてから、教師の言つた通りに、生徒に言はせる。教師は直に引續いて、又一回「ハタ」を言つて、生徒にも又一回その通り言はせる。かくて教師と生徒と交互に數回繰返して「ハタ」の發音を練習するそして發音の稽古が終つた所で、教師は繪畫又は實物を示し、それに依つて、今發音した單語は、この物の名稱である事を生徒に會得させる。最初の日本語教授の主目的は單語の意味を記憶させる爲ではなくて音の練習である。こうして居る中に、發音の練習の傍、自づと言葉の記憶も出來るのである、と述べられて居る。同氏は又、同校教授法研究會の席上で「初步の發音教授に於て、意味が最初から伴ふ事は、却つて生徒の頭を困亂させ、教授を害する。」と言はれて居る。

　これに對して、私は次の樣に考へて居る。

一、節（松宮氏の言はれる單音）の練習は、主として單文中でやる方がよい。

二、發音と意味を初めから一致させる。

三、節と節の區別を對象的にしないで、單文の練習中に各節を正確に發音する樣に導く方がよい。

第一の節の音を單文中で教へる爲に、私は第一時から文を教へ、初めの二週間中に單語百五十、文形二十近くを教へる。そしてこの間に、少數の困難な音節を除き、日本語の殆んど全部の節を言ひ分け、聞き分けられる程度までにする事が出來ると思つて居る。日本語の中には、容易に發音される音節が多くて、遲羅學生が非常に困難とする節は少ない樣である。「ハタ」外四語位の發音教授に一時間を費さなければならないとは、筆者には、どうしても考へられない。また「ハタ」の單語を構成して居る「ハ」「タ」兩節をいくら正確に聽取させ、發音させ、その時には完全に出來たとしても、それだけで發音教授が

完成したと思つたら、大なる誤りである。私は最初二週間の基礎練習期間に各音節の完成を期せず、文字も教へる樣になつてからも、絶えず注意を拂つて、一歩一歩正確な發音が出來る樣に導く方が合理的であると思つて居る。それでは、私は如何なる方法を取つて居るかと言へば、本年度の官費生には、來朝後二三日にして教へ始めたので、十錢白銅を出して「コレハイクラデスカ。」と言つて、生徒に私の言つた通りに言はせた。そして「十センデス。」と自分で言つて、すぐ生徒に發音させた。次に五錢を出して「コレハイクラデスカ。」と言ひ、生徒に前と同じ樣に言はせて、又「五センデス。」と言つてやつて生徒に言はせた。三回目に一錢銅貨を出して、前の樣な質問を一人の生徒にしたら、「一センデス」と答へた。この練習を、金額をかへて、尙十回ばかり繰返して、一錢から十錢まで齊唱して、一先づ止め、机の上にあつた鉛筆を取つて、「コレハイクラデスカ。」と一人の生徒に問ふたら、「五センデス。」の答が出た。次に別の生徒のノートを取つて、値段を聞いたら「二センデス。」と答へたから、「安いですね。」と言つて笑つたら、生徒達は變な顏をしたが、一人が「安いですねは何ですか。」と英語で聞いたから、意味を言つてやつたら、生徒は一回で「安いですね。」を覺えた。第一時に於て、この種の文を加へることには反對される方があるかも知れないが、「コレハイクラデスカ。」が「サイタ サイタ」に比して、如何に實際的でも、この文形だけの反復に一時間を過すなら生徒はどれ程無味退屈に苦しむか知れない。故に、斯かる情味ある變化を與へて、これを緩和する必要がある。この樣にして習得される語が非常に多く、非常に永續性がある事を忘れて居る者が多い。これが後に述べる言葉の生活に於ける習得である。學習に於ける習得だけを考へて、爰に注意する教師の少ないのは殘念である。私は日語文化の松宮部長の樣に、「ガアリマス」の文例を菊判五十五頁、四百例もあげて、同一文形を反復練習し、連續的、集中的にしないで、長い時間に分配して練習する方が有効と考へて居る。少し横道へ入り込んだが、「コレハイクラデスカ。」の如き文形は、二十回も繰返して練習すると、意味が大抵わかる。完全にわからなくてもよいのである。言葉の教授に於て、最初から完成を期すると勁きが取れなくなる。次には「コレハ十錢デスカ。」の如き間接疑問を教へるのであるが、この場合にも、最初は答を教へてやる。そして手近な物を取り上げて練習を續ける。この文形の反復には、大抵前の文形の時に教へた單語を使用する。四五回の反復の後、五十錢銀貨を出して「コレハ五センデスカ。」と聞くと、英語の出來る生徒なら「ノウ」と答へる。其の時に私は「ソウデハアリマセン」と言つて、生徒にも言はせる。次に萬年筆を取つて「コレハ十センデスカ。」と聞くと、「ソウデハアリマセン。」と言ひはぐりはない。こんな時に「ホントウデスカ。」でも使ふと、實によく覺えるものである。この位で第一時の教授を終るのであるが、この時間に文形五、單語四五十が出來上るのであるが、どの外國人でも、金の事は實によく覺えるものである。この練習だけで「デ」「ス」の如き節は百回以上も反復發音される。そしてこれだけの練習で完全に近くなる節さへ出來る。第二時には、第一時で教へた文形、單語の復習を先にする。それから新らしい文形單語へと進み、二週間の後には、前述の文形單語は容易に教へられ、發音も平易な唇音から順次完成を急ぎ、暹羅學生が困難とする少數の音節だけが、私と生徒との間に長期戰をさせるのである。「デ」音節等は、暹羅學生に取つては、決して平易なものではない。「ス」節と同じ樣に寧ろ困難な節の一つであるが、この樣に何十回も文中で繰返されて居る中に雜作なく征服されて仕舞ふ。そして次に出て來る「デ」節の含まれて居る語句「でんわ」「でんしや」「そこで」等の中の「デ」節を完全にする基礎となる。發音教授に於て、堅固なトーチカを破る方法は、決して松宮氏の採られて居る樣な、意識から無意識へ移つて行く單語練習法とは考へられない。意識要素を少くした文中の練習と確信して居る。かくすれば外國人學生は、殆んど全部の日本語發音を急速に、しかも完全に學習出來るのである。暹羅學生が最も困難とする「サ」行の「シス」、「タ」行の「チツ」、「ダ」行「ダデド」等の音節を正確にするには、私はいつも「デ

ス」「ミマシタ」「イキマシタ」等から進むのである。實際どこの外國人でも、これ等の音節を以上の句の中では不思議によく發音する樣である。一口に言へば、私の發音教授は、生徒の母國語の要素から、日本語發音の征服にかゝらず、文中の反復に依つて完成を期し、困難な音は、練習に依つて慣れた日本音節の要素から、征服するのである。例へば、邏羅學生には、「シロイ」が「チロイ」となる傾向が強い。これを正確にするには、「シロイ」だけを反復して模倣させても効果が少ない。「シ」節を離してもいけない。「ミマシタ」等の如き文中で完成したものを練習してから「シロイ」をやると大抵よく出來る。困難な「ツ」に就いても同樣である。「ヒトツ」「フタツ」等の中の「ツ」節は發音出來るが「ミツツ」「イツツ」の中の「ツ」は「チ」になる。學的に說明すればこの場合「ツ」の前の音は何れも「イ」であり、これを發音する時の舌の位置は軟口蓋に近く、この音から「ツ」音へ移るに、「チ」を發音する位置を過ぎるのである。そして、そのために「ミツツ」「イツツ」が「ミツチ」「イチチ」になるのである。それ故、「ヒトツ」「フタツ」「ムツツ」等を繰返して、「ミツツ」と發音させると、必ずよく出來る。私は、稀には、單音節の練習もやり、發聲器官に訴へる事もあるが、同一音節の反復は、必ずしも同一音の反復とならず、生徒を臆病にさせて効果が少ない樣である。「シ」音節を發音する時の舌の位置等を說明しても、松宮部長の言はれる樣に、教師の口の恰好を生徒に注意して見させても、決して立派な發音に導く事は出來ない。發音器官の事は教授者だけが知つて居て、教授者自身の發音を正確にすべきものである。私は、文を發音して、發音教授をする事を中心とするが、これでよく出來ない時には、句の發音、節の發音も練習するが、素音に分解する必要は全然認めない。松宮部長の樣に、單語中の節を初めから正確にする事を期すると、どの場合の節が一番普通か隨分困る。例へば、「デ」節でも、前後の音節の種類に依り調音域を異にする。亦「デ」音節にアクセントの有無に依り、「デ」節を含む語の音節數に依り、時にはその品種により、高低その他の音變化が起つて來る。それ故最初から、ある語中だけで「デ」音節を正確に教授練習しようとする事は極めて危險であり、本當の「デ」に一番遠い「デ」を練習して居ないと誰も保證出來ない。故に、松宮氏のこの方法は、一見王道の樣であつても、邪道ではないかと思ふ。「ダ」でも、「ド」でも、其他の困難な音でも、私の主張する樣に指導すれば教授者の不斷の努力と注意に依つて、いくつかの段階を經て、正確な音節となると思ふ。要は理論の上に建てた實際である事である。

以上は文中心に音節を教授する私の考を述べたのであるが、次には發音教授に於て、必ず意味が伴はなければならない事を說いて見る。話す言葉に要素がある。外部要素と內部要素である。勿論前者は發音で後者は意味である。日本語教授の初步に於て、ある期間、書いた日本語の教授をしない事は不動の原則で、少くとも言語學の一頁を開いた者ならやらないと思ふ。して見れば、話す言葉を最初に教へるのに異論はないが、この中の兩要素を初めから併行させるか分離させるかの問題が起る。松宮氏は、兩要素を同時に教へる事は生徒の頭を困亂させて、發音教授の妨害をなすと述べて居る。然し、私は意味の伴はない時は興味がなく、それは却つて生徒の心的狀態を無視した不自然な方法で、寧ろ有害と考へて居る。言葉の教授を學習者の心理發達と併行させる事は困難ではあるが、言葉は、なるべく、其の活動の實際的姿で學習しなくては、到底有効な結果を得る事は出來ないと思ふ。故に、「ハタ」「ハナ」の教授には旗と花を實物なり繪畫なりで見せて、「ハタ」「ハナ」と教師が發音し、生徒に言はせるのである。この場合、「ハタ」「ハナ」を文中に入れて練習すれば、一層有效である事は前にも述べた。初步の日本語教授は、發音が中心であるが、これにはいつも意味が伴つた方がよいのである。意味の伴つた文形の練習の傍、教授者の努力に依り、自づと發音の教授も出來るのである。これが第二の相違點である。第三は、音節を對象的に教授しない事である。松宮氏の日本語讀本の三頁に「ヒバシ」と「ヒバチ」と言ふ教材がある。この中の「ヒバチ」は、この本で初めて出て來るの

であるから、「チ」は生徒が最初に接する音節である。「シ」はその前に「ハシ」「ナシ」等の中に出て居る。私はさる日、松宮氏に會つて、「ヒバシ」の「シ」と「ヒバチ」の「チ」は一番聞分け困難な場合の音節の樣に思はれるが、こゝへ出したのは、兩音節の差違を生徒に聞分け、言ひ分けさせる爲にと思はれるがとの質問をした事がある。これに對して、松宮氏は「左樣である。この區別を第一時に於てする樣にしなければいけない」と答へられた記憶が今もはつきりして居る。要するに、松宮氏のお考は「チ」音節と「シ」音節との區別はかくの通りとその差を最初から生徒に意識させて教授する事である卽ち對象的に教へるのである。この點が私には不合理の樣に思はれてならない。意識要素を出來るだけ少なくして、實際生活に於ける言葉の習得の如く教授するのが私の持論であり、これが各部門の言語教授に必要ではないかと思ふ。松宮氏自身これを言明されて居り、それが氏の教授の中心であると言はれて居るが、實際は私が說いた樣に違ふ樣である。私は言語教授に從事する事十五年、自からも英語を自由に話し、日本語を教へ始めてから、亦他の外國語を學び、乏しい科學的研究の實驗臺に自からも立てゝ、各國人に接し、各國人の外國語の特質を出來るだけ觀察した結果から綜合して、日本人の英語と、英語が外國語である外國人のそれとを比較して、日本人の英語にどれだけ意識要素が多いかに今更ながら驚いて居る。英語教授に於て、文の各語に返り點をつける教師は今では田舍の學校からは追出されたが、東京にはこの古典的存在？が稀にあると聞いて居る。定冠詞第一條は特定、第二條何々と教へる法律家教師は確かに大東京で發見される。助動詞＋現在形＝未來。助動詞＋現在完了＝未來完了と公式を初めに教へる代數式教師は隨分多い。後節で述べるが、わが松宮部長の教授法もこれに近い樣に筆者には思はれるが事實はどうか。兎に角今日の英語教授は實際的にはなつて居るが、教授者の大部分が英語が話せないのであるから、自然英語の形態に就ての通性通則の知識を得させる事に力を注ぐ。故に、日本人の英語と英語が母國語でない外國人のそれと比較して、一番私の目につくのは意識分子である。私はこの要素を少なくすれば、言葉は自然に、有効に習得されると思つて居る。日本語の發音教授もこの通りである。出來るだけ多く練習してやるに限る。そして、それは無意味の反復でなく日本語の生活をさせる樣に導くことである。「デ」等は邏羅人には困難な音節であるが、「電車」や「電話」の發音はよく出來る。「ど」もその一つであるが、「どうぞ」は日本人同樣に發音する。どうも驚く外はない。して見れば「シ」と「チ」も對立させずに、毎日の生活教授中、「シ」は前に言つた樣な「デシタ」「イキマシタ」「ワタクシ」「シリマセン」等から、又「チ」は「チカテツ」「チイサイ」「チカイ」等から徐々に完成されて行く。「シ」と「チ」を「ヒバシ」「ヒバチ」の如き僅か一語の反復に依つて、正確を期すると、自然兩音節だけの繰返しが續く。同一節を何回も繰返すと、教師自身の發音が同じでなくなり勝である。生徒の發音が思ふ樣に矯正されない時には、この傾向が甚だしくなつて、兩者の發音が支離滅裂になる事さへある。かゝる教授こそは有害ではないか。「チ」節の近親に「チョ」があるが、これがまた邏羅學生には「ショ」の樣になる。しかし「チョット」だけは至つて上手である。恐らく、この語位實際生活の洗禮を受ける語はないと思ふ。かく考へて來ると、日本語發音の完成は、實生活に於ける反復の多寡が定めるのであつて、學習の多寡ではない。少くとも文中の練習を主として發音教授するのが最善であると信ずる。同じ樣な事をくどく述べたが、一語一語だけの對立に依つて音節の區別をする教授の矛盾を例解したと筆者だけは信じて居る。

文教授の順序

邏羅學生に日本語を教へる場合に如何なる種類の文から教へ始むべきか極めて重大な問題である。大抵の日本語教師は國定教科書を使用するから、「サイタ　サイタ」から始めて居る。これが最善な方法なら、私達が日夜苦勞して研究する必要はない。教授者に取つてこれ程便利な樂な方法はないのである。然し、學習者に取つては正

反對である。「ススメ　ススメ　ヘイタイ　ススメ」「トマレ　トマレ　ナノハナ　ニ」が生徒の日常生活と如何に遠く離れて居るか明らかであらう。これは彼等の生活に關係ある日常語ではなくて兒童詩である。所が大抵の邏羅學生は、最初の間は、これが「櫻が咲きました」の如き日常用語である樣に考へる樣である。そして、この種の文を半月經つても、一月過ぎても使用する事が出來ず、日本人が使用するのに接する機會もないので、彼等が習つて居る日本語と、實際社會の日本語とは全然別なものである事に、徐々に氣が付いて來る。斯うなると、日本語が愈々面白くなくなるから、意志の强固なものでないと、活動やレヴューへ出掛ける回數が多くなる。ダンスホール等で「イヤダワ」等を習つて來て、生きた日本語と思つて平氣で使ふ生徒も出來る。若し、生徒が斯うなつて來たら、この罪を羅羅學生だけに歸するは、あまりに酷ではないか。日本人が、一番大切な初歩の教授法を研究し、これを邏羅學生に施す事に依つて、これと正反對な現象を造り出す事が出來るのである。本年五月中旬から私が教へ始めた生徒に次の樣な例がある。第一時に、私が「コレハイクラデスカ。」を教へたら、其日の午後、日本へ來て四日目であつたが、林檎を買ひに出掛けた。そして、早速習つたばかりの日本語を使つたら、店の者が「十錢デス」と答へたので、「三ツ」と言つて、三十錢拂つて、御手の物の「サヨナラ」を言つて歸つて來た。この生徒は、二週間習はない中に、私に「モウイセタン　イキマス」と日本語で言つて喜んで居た。そして「オビ　ハ　ドコデスカ」「サンガイデス」「コレハイクラデスカ」「十エンデス」「タカイデスネ」「ヤスイオビヲ　ミセテクダサイ」「コレハモメンデスカ」「ワルイデスネ」とデパートの對話を一人で二人前やつて、私を喜ばせた。斯う言ふ風に、日本語を生活に依つて教へ生徒は其の生活が出來る樣に、喜んでその生活をする樣に導く事が、學生の日本語を立派に仕上げる土臺となるのではないかと私は考へて居る。

然し、文教授に於て、言語發達の一般的順序を無視して、最初から複雜な事柄の教授は出來ない。平易な文から複雜な文に進む事に問題はない。日語文化の松宮氏は早くから、初歩の教授に國定教科書を使用する事を非として、氏獨自の方法を立てられて居る。けれども、氏の方法にも大なる缺陷があるのではないかと思ふ。試みに同氏の日本語教授法八十五頁を引用して見ると、次の如くである。「です」も使用範圍の廣い言葉であるから、これから入ると言ふ人もあるが「です」は「であります」の略したものであつて、肯定と否定との言方を比較する時には、「ます」ならば「ます」「ません」と極く分り易い比較を持つて教へ得られるに反して、「です」は「です」に對して、「でありません」と言ふ否定形を以てしなければならぬので、肯定對象などの場合には、「ます」「ません」に比して、頗る不便であるから、「ます」「ません」から入るのが正當の徑路である。

我が松宮部長を除いてこんな微細な點まで注意して教へる教師は、少ないと思ふ。然し、それは、言葉の習得が、後節に理論的に述べる樣に、學習に依つてなされるよりも、寧ろ生活に依つてなされる事に氣が付かない見方、卽ち語學的見地に立つて、形式方面をあまりに重視した考へ方であると思ふ。學習に依るものは、たとへ、その形態は整つて居ても、言葉の生命を摑み、言葉活動に堪える點に於ては、生活に依つて習得したものに及ばないのである。例へば、「それは英語の本ですか。」の肯定の答は「さうです」であり、否定の答は、松宮氏の言はれる非常に不便な「さうではありません。」であるが、これを生徒が困難とするかと言ふと、決してさうではありません。大抵第一日で使用が出來る樣になり、この構文を私に質問した生徒はまだ一人も居ない。構文は不規則でも、生徒には、意味が理解出來て使用する事が出來るのである。それであるから、私は、松宮部長の言はれる樣な些細な文形式の規則不規則を以て、文教授順序決定の必須條件とはしない。多少の難易、規則不規則を問題とせず、生徒が日常生活上要求して居る問題を考察して、出來るだけ早く、之に觸れて行くのである。重ねて言へば、文形の難易を根本條件として、之に依り日本語形態上の通性通則の知識を得させ、個々の場合を演繹させよ

うとする事ではなく、生徒の日常生活を教室に再現させ彼等の生活を日本語化する事に依つて始めて學習の効を顯し得るとの見地に立つて、文教授の順序を決定するのが緊要であると考へて居る。そしてこれが有機的な日本語教授であると信じて居る。

文教授の實際について

暹羅學生に如何なる種類の文から教へ始むべきかを前節に述べたから、本節では文を如何に教ふ可きかを書く。最近の新聞に依ると、外務省の文化事業部では、日語文化の教授法を最善として、同校の教師二名をバンコックへ送り、彼地へ日本語學校を設立するとの事である。隨つて、同校の教授法が暹羅人に直接施される筈である。隨つて、今日まで多數の暹羅人學生の日本語教授に從事して來た筆者が同校の教授法は如何なるものか。私は如何なる方法で教へて來たかを委しく述べて、暹羅人には如何なる方法で教へるのが一番よいかを確立する事は兩國のために有益な事であらう。依つて、この節でも、松

宮氏の日本語教授法から引用する事にする。

同氏は教授法八十六頁に於て「本があります」といふ單文を教授するとすれば、その仕方は、直に文全體の練習にかゝる前に、先づ「ます」の練習をする。その練習が出來た時に、今度は「ます」の上に「あり」を冠した「あります」を練習する。そして、その次に「本があります」と言ふ主部を加へた成文を教へて練習する。それが、よく言へる樣になつた所で、その意味を說明する。「本がありません」についてもこの通りである。そしてこれ等の文を、再三繰り返して練習し、進んで「筆」「紙」「ペン」「時計」「鉛筆」といふ風に、既習の名詞に助詞を添へて、「あります」「ありません」の上に加へて練習する。さういふ風にすれば、物の存在を言ひ現はすには、物の名稱に「が」といふ助詞を添へて、「あります」に冠し、存在を否定する意を現はすには「あります」の終の「す」が「せん」に變るのであるといふ事を、明に會得するやうになる。この一つの習得に依つて、最早、あらゆる物の存在に對し、或は肯定し、或は否定して、判然、とその意志を發表する事が出來るのである。これを習得しただけでも、單語や句を冠加して練習すれば、頗る廣範圍に亘つて、應用練習をする事が出來るのである。文の最初の教授は、その組立から考察して組織的に、又建設的に教へれば、生徒も亦段々文章の構成を根本的に會得する事が出來るのである。と述べられて居る。私はこれを讀む度毎に、關東州の研究家山口氏の言はれる樣に、如何に智的で、分析的で、抽象的で、非實際的で、觀念的であるかを感ぜざるを得ない。部長は、言葉を、其の意味である事物の概念に止めて、事物の眞の意味にまで進める事を重視しない。この方法は、先生が聲を大にして主張されて居る小兒の言語習得を範とする直接教授とは遠く懸け離れて居る。それでは、如何なる點が不合理、不自然であるかを指摘して、之に對する筆者の考を述べて見る。

一、部分から全體へ進んで居ること。

二、形式から內容へ進んで居ること。

三、抽象的器械的言語觀に立つて居ること。

松宮部長は、部分が全體を構成し、部分の意味の總和が全體の意味であるとし、全體は、その部分に何時も分割還元され、其の部分は隨時隨所に他の要素と結び合つて新らしい全體を構成し得るとし、一團の思想なり、意味たる事實に依つて惹起される興趣情味よりも、その表現の形式である語法、文章法を重く見て居る樣である。

氏の教へ方を英語教授に移せば、〔I can speak〕といふ單文を教授するとすれば、その仕方は、直に文全體の練習にかゝる前に、先づ〔can〕の練習をする。その練習が出來た時に、今度は〔can〕の下に〔speak〕を加へた〔can speak〕を練習する。そして、その次に〔I can speak〕といふ主部を加へた成文を教へて練習する。それが、よく言へる樣になつた所で、その意味を說明する〔I can not speak〕についてもこの通りである。そしてこれ等の文を、再三繰り返して練習すれば（中略）段々文章の構成を根本的に會得する事が出來るのである。松宮氏の言に依れば、日本人學生の英語もこの樣に教へれば、外國人同樣に話す事が出來るのである。然し、全國

一萬の英語教師で、此の方法がよいと考へた者があるであらうか。この樣に教へれば、會話が不得意な日本人學生も英語が話せる樣になるであらうか。私は「否」と答へたい。日本人學生が會話の不得意なのは、第一に、日語文化の生徒と違つて、英語の話されて居る所に住んで居ない事、第二に、日本人は、外國人に比して耳の發達が惡い事、第三に、日本人は、誤りを恐れて、英語を使用する事を嫌ふ事であると思ふが、第一の英語の生活をしないで、學校で學習するだけである事が最大原因である樣である。外國人は、學校で如何に語學的に教へても一歩外へ出れば、日本語の生活が彼等を待つて居るのである。松宮部長の英語教授論を少し反駁して、亦横道へ入つたが、建設的語學教授は、幼兒が母國語を習得する方法でない事は、後に理論的に述べる。建設的に教授するから、部長が教授法八十九頁で注意されて居る樣な結果になると私は考へて居る。卽ち、部長の形式第一の組立式日本語教授に依れば、部分と全體との結合が緩慢になり、文は幾箇かの言葉の連結であるといふ分類的觀念が強く、總括的觀念が弱くなり、氏が練習不充分に歸して居る不自然な口調は、實はこの建設的教授の賜ではないかと思つて居る。最初から「本があります」といふ成文を教へても、生徒は初めは理解出來ないで、「本であります」の意味に取るかも知れないが、この文形を言葉の生活中で繰返すに隨つて、「本が」と「あります」が別の要素である位は雜作なくわかつて來る。助詞の「が」でもその通りである。「本が」「紙が」「ペンが」「ナイフが」の樣に、日本語の存在を現はす文形の主部の語尾には「が」音がつく等と考へる程の頭のよい外國人生徒は國語に助詞のない邏羅學生でも、まづ、少ないと思つて居る。否定文でも、疑問文でも、この方法で教へるのが一番自然である樣に思はれる。私は、松宮部長が考へて居られる樣に、一語一語の分明な認識と其の結合方法の知得が、文教授の實際的方法であるとは、どうしても考へられない。部長は、文形の組立方式と單語を與へて、これを練習すれば、生徒は言葉の生活に臨めば、自由に談話文の理解も表現も出來ると考へて居る樣である。

第二に言葉の生活では、實際的な具體的な言語活動でも、非實際的な思考的觀念的言語活動でも、言葉と事物の意味を分離する事は決してない。言葉の學習は言語活動が出來る樣にするのであるから、言葉の生活に於けると同じ言語活動に依つて習得されなければならない。そして、言葉を習得するのは、事物の意味に卽して、言葉の働きを經驗する事でなくてはならない。然るに、松宮氏はこの點でも矛盾の誹を免れまいと思ふ。氏の說を引用した樣に、天下の松宮氏は、成文を組立ててから練習し、これが言へる樣になつてから意味を教へるのである。この文字通りの無意味な練習は、幼兒の聽くのみの時期に相當する仕事の積りであるらしいが、幼兒に感覺される周圍の人の語音が、言葉としての意味に受取られなくても、部長が無意味として、耳馴らしの練習をするのと同じとは考へられない。幼兒が母國語を覺える場合のみならず、總て我々が言葉で生活をするに、松宮氏が教授法五十七頁で言はれて居る樣に、理解を與へる前によく聞かせて、よく言はせる事が缺く可らざる大切な要素である。今日の日本語教授に於ては、この忘れられて居る耳と口の練習が確實に行はれる樣に教授の順序を立て直す必要があるとは痛切に感じない。寧ろ之を無意味の練習と言ひたい。少くとも、幼兒の母語習得には斯かる練習は絕對にない。この位で、形式と內容の分離、形式から內容へ進む教授の不合理は說明出來たと思ふ。一口に言へば、言葉の教授に於ては、語句の意味も、一先づ、一全體として、學習者に直接聽かせ、深くても淺くてもとにかく全體の意味の見通しをつけさせ、然る後に細部の認識に及ぶのが一番よいと思つて居る。これが、今日の學說で正しいと認められて居り、私も、これに盲從して居るのである。

第三は器械的言語觀について述べる。松宮氏は、前にも述べた通り、「本があります」「本がありません」の如き、存在の有無を現はす文形を建設的に教へ、これを練習し、生徒が之を明かに會得すれば、あらゆる物の存在に對し、肯定的に、又否定的に意志を發表する事が出來ると引用文にある如く言はれて居る。卽ち語學的見地に

立つて、形式方面を重視して居る。故に、氏の考に依れば、事物の觀念は、言葉を習得する方便の樣になる。例へば、「本があります」を教へる場合に、この個文に於ける各語詞と其の發音や表現の形式とが習得されて、其の各が他の談話文章の理解と發表とに役立てば可なりとして居る。「本があります」といふ事實は、何等必要のない事で目的となつて居ない。氏は、前に言つた樣に、言葉の形態に就ての通性通則の知識を得させ、他日其の言葉を使用する場合に臨んで、使用し、他人の言葉を理解する事を目的として居る。それであるから、言葉の意味は抽象的で、生活に於ける言葉の如き漸明を斥け、一回完成的で、確定する事を期して居る樣である。隨つて、教授方法は機械的で、練習を重んじ、單獨孤立の發音、語詞の應用、談話文章の適用を盛んに行ふ。故に、同校の教材も、語法上の規則が主となつて居て、事物の意味よりも言葉の形式が選定の標準となつて居る事が明かに看取される。私は、言葉は當該の物に卽して、其の意味の理解なり發表なりに役立つ事が第一で、其他の場合に役立つ事は寧ろ第二義的に考へて居る。それ故、具體的な特殊な意味を大切なものとし、他の場合へ流用を目的としては、言葉の本當の意味を掴む事は困難と考へて居る。

本論文は短期間に書き上げたのであるから、意味の不分明の箇所も多いと思ふ。この外に「生活と日本語教授」「反復論」「暹羅學生の日本語發音特質」等を三十枚ばかり書く豫定であつたが、多忙な爲と、未整理のために締切に間に合はなかつた。六月十四日（火）

○ムアング・タイ

——（大自由國暹羅）——

磯部美知

筆者は現警視廳衞生部技師。
熱帶病研究の爲め明治四十五年より大正十年迄約十年間在暹。盤谷及び暹羅の諸地方に活動せられ、暹羅の上下各層に出入して診療をされ彼地に多くの知己を有せられる。其間ボルネオ會社經營、シーラチヤー製材會社附屬病院長、ポリパツト親王家御用係等を拜命。

白象の胎動

廣さから曰ふと佛蘭西か又は西班牙の本國程あらう。人口はと曰へば僅か一千百萬しかない。然し我が日本の人口稠密度に較べたら暹羅國は隨分人間がまばらに住んでる所だと誰しも屹度想像するにちがひない。事實全くその通りだ。近頃では更に百萬計り殖えたので千二百萬と稱して居る。

總じて亞細亞人全體の擡頭的氣分の横溢、殊に日本の隆々たる躍進に音頭取られて、暹羅はその發展に追隨して亞細亞第二の强國たらむとする理想に燃え出して來た既往に於て横暴な白人の手に虐げられて、手も足も出せなかつた暹羅のことでもある。斯うした世界の動き、卽ち東亞全人種の伸び上り立ち上らうとする大勢の浪に乘つて、白象も漸くその長い鼻を擧げ出した。今迄は蒼蒼たる熱帶の天惠樂土に桃源の夢を貪つて、鬪爭の世界を

對岸の火災視しつゝ、靜かな平和の月日を赤い檳榔子の實をかみながら、他人事の樣に眺め暮したのである。午睡のまどろみから醒めたやうに、新鮮な興奮が暹羅人の全體に漲つて、決然彼等の舊殼を打破すべくふるひ起つた。そして動き出した。そして最近の政變は實に彼等の改革の第一彈であつたのである。

若い暹羅は着々新裝を凝らして舊弊をかなぐり捨てた傳統的な貴族や王族の專横なる壓迫の寡圍氣中に晏如として呼吸しては居られなくなつた。そして何ものとも知れぬ急迫せる焦燥氣分と向上意識に支配され出して來た何時も〳〵彼等の眼に映るものは日本の潑剌たる姿である。孜々として勵み汲々として勉むる所の日本こそ、それは全く暹羅の手本として學び模範として從はねばならぬ凡てゞあつた。斯くして暹羅の成長發展は、遲れ馳せながらも之に追隨せんことを欣求した。識者の頭はこの氣持で飽和されてあつた。

芳香薫ずる樂土

由來、暹羅の王族乃至貴族は歐洲殊に英吉利に笈を負うて、永きは十數年の間彼國に留り、歸國の曉は忽ち高位顯官に補せられ、その賢愚は問ふ所ではなかつた。溫順羊の如き一般民衆は只管服從して、時に或は奴隷の如く追ひ廻され、然かも其處に一片の不滿不平を抱くものなく、有繋に佛陀成道の隣境として極樂淨土の平和王國を偲ばせて、四時五穀豐饒百花燎亂の天地を顯出した。

現王朝の始祖マハ・チヤクリー一世が覇業漸く成つて隣接諸族を征服し、高らかにムアング・タイの建設を謳歌した時、此所に完全に獨立王國の誕生を見た。ムアングとは國を意味し、タイとは自由を意味する暹羅語である。赫々たる武勳により踐祚したる第一世の經綸に續いて、第二世第三世の英邁は一層暹羅の國礎を鞏固にし、王化普く布き恩威並び行はれて庶民鼓腹の樂みに浸り、惠風萬里平和の歳月はメナムの長流の如く悠々として流れた。

常夏の國の常として、天惠誠に豐かにして樹木鬱蒼と生ひ茂り、五穀豐饒、禽獸蟲魚の末に至る迄、その繁榮他に儔を見る事が出來ない。耕さゞるに既に稔り蒔かざるに早くも萠えて、一碧萬頃の天地永劫に續く所、それは熱帶の沃野ではないか。暹羅は正しくその一つである。

巷間傳ふる所によれば、熱帶人は遊惰だと曰ふ。恐らく之は勤め勉めざるも食を得ること容易なるが爲であらう。反面全く太陽光の威力烈しくして日中の勤勞に耐え難く、働く時間のなべて少なきにもよる事は事實だ。天惠ゆたかに豐富なる物資を與へらるゝ代りに、人間勞働の力を奪ふ所に天の配劑の妙諦は存する。斯くして衣食の憂を離れて、熱帶人は生活に綽々たる餘裕をのこす。芳香胃にも薫する十房のバナヽ、此の醍醐味を味ふに僅か白銅一個で足りる。鬱金に熟れる斯の果實、本邦に於ては如何計りめでられても寒國には結實しないから仕方がない。バナヽはその種類數十を算し、熱帶の動物は皆之を愛好する。ましらの仲間から鼠輩の末に至る迄、命の糧としてバナヽを好むから面白い。單に榮養價の高いといふ計りでなく味覺に快き感觸を與へて呉れる。熱帶人はバナヽだけを所有する事それ自身だけでも幸福を滿喫する。

紫檀の花が雨のやうに街にふる頃、路面は銀杏の落葉のやうに黄色に埋まる。馥郁として、まあ何といふ氣高い香りであらう。誰だつて此の薫りには思はず深呼吸して終ふ。そよ風は午睡の夢の中まで此のかほりを齎して人を陶醉させずには置かない。獨逸の化學者が御前講演で、人工集成の薔薇の香水で街を薫じて見せると豪語した事を思ひ出すが、盤谷の街は紫檀の花の盛る頃には自然に街を薫じて居る。恰度、臺北市の樟腦專賣局附近を過ぎる時、我々が「街の芳香」を體驗すると同じである。九官鳥が物賣りの呼び聲を甲高にまねて、書もさなかの太陽の光りが照りはたゝく頃ほひ、地上に惡德の影は永劫に斷たれ、暹羅人はゆつたりして久遠に平和を天から約束されて居るかの樣に見える。

斯かる所謂樂土に君臨して、四世五世六世と父祖の遺業を繼いで暹羅の國王は恰かも彼の白象の歩みもなごやかに悠々こゝに百五十年、終に七世プラチヤチボツク陛

下の治世となつた。

宮廷の靡爛

是より先、世界の舞臺はかの歐洲大戰を契機として、其處に大きな旋回をした。世界人の經濟生活は、動亂の後をうけて日毎にその窘迫を感じ、焦燥となり續いて心情の萎靡となり、不安は急角度に上昇した。土龍が百日咳に惱む所の北方の諸國は愚かの事、鰐が夏痩せを嘆する南の國々まで、不況の嵐は吹きあれた。人間の嘆息と懊惱と憂鬱のカクテールは、人間をグロッキーにし、人間の德性を甚しく損じ、その社會生活の表層的な、そして安價な享樂的なものにした。斯かる際、白象王國のみが如何程頑張つても、それは頑張りきれるものではない。王道樂土の神秘境も當然の歸結として、恰度世界が西班牙風に見舞はれた時のやうに色々不幸の到來物が、此の國にも到來した。曰はゞ最後の時が來たのだ。

海外に遊學して、世界潮流の流れにその泳法を學んだ所の若き暹羅人は、自分の本國と世界諸國の狀態とを見較べた。然して一樣に自分の國の弛緩し切つた、熟しきつた情けない有樣に眼をしばたゝいた。たゞれきつたその頽廢の姿を凝視した所の若者は、今は眞摯にその處置を考へ終に斷然、其處に英斷のメスを揮ふに非ずんば、此の痼疾は治癒すべからざるを悟つた。

本來暹羅は、世界の動きを餘所にいつも超然として何等の影響も受けずに歷代君主の聰明に信賴して、國民は絕對的柔順に、そして穩和に、只管命を閼下に奉じて來た。世界唯一の君主專制王國として獨立を保持し、國王は己れの欲するまゝに國政を料理して居た。國王は半ばは兒孫繁榮の目的を以て、半ばは享樂的氣分を以て、所謂東洋風の豪華版「后宮の佳麗三千人」を貯へた。花の晨月の夕、歌舞管絃の佚樂は勿論その筋書である。長夜の夢は走馬燈のやうに美しく朗らかに次ぎから次ぎへと回轉した。歷代國王は屢々異母妹を后とし、宮中に侍る數多嬋娟の美姫は多くはその臣下の貴族より獻ぜられ、王宮には花ならぬ花の常に咲き競へるが見られた。「みめ形」よき貴族の女兒は、政略的意義を多量に背負うて、

自分の安佚と父母の榮達の爲めにその犧牲となつて宮闕に上つた。此所では犧牲といふ言葉は本當には當らない何故なれば、彼女達は寧ろ進んで其の選に入ることを念願した。曰はゞ彼女達のそれは或は畢生の輝かしい希望でもあつたからである。

國狀の然らしむる所とはいへ、その樣にして王宮に召し使はるゝ身となれば、金銀珠玉凡て女の欲求は滿足され、綺羅に身をかため、萬人羨望の的となつて、本能的な女の虚榮心が完全に其處に充される。若し儕倖にもその兒女にして君寵深ければ、その父母は曰はずもがな一門の榮達富貴殊に早く、忽ちにして長者の群に入る事が出來る。畢竟王宮入は貴族等の家庭の重要な計畫であつた。

血族結婚の風習

暹羅民族は多數の異種族の集りである。斯かる混成種族より成る國土にあつては、上は王侯より下萬民に至る迄、生命財產の擁護には殊更其の注意の深きを要する。毒殺暗殺之も固より恐ろしい。けれども財寶の散佚は尙更之を防がねばならない。此所に於てか、始めて血族の結婚が行はるゝに至つた。王家にありては其の尊嚴上降嫁を嫌つたから、上記の二つの理由と相俟つて已むなく血族結婚を敢てした。天下太だ安しと曰へども異圖を挾む者必ずしも絕無を保し難い。從つて豫じめ毒殺に備へ、蓄積せる財寶殊に寶石類の散佚は最も彼等の嫌む所でもあつた。巧みに此の豫防策を考へて、有効なる手段として血族の結婚は行はれ寧ろ常識として王家一門の安全が工夫せられた。暹羅に於ては又門地を貴ぶ事相當强く我が國狀に甚だ類似するものがある。

色々斯うした理由から、王族同志の血族結婚が比較的容易に行はれ、降嫁に伴ふ屈辱感情を斯うして免れた。王族は、降嫁を一つの上姦として考へたかもしれない。國王にして異母妹を正后とする者數代を擧げ得る。そして國王を多妻主義の遵奉者とし、結果は多數の子女に惠まれ、其子女達の內、王族の女より生れたるもの位置最も高く、貴族の女に生まれしめたる王族は一段位置の低き

待遇を受ける。

王位繼承に關しては畢竟第一王后の腹に生れたる者より選ばれ、順位は第一第二第三王后の定めによつて決定せられ、如何なる場合に於ても臣下の女の腹より生まれたる兒孫にして王位を覗ふなどのこと夢考へる事は出來ない。此の血族結婚の風習は、臣下の之に模する者を輩出し、世人は是を以て又暹羅貴族の一習俗と信ずる程、其處に多數の例證を遺した。

學問が事實を證據立てるに非ずして事實が學問に寄與する所大きく、殊に遺傳學上暹羅は貴い多數の生きてる實例を貢獻したとも或は曰へやうか。人間實驗による遺傳關係以外に思ひ當る事は、かの外山龜太郎氏の事である。暹羅政府に養蠶事業の指導者として傭聘せられ、暹羅人の斯業啓發に從事して居つたが傳へきくに氏は蠶の研究に沒頭しつゝメンデリズムの實證に立派な業績を發表して名譽ある學位の授與をうけたと曰ふ。氏の在暹中完成したこの世界的業績は、また日本人の爲めに萬丈の氣を吐くものである。

暹羅にも珍らしきものは澤山ある。かの有名な双生兒の畸形、七尺豐かの大女の誕生、象の托鉢等々々。故外山氏の業績、血族結婚、一國皆僧の風習等、斯かる著明の事例によつて、或は暹羅は世界にその存在を認識せしめたのかも知れない。然しながら此の血族結婚は、好事魔多しの譬に洩れず、王家一統の悲劇を結果した。遺傳の皮肉は鋭い性格卓拔せる才幹をそれ〴〵別個に發達せしめ、聰明を誇る親王又は王子女の誕生となつて恰かも豐年の果實の如く暹羅王族の繁榮を示し、一般民衆の上にその矜恃を保つた。然し劣性は益々劣性に次第に退化し行きて、國王の身邊に異變の表はれ來つたのは六世ウチラウツト陛下からである。生理的缺陷は益々濃厚に表はれ出して救ふ可らざる狀態に置かれた。親の因果の次第に子に報ゐらるゝ不幸でもある。

國王の異常生活

六世國王は夙に英國に學び、オツクスフオードマンとして英人よりも完全な英語を知つてると稱へられ、十數年の英國留學は彼れを全く歐洲人たらしめたが、歸國後次第に心境の變化を來し、當初熱心に國政を劃はしたにも係らず歳月の流れは終に彼れを暹羅人に還元せしめ、熱帶尋常の安逸な日夜を無爲に過ごし、緩慢なる國勢に順應して、やがては桃源の夢に耽つて享樂的生活に浸つて居た。父王五世國王チユラロンコーンは花の如き寵姫數百を宮殿に養ひ、男子禁制の生活を營みしが、六世は全然行き方を異にし、その王位に上るや如上の宮女を一廓に集め、彼等の先づ生活の安定を計り、次いで是等女官に代はるに美貌の貴族の子弟數百を集めて宮中に奉仕せしめ、常に側らに侍らせて全く女人禁制の生活を續けた。そして或は劇に或は歌舞に日夜奔放の限りを盡し、口さがなき外人の嗤笑を買ひ、變態性慾者の噂を作つた自ら書き下せる脚本によつて自ら劇中の主役として彼れは舞臺に立ち、國王の尊きを忘れて幾度か脂粉に身をやつした事であらう。そして臣下の聽衆の喝采を受けて頗る彼れは滿足し、全く比儔なき高貴の俳優振りを示した。此の國の元老或は憂國の志士達は、心の中で常に國王の此の狂態を嘆じた。

宮內大臣の如きは、國柄とは曰へ午後四時に登城して翌朝歸館するといふ、他國には全く類例を見ない所の晝夜顚倒の勤務ぶりに、人々を呆然たらしめた。勿論國王は曉に至りて寢所に入り、正午過ぎて起床する。日高うして眠り足りて尙起くるに惰き怠惰の風は、恐らく知らぬ間に國王の肉體をやぶつて居た事であらう。斯かる有樣だつたので、臣下の者も卽ち上の赴く所に從つて、下皆之に倣ふは理の當然である。滔々として一般に遊惰の氣風を馴致し、奢侈に耽るもの多く、只長する所は歌舞音樂の類のみになつて來た。從つて遊藝に巧みなるものは才幹の士より珍重せられ、君寵の厚きに誇りをさへ感じたであらう。

所詮六世國王は、之を常人として街頭に賣るも、その行くとして可ならざるなき才能を以て、優に一流のクラークとして賞讃に値したであらう。物を斷する、全く快刀亂麻的の明晰なる頭腦の持主として、國王は世の常の凡庸人ならざる事はそれは慥かであつた。然しながら反

面、國王自身の斯かる亂行にも等しき耽溺生活は、遂には誹謗の聲を生じ、國政に倦みたる王の賴りなさを臣民に感ぜしむるに至つた。

功臣を疎んじ佞奸の小輩を重用するは何れの國にもあり勝ちの事ではあつたが、暹羅の忠誠なる老人連は等しく私かに慨嘆しかつ憂慮した。王室秘藏の大金庫に山積みされてあると稱された寶石類は期せずして減じて行つた。それらは凡て恩寵厚き臣下に下賜され、從つて寵臣の間にはその拜領品の厚薄によつてあさましき嫉妬をさへ醸成した。ラマ六世は全く詩人型の英主だつたに異存はないけれども、若しむら氣の文人としての存在であつたならば恐らく人の視聽をこんなにそばたゝせはしなかつたであらう。只幸か不幸か、彼れは假りにも一國の君主として暹羅國王としての嚴然たる存在であつた。かるが故にその一擧一動は凡て國民の心胸に反映する。從つて國王の賢愚は、隨分暹羅のやうな國柄に於ては國民の信賴に響くものがあつたであらう。寫眞によるも亦實物によるも、半陰陽の樣なかの女性的顏貌と、その體軀、同時に結婚不能の生理的缺陷をもつて、終に彼れは親となる資格を缺除し、或は衷心悒々として樂しまなかつたかも知れない。然れども一般民心の倦怠乖離等の中に終に崩御し、王弟プラチヤチボツクが王位を踐んだ。即ちラマ七世である。

王家の悲劇國王の系譜

第一世　ソムデツト、プラ、プツトフアー、チユラローク、
第二世　ソムデツト、ラートラア、ナパーライ、
第三世　ソムデツト、プラ、ナングクラオ、
第四世　ソムデツト、プラ、チヨムクラオ、
第五世　ソムデツト、プラ、チユラチヨムクラオ、
第六世　ソムデツト、プラ、モングクツトクラオ、
第七世　ソムデツト、プラ、ポツクラオ、

この七世陛下も生來蒲柳の質を以て又英國に學び、王位に上つてからは銳意國政の改善を圖らうと軫念淺からざりしが、何等治績の上らざる內、白內障に惱ませられ遠く海を越えて米國に手術の爲めに渡らねばならなくなつた。當時その途中再び本邦にも足を留めた。醫學の隆盛を誇る此の日本を素通りされて、本邦眼科醫の面目は何だか潰されたやうな感じもした。他眼の手術は英國に赴かれて之を完了され、强度の眼鏡の力によつて辛うじて物を見得る程度に治癒されたときいて居る。

國王が身邊に斯かる不幸のあつた矢先、そして彼れがフアヒンに痾を養ひつゝあつた間に、突如として政變が勃つた。そこで已むなく民意に從つて憲法の制定を允許し、續いて人民政府と意見の扞格を見るに至りこゝに決然王位を一蹴し、英國に安住の地を求め閑雲野鶴の生活を送るやうになつた。王の同腹の兄弟六人、顧みれば何れも幸福な生涯に惠まれなかつた。プラチヤチボツク殿下は末弟として登極、七世をうけ同胞の最後を飾る可かりしに、不幸その治世はあまりにも淋しく、又悲劇的で全く有爲轉變の世の物の哀れをそゝりつゝ靜かに幕を閉ぢた。

七世陛下とその同胞の系統を示せば斯うなる。

五世チユラロンコーン
　第一王后パンワサア
　（その子）
　　マハアヴイトユラヒツト（親王）
　　ペツトブリー（內親王）
　　ソングクラア（親王）
　（ソングクラアの子）
　　アナンダ（現國王・八世）
　第二王后パンビイ
　（その子）
　　ウチラウツト（六世陛下）
　　チヤカボング（親王）
　　ナコンラチヤシマ（親王）
　　アスダング（親王）
　　チユタトユツト（親王）
　　スコタイ（七世陛下）

第一王后と第二王后は同腹の姉妹で、五世國王の異母妹である。第一王后卽ちパンワサアの長子マハアヴイト

ユラヒツト親王は、兩陛下の歡びの中に誕生し寵愛を擅にし、當然皇太子として擁立され、幸福に浸りながら成長したが不幸二豎の犯す所となり、夭折した。そこで第二王后の長子ウチラウツト親王を皇太子となし、五世國王の崩御後、此の親王が第六世陛下として踐祚した。六世の弟チヤカボング親王は六世陛下に子がなかつた爲め皇太子たる事久しく、又參謀總長として兵馬の實權を握り兄國王を援けて聲威益び行はれて居たが當時かの全世界を風靡した西班牙寒冒の犧牲となつて星加坡に客死した。

此のプリンス・ビツサノローク（チヤカボング殿下）の死に就いては當時謎の死として隨分デマが飛んだものである。星加坡に發つ前の晩餐の夜、多くの陪食者を控へて宴の酣なる頃急に電燈が消えて暫らく暗黑が續いた此の時ある黨者が居つて、すかさず殿下の飲物にインフルエンザ菌の純培養を投入した爲に終に星加坡に着くと間もなく流感を患ひ鬼籍に上つて終つたといふのである此の親王は露國に學び、露西亞婦人を妻とし、非常な反英思想家であつたので英國の陰謀のいけにへとなつたと暹羅人はいひはやした。

豫言者の宣告

六世の兄弟は、或は結核で或は他の疾病で次ぎ〳〵に歿したので、勢ひ末弟のスコタイ親王が唯一の生殘者として、六世崩御の後を受けて王位を踐み、七世と稱した。然れども治世幾何もなくして上述の政變に遇ひ、憂悶の中に退位したので、茲に第一王后の第三親王故ソングクラア殿下の遺孤アナンダ親王を擁立、暹羅國王位に就かしめた。即ち未だ幼若の身を以て、事漸く繁からむとする天南の王國に君臨して第八世を稱する現國王である。年齒辛うじて十歳、國民の信望を負ひて大なる未來を約束されつゝ王位に上つたものゝ、尙ほ今後雲を呼ぶか雨を呼ぶか、東亞の風雲漸く密ならむとする今日、中々吾人に豫測を許さない。暫らく池中の蛟龍として其の將來を刮目して俟たう。

話をすつと昔にかへして、第一世國王在世中、さる權威ある暹羅の豫言者が顯はれて、王家の繁榮吉凶禍福を占ふべく一本の蠟燭に點火してその結果を凝視した。先づ蠟燭に十五年を一區劃として何本かの線を引いた火はめら〳〵と燃えつゝ、豫言者の輝く眼光の前に、恰度三つ目の線の所で消えて終つた。豫言者の淋しい笑ひの口許から、王朝の生命は百五十年たるべく宣告された。暹羅國民は皆、この傳說を古老から傳へ聞かされてゐるので今次の變革に際しても宿命的の諦めと、物の不思議に驚かされた。即ちマハアチヤクリー王朝は、豫言者の蠟燭の火のやうに正しく年を數ふること百五十、代を重ぬる七にして、その專制王國榮華の夢はうたかたのまぼろしと消えて行つた。豫言者は然し尙ほ曰ひ遺して置いた。暹羅の大變、國政の改革に當つて、その非常時局に立ち王位を踐むは極めて若き國王である。此の幼君は天資甚だ聰明、如何なる難局に處しても決して動ぜず、必ずや能く國政を整理し、益々暹羅國運の進展に寄與して、遂に國家興隆の機運を作るであらう。又單にそればかりではない、鋭意國力の充實强化擴大に勗め、後世必ず其の勳業を謳はるゝであらうと。

これ果して、そのかみの豫言者のよまよひ言であらうか。或は事實として如實に顯出されつゝあるであらうか。我々は移り行く世の事象に就いて、暫らく眼を見はつて觀察すべき愉快な聽衆として、先づ視線を其處に集めて置かう。斯くしてラマ七世を名殘りとして、世界唯一の君主專制國は茲に最後の訣別を告げて、暹羅は即ち新憲法の制定を急ぎ新裝を凝して、立派な立憲君主國の仲間入りをしたわけである。依つて王族一統の政治に關與する機會を完全に奪つて、王以上の王族は暹羅の參政圈外に放逐されて終つた。

人民の聲即ち輿論の尊重による、所謂議會政治に驅け込んだ所の、暹羅の新しき成長はこれから始まる。結果として、我が世の春を謳つて居た所の王族乃至貴族並びに高位顯官を獨占しつゝあつた所の彼等一統のものは、大抵國外に逃避するの已むなきに至り、感慨無量のもの多かつたであらう。一榮一落の春秋に時勢の改をどんなに嘆いた事であらう。瓜哇に彼南に英吉利に、或は佛蘭

西におのがじゝ居を移して、配所の月の冷たさを今更ながらつく〴〵感じて居るであらう。王家沒落の一幕の完成は、世代を重ぬる事七、年を積む事百五十、思へばそれは本當に槿花一朝の夢でもあつた。

上流の歐洲崇拜

由來暹羅の王族は、殊にラマ六世の同胞は、英國に學ぶ者多く又その滯在期間も大抵は相當長かつた。彼等の頭は勢ひ歐洲文化に充分浸つて完全に着色されては居るが自分等の住む東洋事情に就いては殆んど盲目か、然らずんば認識を缺いた。甚しきに至つては侮蔑的態度に自らの國を見下した。東亞の現勢に暗くして、暹羅國礎の鞏固は期すべくもない。暹羅は日本の偉さを日露の役によつて學んだが、畢竟之も英國や佛蘭西等のなす如く、歐洲知識に於てする所謂表層的淺薄な觀察に過ぎないので、西洋人の理解して居る以上には出られなかつた。

眞實、暹羅はじつと腰を下して日本の研究を試みなかつた。彼等の讀み且つ聞くは凡てこれ歐米の言葉である然るに不思議にも日本陸軍の威力を只一人眞實理解する事が出來た人に、ビツサノローク親王がある。前にも引用した樣に、この人は六世國王の弟にして然かも皇太子として硬骨の聞え高く、夙に露國陸軍に學び、反英親露派の偉材で、日露の役にはクロパトキン將軍の幕下に參じて遠く浦鹽に遠征し來つた好漢であつた。從つて彼れの感情は他の暹羅人とは事かはり、少しも親日的傾向を持たなかつた。

暹羅人は人種の同じなる爲めか、殊に日本人には深い親しみを持ち、直接間接、日本理解といふ點に於ては遙か西洋人よりは早かつたかも知れない。兎に角、勃興し行く日本の姿には、殊に日露戰役後の隆々たる發展には暹羅は堪まらない美望を禁じ得なかつた。「日本のやうに」又「日本を眞似よう」といふ氣持が、慥かに暹羅の各層に横溢した。そして暹羅も、英佛の間斷なき壓迫から逸れて、他日必ず堂々と立派に「日本のやうに」立ちたいと念願した。

由來王族は、歐洲事情に精進しながら東亞の情勢に關しては、研究を等閑に附して居た嫌ひが濃い。例へば模糊の中に自分達の國を眺め、動もすれば自らを卑下し、甚しきに至つては安價に之を評價せんとする傾向さへも帶んで居た。斯のやうな事情は、既往に於て我國にも偶々あつたらしいが、西歐文化を攝取し始めた當初には、全く彼の文物の絢爛に眩惑し又心醉し、不見識にも自らの所有する獨自の文化を輕視し、其の惰性が驅られて近代迄も續いた。物質文明の優越性の論議に於て、東洋は明かに西洋の下位に立たう。暹羅も印度も支那も亦我が國も、遺憾ながら遙かに西歐に遲るゝ事甚しく、所謂未開の國であつたのだ。後れ馳せながらも、一度彼等の後を追つて同一レヴェルに上らむと企てた以上、日本は寸刻の油斷も躊躇もしなかつた。支那支那乃至暹羅の牛歩遲々たる進みを尻目に、赫然頭角を顯はして僅々半世紀の間に歐米を凌ぎ、剩へ之を攫んでんとする優勢を示し出した。

民衆の親日感情

暹羅も近代文明の幼稚期を等しうする關係上、其の初期に何れの國も經驗する如き、無批判、盲目的に西歐文化心醉と偏重の態度は、又避けがたき一つの探湯であつた。隣邦日本の絶え間なき進展ぶりに目を見張りながら然し惰性で常に之れを西歐以下のものに、低く評價して居た樣な嫌ひが多かつた。西歐諸國の著書や新聞のみによつて日本の狀態を理解するより外なき暹羅の知識階級層、即ち王族や貴族は、一面狹獪なる白人の毒手に籠絡せられ、それが恐しい魔手である事に氣づかずして、國土の誇りも民族の自負も凡て之れをかなぐり捨てゝ喋々外國語を話す事を以て恰かも教養のシンボルでもあるかの如く考へ然かもそれを誇りとさへ已惚れた。

矢の如き急テムポの時勢の推移を悠々檳榔子の實をかみながら他事の樣に眺めて居る內、暹羅は白魔の術中に完全に落ち、領土は左右より削られ、權益は奪はれ、次第次第に高壓の加重さるゝを覺えた。

暹羅の頭腦とも曰ふべき王族や貴族は歐米の頭顱に亞細亞の衣を纏つて其處に異樣の矛盾の存するをも顧みず一般民衆をずる〴〵引きずつて行つた。上層のかゝる親

歐熱に浮かされつゝある間に、一般民衆の多數は、日本に對する傳統的な強い親しみをもちながら、兄弟の國、同胞の國と尊敬し、如何なる日本人に對しても優しい好意を寄せる事を忘れなかつた。言葉を換へて曰へば、親歐と曰はんよりは寧ろ尊歐氣分の充滿する所の少數ながら有力なる王族貴族分子と、他面多數なれども無力の親日大衆とのカクテールが暹羅の感情を代表する。

數百年來途絶えて居つた日暹の國交は明治廿年の交、五世國王の念願によつて復活し、當時初代公使として、稻垣萬次郎氏が赴任し、その敏腕を揮つた。歴代公使の努力、之に續いて日暹關係は愈々緊密を加へ、遂に近來の隆盛に到達した。利害關係の輕重は、個人間に於ける如く國家間に於ても、其の交渉の深淺を支配する。日暹の關係も、過去に於ては東京駐劄の暹羅公使をして敏活なる活動をさせる程、複雜で重要ではなかつたのであらう。從つて閑散は外交官の儀禮の如く相互的で公使館は盤谷に於ても東京に於ても繁忙を極めなかつた樣である只、三井物産會社や少數の小商人が、營々として日本品の販路の開拓につとめ主として支那商人及び印度商人の手より日本品を市場に捌き、需要者を滿足せしめて居た。地方に進出して賣藥の行商により生活する邦人、或は小都會に居住して雜貨商を營み、又は寫眞屋を開業して相當信用を博して居る邦人も尠くはなかつた。日本人並びに日本品の紹介に永い間の努力が拂はれ、日本の信用は暹羅人の胸に烙印を刻された。即ち我が勤勉なる同胞が有名無名幾十幾百人、海外數千里の異鄕に、或は燒けつく苦熱と鬪ひ或は瘴癘の毒氣と戰ひ、刻苦精勵、今日の地盤を築き上げたのである。吾人は常夏の地下に眠る尊い犧牲同胞に、心からなる尊敬を拂ふものである。「日本」と暹羅人の口から出る此の言葉は我々の耳に隨分なつかしく響く。この言葉もパイオニーアとして奮鬪した、幾多の、今はなき無名の英靈諸氏の置土産である。

新政府の英斷

世界大戰の結果は、單に暹羅計りを除外例として靜かに之を圏外には置かなかつた。犇々と迫る不況の波は靜かに然かも力强く暹羅國の隅々にまでうちよせ來り、經濟上の窘迫は彼等の惰眠をゆすぶつて之を覺醒させた。終に乾坤は一轉して、暹羅も世界の諸强國にならつて君主專制を捨てゝ、立憲政體の國家に改變せんと試み、終に流血の慘を見ずして之に成功した。

民衆を基礎とせる、そして新しき陣容に於て、閣僚のメムバアはきまつて、暹羅の政治は滑かに運行を續けた。諸制度、諸組織、殆んど我が日本に範を取り、そして暹羅の現國狀に恰當するやう改善した。舊弊打破の眼目は王族を政治より遠ざくる事であつた。少くとも王以上の王族は完全に封鎖され、要職重責の椅子は悉く皆衆庶の新材により占據され、爵勳たる新興氣分は澎湃として全土に漲つた。恰かも、我が明治維新當時の國狀を彷彿たらしむるものがあつた。國柄から考へても、寧ろ王家一門の繁榮を、日本としては望ましく、又一般民衆の王家に對する忠誠の一圏ならむ事をこそ願はしいが、暹羅としては暹羅の生活があるので、勢ひ其の國狀の最善の方策に從はねばならない。又無理もない事である。

一般に親日感情の濃淡から見て、暹羅大衆の氣持の方が王家一統の者よりも寧ろより親善で、且つより眞摯である樣に思はれた。近來殊に最近になつてからは王族もわが國の實力を認識して、考へ方も百八十度の轉換をした觀がある。從つて總感情からすれば、慥かに政變後の現政府治下の暹羅は百パーセントの親日國家である。其の溫かい手を既に差し伸べて日本の堅い握手を求めて居るが、動もすると我が國に熱意が缺ける憾みがなからうか。何と曰つても文化は低いし、資源の開拓を俟つてゐる相當豐富な暹羅の山河、之はどうしても日本の援助により相互的に開發々展せしめ、國力の强化擴充を計つてやる事は、日本の東亞に於ける大使命遂行の爲めにも必要缺く可らざるものであらう。結果に於て亞細亞の兄弟國として又その一强國として成長せしめて置けば、日本の安全さが保證される。兩國親善の確立を目ざす所の現政府の親日政策斷行は、全く既往の行きがゝりを無雜作に棄てゝ、英吉利に極めて無遠慮に然かも勇敢に之を行つた。暹羅としては全く空前絶後の現象で、英吉利も佛蘭

西も恐らく内心隨分不快に感じた事であらうが、暹羅は國是として其の所信に一路邁進せねばならぬ覺悟を決然として示して來た。

東亞の盟主日本と結ぶ事は、達識の士のみ能く之を知る所であらうが、國家百年の大計の爲めに日本接近の政策は暹羅の聰明な決意であつて、智謀の士は、その打算の卓越に恐らく舌を卷くに相違ない。滿洲事變當時、國際聯盟を向ふに、日本が孤立無援の窮地に立つた時、大膽に日本の爲めに一票の棄權を絶叫して世界を唖然たらしめた勇敢さを、吾人は尙强く之を記憶する。同時に深甚なる友情に對して、日本國民は心の底から感謝と敬意とを永久に拂はねばならない。

山田長政の足跡

急角の旋回により、今や日暹の親善は新局面を展開しつゝある。然しながら、日本の朝野は總じて未だ暹羅が日本に許してるやうにそれ程深く、眞に胸襟を開いて暹羅を侯つものがあるであらうか。警戒的な遠慮と懷疑的な敬遠恐らくは暹羅事情不通より結果する所の斯うした態度が、我々日本人の間に流れて居る樣にも感じられる勿論利害關係の緊密でない點も、その原因の一つであらう。他面隣邦支那の常に紛糾せる諸問題が、日本の呼吸を不斷に促迫させる程、多量に堆かく錯綜し來つて、全く他を顧みるに遑なからしめて居る事も一因であらう。所詮は暹羅との關係に未だ密接なる膠着性が發見されてないので、日本の國防的外圓圈內に存する重要性を保つ暹羅國を、あまりに安價に評價し過ぎる所に誤謬が生れる。之を暹羅側から考へて見ると、暹羅が日本に賴り、日本と結んで、凡て日本に兄事し、その誘掖指導によつて、遲れ馳せながらも世界の先進文明國の班に列し、步武堂々行を共にしたいと念願するは自然である。

地理的にも、人種的にも、暹羅は我國と相接近し、風俗慣習の甚だ類似するものあり、そして暹羅人は「日本（ジツポン）」の名をさへ呼べば萬人が萬人、皆本能的に親しさを覺えるのを禁じ得ない。

かの山田仁左衞門長政が圖南の雄志已み難く、流轉の旅人として暹羅に着いてそれから迂餘曲折波瀾萬丈の生活を經て所謂セナビモツク侯爵として武勇の譽れ一世に高く、多數の日本人部下を率ゐてあの半島に馳驅し、暹羅を助けて偉功あつたと曰ふ事は、何處まで信賴し得べきかそれは甚だ疑問であるけれども、兎に角現在の盤谷一圓の地帶に於て、當時よりの習慣として遺つて居る所の、暹羅現今の儀禮乃至作法は、未だ暹羅上流人士の間に敦厚な美しいものとして傳はり行はれて居る。此の行儀が卽ち我が日本のそれと恐ろしく相通じ近似してるので我々をして或は我が風習の可なり深く彼等の間に濃染し、然かも亡ぶる事なく今日迄行はれ來つたものなるかを思はしめるものである。長政の活躍期に、日本武人の敦厚な儀禮として暹羅に感染したものが、多少變改されて現在の暹羅の美しい儀禮となつて生きてる事とも想像される。

暹羅は常夏の國である。熱帶に國して三百年前の暑熱も何等其處に變りのありやう筈はない。だから長政がいくら英雄でも鐵熔かす炎熱下に日本のあの重苦しい甲冑を身に纏うて戰は出來ない。まして當時の暹羅は微々たる勢力の、そして國としては現在のやうに立派な統制下には恐らく置かれてはゐなかつたであらう。要するに長政は英雄であ たに相違なからうが、之は永い月日の間に人の口より口に傳へられつゝ成長し偉大になつた紙上の英雄の部類かもしれない。然し民族發展の上からは、我々は偉大なる海外に雄飛せる多數のパイオニーアをもつ事を喜ぶ。彼等先覺の偉材によつて善き前例の作られるといふ事は、畢竟次代國民を發奮蹶起せしむるホルモンである。故に斯かる大きな活躍の足跡を長政が暹羅國に印して置いたといふ事は、何か宿命的な親善連鎖を日暹兩國民に遺して置いた記念碑として尊敬しよう。既往のかうした因緣から將來益々其の關係の緊密さを增し、兩國の協調に一層の熱と力を與へねばならない。之卽ち兩國民の完全に履行すべき義務である。

搾取された東洋

富の程度、文化の狀態、人口の濃密等あらゆる點を考

慮して、日本は暹羅より格段の優勢位にある。曰ひ換へれば、與ふ可き富有者でもある。成長の途上にある暹羅に對して、兄の國として充分補助し誘導し、强力なる國家に仕立てあげねばならぬ重責がある。日本から西洋への途の玄關でもあらうし、西洋から日本への第一關門か或は望樓のやうな國柄でもある。

「亞細亞人の亞細亞」を實現する日も何だか指呼の間にあるやうな氣もする。此の理想に參加する有力なる日本の友邦として、我々は先づ第一に暹羅を招かねばならない。

暹羅は勿論我々の大切なる味方であるが、今は孜々として國力の充實を計り、鋭意諸般の事業を整理し、軍備を擴大し、東洋第二の海軍國たらむ事を理想として居る。暹羅が徹頭徹尾かばかりの努力を續くる所以のものは、英佛兩國によつて左右兩側から不斷に蒙つた壓迫に端を發する。そして又全亞細亞民族の念願は白人が東洋から手を引く事である。永遠に手を引く事である。亞細亞を亞細亞人に還へす事である。數世紀の間、不義に富み且つ榮えた彼等の安佚は、世界經濟事情の明確なる今日舊態依然としてその儘に之を放置するわけには行かなくなつた。況んや亞細亞民族の大多數は搾取し盡されて、今日皆塗炭の苦しみに喘へぎつゝあるに於てをやである。

日本人は印度に深い親しみを持つ。印度は世界最古の文明を、あの乳房のやうな大國から汲めども盡きぬ泉のやうに諸國に之を分ち與へた。世界は滾々としてほとばしる醐醍味を飽くなく吸收して、印度を遂に老衰萎靡せしめた。我々は現在の印度の骨と皮ばかりに羸瘦した姿を眺めて哀れをそゝられずには居られない。一體誰が彼女の肉を食べて終つたか考へ去り考へ來れば、自ら眼がしらの熱くなるを覺えて、面を伏せたくなる。然かも英吉利は此の老耄帝國の乳首に蛭のやうに食ひ下がつて、尙之を離さうとはしない。搾れるだけ搾らうと、最も狡獪な仕方に於て印度をいぢめて居る。例へば印度總督は世界最高の俸給を印度から受け、邦貨の約三十五萬圓に相當する年俸を支給されて居る。その他英國人官吏、皆之に準じて非常に高給である。單に俸給のみでなく、印度の物産を安價に英國にもち歸り加工して、之を四倍も五倍も高價に捌く。印度の瘦せ衰へて行くのは決して炎熱の作用ばかりでなく、筋勞所得をあまりにも安價に賣る爲めに、結局筋肉は削瘦し五體は骨と皮ばかりに瘦せ落ちるのである。

かばかり印度は苦しみ、此やうに惱みぬいた。正義を叫び人道を論ずる世界の强國も、英國を恐れ憚り或は遠慮してか何事も之に就いて敢て容喙しやうとはしない。既往の不正に瞑目して將來の正義人道の確立が出來やうか。米國などは殊に世界の平和の爲めによく人道を高調し正義を絶叫するが、大きな問題は彼等の介意の外に置かるゝ事が米國の國是か。既往の罪科も明快なものは之を俎上に論難して、正しき事態にかへす事が、それが本當の公正な正義の擁護者である。印度の民衆は去勢された樣に無力にされた。三寸のナイフをもつ事を禁ぜられて居る。肉彈以外に武器は何物もない。起つに立たれず呻吟を續けて、運命の前にひれ伏して居る。眞實に正義を愛好し之を擁護する何れかの强國が、英吉利の保つ羈を斷つて印度を解放せざる限り、印度は恐らく自力を以てその足に獨り立つ事は出來まい。

亞細亞全民族の間に澎湃として漲る勃興氣分、就中印度と境を接するビルマ、又ビルマの東隣に位置する暹羅國、皆それ〴〵相當に、その國民の胸に力强く高鳴る熱い血潮を感ずるが、何としても徒手空拳策の施すべき術が見出せない。

手を差延べた善隣

暹羅國の成長は、絶望の淵から若干亞細亞人に慰めの挨拶をする。又暹羅國の强化擴大は英佛の頭痛の種となる。印度及びビルマに强き刺戟を與へ、東亞の天地に發熱させるからである。暹羅の變化はこの意味に於て、頗る重大の反響を起す。此の間の消息をよく檢討すれば、日本の朝野も更に一歩深く突きこんで、暹羅に親しむ事を希望するであらう。地形から既に陣地の鎖鑰とも考へられる大切な足留りの國である。何故にもつと積極的な援助が、目立たぬやうに巧みに與へられぬであらうか。

手はもうはやく彼れよりさし伸べられて居る。暖い血の流れて居る暹羅の眞實の手を、何故日本はもつと力强く握つて彼れを喜ばせてやらないのか。事業を巧みに計畫する者は、十年を一期とすると聞く。然らば今からでも遲くはない。日暹百年の大計の爲めに、先づ第一期の計畫として我より與ふるがよい。技術、資金、凡ての彼の國の發展上必要とするものは之をどん〳〵援助して、充分國運を發展せしむるやうに指導してやるがよい。眼前の小利に眼を閉ぢて、遠大の計畫に胸を開く事を考へねばなるまい。

常夏天惠の豐饒の國である。開拓されてない所の多量の埋藏資源も、その他種々雜多の材料がある筈である。充分之を利用して相互的に利益を得る事は、時節柄兩國民の幸福の因を作るであらう。本來文化の低い國でもある。唯日本に全幅的の信頼を捧げて、充分その開發啓蒙を計つてもらへば暹羅の幸福、それは期して俟つべきものがあらう。現在は全く我が國として、未だ經驗せざる非常時に際會した。歐米の列國との折衝も複雜で多岐多端である。外交を圓滿に導く爲めには、背後にどうしても實力を貯へて置く必要がある。一國の實力とは完備せる武裝と富と國民の精神力等の相乘積である。直ちに融通し得る隣國の資源、それは又實力を保證する。暹羅は此の意味に於て大切なる善隣である。しかと手を握つて置かねばならぬ盟邦である。

暹羅の階級

暹羅の貴族は一代制である。(一)ムン (二)クン (三)ルアング (四)プラ (五)ピヤア (六)チヤオ・ピヤア (七)ソムデツト・チヤオ・ピヤアと此の七階級があつた。臣下にして次第に榮達してチヤオ・ピヤアまで上つた者は若干あつたがソムデツト・チヤオピヤアを授けられたものは最近殆んどなかつた。王族方にも階級は設けられて正后の腹より出でたる者と臣下の娘の腹より生れたる者との間に、同じく親王でも、そこに歴然たる區別をもちその上に階級上の名稱に差等があつた。

卽ち呼稱上クロムを冠し(一)クロム・ムン (二)クロム・クン (三)クロム・ルアング (四)クロム・プラ(五)クロム・ピヤア (六)ソムデツト・クロム・ピヤアと順次よびなして後者が最高地位にある。暹羅國王は五代迄多くの女房を蓄へたる關係上、王子女の誕生多く、斯の如き區別を設けないと統制上甚だ困難が多かつた。

親王の子女は之をモム・チヤオと稱し、モム・チヤオの子女は又モム・ラチヤヲングとよびモム・ラチヤヲング以下は臣下に混つて終ふ。傳統を尊ぶ事は世界人類の通念で、彼等もその祖先の誇りから、その名譽の爲めに自らも勵んで、勢ひ貴族に列せられる機會が多く惠まれた。

僧侶はどうかと曰ふに、彼等にも階級があつて、大體寺院生活は持戒生活で相當肉體の訓練を要するし、五欲の彈壓の爲めに隨分苦行を積むのであるから、皆一樣に解脫して世俗を超越し、階級なども其處に必要がなきゝうであるけれども、讀經はパリー語でする爲め、こゝにパリー語の修業如何がその僧侶の學識の標準となつてくる。從つて彼等にもパリー語の試驗の結果によつて、マハア一段二段三段と曰つた具合に、恰かも我が國の柔道の段の樣にマハア九段まで階級が出來て、終にマハア九段を突破するとチヤオクン（閣下）に上つて終ふのである。

貴族の子弟は、一體父祖の功勳に幸されて、大抵は父や祖父と同一階級に榮達する。一代貴族制とはいへ、恰かも一大家族の如き關係に於て、王家と貴族とは主從若しくは姻戚の因緣に立つてゐるから、特別の事情のない限り一見世襲のやうに、次ぎ〳〵子々孫々の代まで常に官途に其職を發見し、その才幹によつて拔擢されて過分の榮爵を贏ち得るのである。從つてその生活も、わが國の譜代大名の如く餘り大きな波瀾もなく、極めて平穩無事に慢性疾患の樣に漫然と續いた。

數年前に終に爆發した所の革新氣分は政體の改革を斷行し、舊殼を全部粉碎して、安倭な貴族制度を抹殺した。一君萬民の燃ゆる新興氣分に立ち上つて、日本の維新當時の意氣を偲ばしむるものがあつた。故政尾藤吉氏は屢屢日本の新聞に暹羅の準皇族としてあやまり報ぜられた

彼れが十六年の久しきに亘つてその法律顧問として暹羅國に盡した功績は沒す可らざるものがある。故に五代國王より暹羅の臣下なみにピヤアの階級を授けられ曰はゞ勅任官級の高官に榮譽づけられたのである。暹羅が如何程文化が低くゝとも、外國人を重用して王族待遇にとり立てたためしはない。どうあやまり傳へられたものか、彼れは見事にお伽の國にほうりこまれて、噂のはなやかなわりにはつまらない生涯を送つて終つた。外國の使臣で政尾氏と同一階級に列せられた人は、恐らく半ダース以上はあらう。然しそれもこれも今は槿花一朝の夢で萬事うたかたのはかない追憶と消えた。一切平等無差別は佛陀の、御教えでもある。平等意識に敢然目ざめて、若い暹羅は輝かしい生長を始めた。そして貴族の階級をぶちこはした。

亞細亞の一角より、俄然鐵溶かす酸素焰の如く、我と相呼應して力强く展開し行かんとする暹羅の將來には我我は非常に大きな愉快な期待をもつものである。東亞に於ける唯一の兄弟國として、親善に測り知る可らざる友情がつながつて居る。世界を向ふに廻はして日本が立つ時に、我に欣然手を貸すもの果して世界の何處にあるであらう？　顧みれば、國際聯盟が日本を俎上に、滿洲問題を斷じた時、四面楚歌の中に於て勇躍一票の棄權を絶叫した國は何處であつたらう？　我々日本人は義に厚い暹羅の決死的、殉死的この好意を永遠に牢記せねばならない。

日本精神の把握者

又話しを古き頃の留學生に戻して見る。五代國王の侍從武官長陸軍中將ピヤスリセーナの長男クンシツトは、時の暹羅公使ピヤウキソツト氏の息チヤルンと共に我が幼年學校に同じに學んだ。その後クンシツトは父の死に遭ひ急遽歸國し、終に半途退學して暹羅の士官學校に轉じ、其處を卒業して士官になつた。二人とも相前後して歸國し、とうとう日本の士官學校を出なかつたが、その本邦に於ける少年期の訓練は、矢張り物の役に立つて比較的早く中尉に榮進した。是等少壯士官の中から再び選ばれて日本の陸大に入學すべく、妻子をすてゝあこがれの我が國に再びやつて來て、更に數年を、一人は陸軍大學に、他は歩兵學校に精勵して具さに辛酸を嘗めた。そして螢雪の功成つて歸國してからは、兩人共に大尉から少佐と、とん〳〵拍子に進級し、幸福な日が續いた。

由來暹羅の士官は主として英獨露に留學せしめられ、ラマ六世の如きは歐洲大戰の際、英國から名譽大將を送られた程であつた。獨逸に學んだものは歸國後評判よく現政府の首相ピヤパホン大佐及び陸軍の實力を握るピヤソーン大佐も共に獨逸留學生であつた。

然し終に最後の日が暹羅にも來た。思ひがけない革命が、青天の霹靂として極めて駿速に、電光石火完全に無血的に成就した。有繋は佛教の徹底して居る國である。殺生戒を堅持しないまでも、人々の胸奥に燒きつけられた、み佛の教へがあつたのだ。だから恰度覺りの中に改革が行はれて終つたやうにも見える。そして忽忙の間に諸般の變改が着々行はれ、人心も全く一新せられ、一先づ茲に安定の外觀を呈するに至つたが、間もなく陸軍大將ボヲラデツト親王が、北部の精鋭コーラアトの兵を率ゐて突如として盤谷に迫らんとした。

政府も事の意外に驚きて忽ち防禦陣を布き、對戰し、不幸親王の反動的革命軍は遂に利あらず、親王は腹心の部下と共に飛行機で佛領印度支那に遁れ、事態はこゝに一先づ落着した。勿論チヤルン少佐もその參謀として活躍して居た關係上親王と起居を共にした。日本で折角育て上げて立派になつた是等有爲の二將校が、幸か不幸か揃ひも揃つて反政府の反動革命に參加した事は、注目に値する。彼等二人は何れも名門の出で、彼等の父祖は凡て王寵を忝うした。彼等の日本再留學も畢竟するに今は爪哇に居らるゝボリパトラ親王の特別の取計らひによるものであつた。曰ひ換へれば、王族の恩顧によつて留學も榮達も出來たものである。どうして王家沒落の悲運に際會して、安住の天地に遁れ、生命の全きを計られやう？　猫でさへ、三日養はるれば恩にきるといふぢやないか、況んや匪躬の臣節を盡して世々君寵殊にめでたかりし身に於てをや。如何なる理由によるも、新政府の下に

は男の意氣地として走れなかつたであらう。何と曰つても暹羅國は王國である。節義は自ら明らかである。君の馬前に斃るゝは武門唯一の名譽でもある。まして日本に少年時代より青年時代にかけて盡忠報國の教育を受けた彼等である。骨身に泌みて刻みつけられて殘つてゐる或るものが慥かに其處にあつた筈だ。終にチヤルン少佐は國外に逃れ、未だに行衛は判明しない。又クンシツトは捕はれて牢獄に、哀れにも靜かな日を送つて居る。クンシツトは役名をルアングサラシツトと呼ばれ、卓拔せる歩兵技術の修得者として有名であつた。其の捕れて軍法會議に附せらるゝや彼は毅然として色を成して曰く、我は是上官の命をたゞ忠實に奉じたまでゞある。他に何ものもない。先づ我が胸を擊て、そして願はくば無辜の部下の命を悉く助け給へ。とこれを傳へ聞いた暹羅の國民は國をあげて彼れの武人の修養を讃嘆した。涙に笑つた彼れの男性的立派さに胸をうたれた。筆者は彼れの父とも親しかつた關係上、殊更感銘の深いものがあり、日本精神がかくばかり立派に根づいたかと考へると、よくやつて呉れたと喜ぶと同時に、何だか泣けて〳〵仕方がなかつた。

彼れの父ピヤスリセーナ中將は、五代六代國王の寵臣として立派な人格者であ・た。不幸舌癌に斃れた。ピヤスリセーナ中將の長兄は暹羅陸軍の創始者で、當時暹羅の西郷と日本人からうたはれた、一世に勇名高かりし元帥チヤオピヤラサツクである。其弟子海軍中將ピヤマハーヨタアあり、又農務次官ピヤビチヤチープもあつた。總じて代々武門を以つて忠勤を勵み、一門一族三千と稱されて、暹羅隨一の家柄に屬する。

筆者はスラサツク元帥に最も親交あつてその謦咳に接する事殊に久しかつた。かの革命の報を耳にするやルアング・サラシツト少佐の身邊を私かに憂ひて無事を祈つて居た。其の後彼れの無事なるをきいて、地下の伯叔父乃至先考も必ずや泉下に安んぜらるゝ事と想像して獨り喜んだ。何だか幼少よりの彼れを知つてる爲めか、血族のやうな同情がわくを禁じ得なかつた。君臣の義が盤石のゆるぎなき堅固さに於て、日本は國礎を堅めて居る。

そして彼れ、日本歴史の何處にか往時起つたかのやうな事件を、今まのあたり暹羅で彼れが再生して見せてくれたかのやうな氣もちもする。ゆかしい彼れの名を思ふと然しながら、一しほ痛はしくてたまらない。今は盤谷の獄屋に十八年とかの體刑を神妙に服役して、一般囚人と伍して模範囚と仰がれつゝ、淡い感想に耽つて居る事であらう。愛國の至情に於ては、彼等兩人も一般暹羅人とすこしも變りはない。然し政變によつて彼等の忠勤を抽んずべき王樣を失はんとした。此のデリケートな感情が彼等を現在の不遇に投げ込んだ。然し暹羅の政府の要人も人物經濟を忘れては居なからう。暹羅は常に非常時だ。一人の人材も喪つてはならない。恩赦か何か特別の詮議によつて折角仕上げた斯のやうな寶を自由にして、更に新しき努力を暹羅の爲めに捧げしめねばなるまい。

マンゴの葉影

微恙ありベッドに居ればマンゴ葉の　影うごかして月光流れ　靜かに〳〵白毛布てる

パパイヤの雄の木いふやう月よしと　雌の木いふやう風涼しきと　やがて二人のダンスありけり

ビン一つ落ちても響く秋の夜の　しゞまころ〳〵きりぎりす鳴く　南國の人にまた悲愁あり

紫のかすみを山は呼吸して　地中に深く結晶すなる　暹羅のサフアイヤあまた產むかな

草原のところ〴〵のほころびに　古き煉瓦の顏もたばつつ　夕陽にかたる舊都の歴史

五時の太陽のめまひせしむる强烈に　たぢろきながら去り難くして　たつき求むる常夏の國

閑散は無聊伴ひ晝さなか　熱帶人を軒にあつめて　九官鳥にものをいはしむ

口嗽ぐ水齒にしみて常夏の　都の師走しられぬるかな

鶯鳥の叫ぶ悲しき黄昏

葩のよくも櫻に似たるより　またなくめでゝ私服のまゝに　月夜を通し樹下をめぐれる

遠き國人黑き國炎熱の　くろがねとかす常夏の國　妹のたよりまちわぶる國

すゝなりの隣家のマンゴ遠からず　熟れんとすなり枝もたわゝに　我が窓にふる娘かごもて
甘露とはアイスボクスに冷したる　椰子の實充す澄明の水　之を吸ふもの南山の壽得む
青みどろ此所は后宮三千の　佳麗夕べに梳りたる　脂粉の池か舊都なつかし
白鳥のむれ浮く中を歌舞もゆるく　龍頭鷁首の船をうかべて　御興深かりし池か懐し
瑠璃朱欄金銀燦として一世の　華美うたはれし王宮の池も　書閑として睡蓮のさく
六百の土人の家の燒跡の　しゝまを照す十五夜の月　我泣き泣くも泣きあかぬ月
君寵は今は御名のかしら字を　空しく飾るダイヤとなりぬ　憎くゝも美なる過去よ追憶よ
飛行機の日毎舞ひとぶ空を眺め　考へて見ても考へて見ても　故郷にかへるすべはなかりき
根わきせし浮草の身かつぎほせし　果實の枝か親はらからに　別れ淋しくさすらひて生く

笑まざるや女よ汝はゐむことの　汝が指にする寶石よりも　尊きものを笑まざるや女
かしましき女よ地獄に墮ちてゆけ　汝はかしこに永劫に去れ　薄きを見よ薄きを口唇の
悲しみの日を向日葵の　今日も明日もめぐり〳〵てうち萎れゆく　廻り合ふべき世の幸もなく
磯に立てば浪は干るなり嘯けば　月さゆるなり故郷戀しく　東京の空うち眺め明す
それはよきある神無月の日なりけり　碧き海と空と島の中を　わが戀とびて白雲となる
若き血のすべこき膚を柔かに　めぐりてほこる二十歳の美をば　異國の森にすてゝ來しかな
腹ばへて十萬坪の青芝の　運動場に夕陽浴びつゝ　日曜しづかに詩集などよむ
弟妹よ卿等の手足たらちねの　老をいたはる程のびたらば　兄にゆるせよ十年の旅
所在なきに日本刀をひきぬきて　二ふり三ふり虚空を切れば　切先三寸青くさへたり

友の女兒三つになれるをかいだきて　やもめぐらしのこの七年に　未だ覺えざるあはれ知りぬる
卷煙草一本ふかすみちのりに　君は居て住む一日もかゝさず　訪うて語ればまた來て語らふ
寒き夜にと秋の初めに送りこせし　母のなさけの綿入つけて　新衣のかほりありがたく嗅ぐ
李白きけ樂天また見よ碇泊の　船に稱する月明の夜の山よ河よ海よみな詩ならずや

○暹羅訪問紀行

淺野研眞

〔小引〕私は一行五名で、昨年十一月、外務省文化事業部の御斡旋もあつて、時局柄、身に餘る訪暹佛敎使節として、全日本佛敎青年會聯盟その他からのメッセーヂを提帶して渡航の壯途に上り、本年早々歸朝したものである。仍つて玆に、その紀行を概約乍ら執筆し、以て報告に代へ大方各位の御笑覽に供せんとした次第である（昭和十三年六月）

はしがき

私共の今次の暹羅訪問の動きに就ては、その都度、既にラヂオに、新聞に、また雜誌などに、幾度となく報道せられた所であるが、中には可なり誤報せられてゐる部分もあるやうである。

それで、實は宣傳がましいやうで心苦しい次第ではあるが、何分にも、かうした國際的な親善使節に關しては將來への影響などもあらうし、また一面から考へれば、一應の報告をして置く義務も感ぜられるままに、玆に此の訪暹紀行の私記を、敢て發表することにしたものである。

しかし、この私記では、努めて一行の動きを記述するに努めたが、瑣末な部分に至つては、各自の觀察に多少の開きがあることは必然だから、從つて、本紀行文は全面的な動きの記述を主としたものではあるが、そこに多少筆者獨特のニュアンスが出るだらうことは、また止むを得ないだらう。

尙は、此の渡暹行に對して、種々芳情を賜りたる內外の各位に對して、玆に深謝いたす次第である。また文中御芳名などを拜記して、却つて御迷惑の向きもあらうがそれも御赦しを願ふ次第である。

暹羅を目ざして

時はこれ昭和十二年十一月二十八日、丁度、日曜日のこととて、御見送りの方々には、甚だ御迷惑をかけて相濟まぬ次第であつたが、此日、午後八時三十分、東京驛出發、翌二十九日（月）朝七時四十七分、神戸驛着。

この列車で行を共にしたのは、小生を初め、關根君、それから態々濱松から上京した木全君の三人であつた。此の急行列車には、大谷瑩潤氏も京都まで西下の用あつて同車され、翌日は神戸まで、特に一行の鹿島立ちを御見送り下されたものだ。

さて、途中、靜岡驛では、松本小四郎、赤堀圓一の諸君が出て居て呉れて、淺間神社に傳はる山田長政の遺物のエハガキ等を贈られた。

次に濱松は、木全君の本據だけに、濱松佛敎會の面々を初め、小生も顏なじみの多い同地の要人たち數十人が見送りに出てゐられた。そして同君の令兄と令閨とが乘込まれ、神戸出帆まで御同行とは、さて〳〵「お名殘り惜しや……」ではある。

大津驛では、關根君の關係などで、比叡山の方が出て下さつたのに、私は丁度、寢臺にもぐり込んでゐて、失禮してしまつた。今井祐申氏は特に名刺を通ぜられてゐた。

實際、私は、出發前の準備に忙殺され、風邪氣味であつた所へ、警視廳防疫課長の井口乘海博士の御厚意により、種痘からコレラの豫防注射を三回までもして貰つて少々發熱し、せきが連發して、ものいうこと夥しい。

南征の門出にせきが連發し

昨年夏の渡支の時は、珍らしや、シヤクリが連發して京都の宿舍で遂に一足ストツプせざるを得なかつた思出も新しい。

昨年のシヤクリ今年はせきとなり

しかし、一度び出發した以上は、みす〳〵止まることを許さず、船中でユツクリ休息すれば良いのだ。

さて次に京都驛では、早朝にも拘らず、平安中學の佐藤哲英君、中外日報の鮎澤記者等々の、また大阪では内田君夫妻の、そして最後に神戸驛では足立彰三君の、それぞれ歡迎送を受けた。

神戸では一先づ、西村旅館に落ちついた。

此處には既に計らずも、名古屋の小松原兄が先着してゐたので、次いで滋賀の武田君が落ち合ふに至つて、これで一行五名の勢揃ひが出來た。

此日、卽ち廿九日、午前十時出帆の豫定であつた大阪商船の西貢丸は、都合により、午後二時に出帆をおくらしたので、ユツクリ、朝食兼中食を攝つて、晴れの鹿島立ちの腹ごしらへをした。

それから、大朝、大毎の兩支社を訪れて挨拶をし、水上警察署でパスポートに出國捺印を貰ひ、いよ〳〵波止場に向つた。

しかし、我等の西貢丸は、此の良港にも拘らず、横づけではなくて、沖の碇泊なので、ランチによらねばならぬ。少々氣を腐らしたが、これ又止むを得ないことだ。舟旅をすると、いつも氣が永くなる効果があることは事實だ——。

船へは、東京の岩本勝俊氏、廣瀨了義氏などから、壯途を祝す旨の祝電が送られて居た。また神戸西本願寺贊事藤波智空氏は、岡部輪番の名刺を齎して、見送り下さつた。また東京から西下された前述の大谷氏を初め、天臺宗教學部長山村光敏氏等、多數の御見送りを受けて、花々しい鹿島立ちをしたものだ。

この夕、私は東京郊外、武藏野の留守宅へ、船から無電を打つた。——

「ゲ　ンキデ　セトナイカイコウコウチウ」

美はしの臺灣へ

我等の西貢丸は、神戸出帆の翌日、三十日（火）の朝十時、門戸港に着、福岡日日新聞等の來訪を受け、同午後四時同港出帆、いよ〳〵玄海を渡つて、我が南方の鎭め、美はしの島、臺灣へと向つた。

門戸では上陸して、若干の買物のついでに、丹前を買ひ込んだが、これは勿論、數日後には邪魔物にしかならなかつた。

十二月一日と二日との中二日間の航行で、三日の朝八時には、既に美はしの臺灣の北門で雨の名所たる基隆に入港した。

常夏の南の島はしぐれづめ

此の「内臺航路」の初日たる十二月一日には、玄海で可なりに荒れたが、私は却つて東京以來の風邪を退治する好機を惠まれ、船室で靜臥して、すつかり元氣を恢復してゐた。

日程では、基隆入港が二日になつてゐたので、臺北の知友たちには、色々と手ちがひを生ぜしめて、相濟まぬことになつた。卽ち臺灣佛化青年會では、二日の夕、わざわざ私共のために歡迎會を催されたとのことであるが主賓は到着せず、これは所詮、無駄になつてしまつたのだつた。然るに尙ほ三日（金）の朝も、基隆埠頭に同青年會の楊天送君と世古君、それに同鄕の平野君（臺北一中勤務）などの出迎へを受けた。そして、同日午後六時出帆までの時間を利用して、臺灣島の首都たる臺北を訪れることにした。

臺北までは、汽車で約一時間、直ちに總督府文教部に挨拶を試み、次いで基隆で來訪を受けた臺灣日日新報と臺灣新民報の兩本社を訪ねた。特に「臺日」では、木全君の舊知たる大竹文輔氏がゐられたので、何に呉れとなく斡旋を受けた。

中食は臺北一流の蓬萊閣で、前述の佛化青年會の會長で、妙心寺派臺灣布教監督たる高林玄寶老師の接待で、同會の幹部諸君と共にした。

食後、料亭のバルコニーで紀念撮影をしたが、丁度その時、本島人（臺灣人）の葬列が通過するのに出會ひ、泣男などの有樣まで、高所から之を完全に目擊し得たのも、一個のチヤンスと云ふべきものか。

時間がないので、これと云ふほどの市内見物もせず、ただ此の南方の離れ島で活動されてゐる各宗の布教監督

部を御訪ねした。流石に臺北は臺灣の首府だけあつて、東西本願寺を初め、曹洞宗、淨土宗、妙心寺派、高野山、日蓮宗、天臺宗などが、何れも大なり小なり開教線を進めてゐる。

今後、支那事變以後に於ける臺灣の地位は、一層わが南進策の據點として、その重要性を加ふるであらうこと必定であつてみれば、臺灣の再認識こそは、此際、特に必要であらねばならぬ。

されば私は、歸路にも、幸ひ再び私等の乘つた船が基隆に寄港したのを機會に、私だけではあつたが、特に一夜を著社に明かしたりして、數日間を本島の視察見學のために費し、かねて若干の文化活動をも行つた。

南海の美はしの島フエルモサに
みのりを傳ふることぞとうとき

佛領印度支那へ

十二月三日（金）午後六時、基隆港を出帆した西貢丸は、今や一路、南支那海を突破、佛領印度支那の北部、東京（トンキン）省の開港海防（ハイフォン）を目ざして進んでゐる。どうやら船は熱帶圏に入る——。

極寒と極暑の交謝南支の海

かくして、四日・五日・六日の中三日を航行して、七日（火）の朝、海防（ハイフォン）に入港、此處は人口二十萬で、佛領印度支那の最大の都會とされてゐる。日程では即日出帆の筈であつたが、荷役や潮などの都合で、明朝八時出帆と云ふことになつたため、私は雀躍して喜んだものだ。

と云ふのは、河内（ハノイ）訪問の時間が得られたからだ。即ち此處海防から一〇三キロ米、貧弱な汽車で三時間を要する首都河内（人口十五萬）を、どうしても私は、今度の旅行の行程中、是非訪問したいと計畫してゐたからだ。

——しかし、運羅からの歸路にすれば、地方通ひのフランス船にでも乘らねばならず、飛行機の便はあつても、少々高價だし、それに西貢・河内間の直通列車が昨年（一九三六年）末から開通してゐることなども知らされてゐなかつたので、河内だけのために、態々の引返しも大變だと考へてゐた矢先きであつたからだ。

本當に、此處で船が一泊して呉れたことは、今度の全旅程にとつて、此上もない便益を得たものだつた。もしさうでなかつたら、少くとも私だけは、河内訪問のために、歸途に於て、恐らく便船の、ひどい不便に出會はねばならなかつたらう。

吾々は上陸して、直ちにタクシーを命じ、流石にフランスが手入れしただけあつて立派な植民道路を、しかし貧弱な體格の土人が群れる中を、ひた走りに走つて、南國の田園風景をめでつつ、正午前に河内に着いた。

唯一の日本人ホテルたる小田直彦氏經營の小田旅館を訪ね、市の市外のドライヴ見物をする。例の薄命の歌人留學生、安部仲麻呂の遺跡だと云ふ所をも眺望した。

中食後は「河内佛教會」を訪ね、次いてフランス國立極東學院（向ふでは河内遠東博古學院と譯稱してゐる）を訪ねる。この學院こそは、全世界の東洋學徒のあこがれの的で、實にフランスが全世界に誇るべき東洋學の最高研究所である。故シルヴァン・レヴイ氏なども、嘗つて居た所で、現在の院長はジョルジュ・セデース（George Coedès）氏である。

明治三十五年に此の學院で開かれた萬國東洋學會には我國からも南條・高楠兩博士などが出席し、フランスのモース氏などは「印度支那社會學」（la Sociologie indochinoise）なるものを發表した。

此の學院の圖書館は、實に素晴らしいもので、世界の學界の垂涎おかざるところで、その豐富な藏書の中には日本語の文獻も相當にあり、その室は、半島出身の金永鍵君が司書をしてゐる。

次いで有名な當地の博物館を見學し、再び山田旅館に戻つてお茶を攝り、薄暮やうやく逼る南國の夕景色を滿喫し乍ら、同じ自動車で海防港への歸りのドライヴを急がせた。

「極東の眞珠」西貢

十二日八日（水）朝八時、滿潮に乘じて海防港を出帆し、海岸線に沿つて南航し、九日を過ぎて十日の夕刻、交趾支那の首都西貢に通ずる西貢河口に着いた。

しかし、西貢は此の河口から、まだ九十キロ米も遡航せねばならず、それには少くとも四、五時間を要するのと、潮流の關係で、明朝の入港と云ふことになり、味氣ない一夜を海上にただよふ。

そして、十二月十一日（土）朝入港、直ちに上陸して日本人會の事務所たる大南公司を訪ね、松下氏や、安藤氏などの御厄介になつて、市内見物をする。人口は十五萬ぐらゐだが、「極東の小巴里」とか、「極東の眞珠」とか稱せられてゐるだけあつて、市街も大通りは巴里式で、小奇麗だ。しかし何と云つても、植民地的な品位しかないやうだ。

尙ほ、此の西貢には、歸りにも立寄つた。卽ち、暹羅から陸路、かの有名な世界的ルインたるアンコールを訪ねて、カンボチヤ横斷のドライヴを行ひ、此の西貢から再び同じ西貢丸に乘船したものである。

いよ〳〵暹都へ

さて、我が西貢丸は、十二月十一日の夕刻、西貢を出帆して、十二日、十三日と航行を續け、この十三日の夕方には早くも目ざす暹都盤谷から二十二哩のメナム河口に着いた。しかし、再び此處でもストツプ、晴れの入京を目前に控へて心ははやるが、これ許りは如何とも致し方がない。

それでも豫定より一日だけの遲延で、翌十四日（火）早朝、熱帶樹の繁る間に寺塔の林立する兩岸を眺めつつ、濁水のメナム河を遡航、途中、美しいワツト（寺院）のあるので有名なバクナムで檢疫を受け、正午過ぎに三井物産の埠頭に横づけとなつた。

船へは、豫め通知しておいたので、前鐵相で日暹協會長たるピア・スリスチカン・バンチョン氏の出迎へを受け、また日本人側としては、公使館を代表して天田副領事が、村井公使及び伊東總領事の名刺を持參して來船された。また日本人會長たる三原新三農學博士、三井物産支店長平野郡司氏、高野山留學生藤井眞水氏等々、多數の方々の御出迎へを受けた。

中にラトヴィア僧二名あり、黃色の比丘の衣を纏ふてはゐるが、眼の色などが違ふので、暹羅僧でないことだけは直ぐに分つたが、これこそ先年、あこがれの日本に渡らんものと、わざ〳〵上海まで來たが、遂ひに其の志を果し得なかつた人々である。私の渡暹のことが向ふの新聞などにも出てゐたものだから、「非常な熱意を以て御到着をお待ちしてゐた」と述べ、暹羅佛教觀から日本佛教觀に及ぶ所の、手紙と云ふよりは意見書を初對面早々の私に提示したものだ。そして私は盤谷に滯在中、二度までもホテルに訪問を受け、種々と意見の交換を行つた。要するに彼等兩人は、日本佛教に對して、非常な憧れを持ち、是非とも日本に渡り度いと、眞劍に念願してゐるのであつた。

吾々が盤谷を出發した際も、熱烈な見送りをして呉れたが、この兩比丘のことに就ては、私は別に「盤谷で會つたラトヴィア僧」を書くつもりだ。

尙ほ吾々は、上陸に先立つて、船のサロンで、訪暹の挨拶として、次のやうな英文のステートメントを發表した。

STATEMENT

We, the Managing Directors of the All Japanese Federation of Young Buddhists' Associations, are now visiting your shores as the delegation of Japanese Buddhists.

We have two objects in calling on your country, the first being to pave the way to closer contact between the two great Buddhist Nations in the world, and the other to express gratitude for all the kindness which was shown through your last delegation to our country.

上陸して、直ちに日本人經營のメナム・ホテルに入り小憩の後、日本公使館に挨拶に參上、伊東總領事に會見し、各團體から委托されたメツセーヂを内示して指圖を願ひ、引續いて村井公使を官邸に訪ひ、來訪の挨拶を行つた。

それから再びホテルに歸り、一風呂浴びてから夕食をすまし、夜は革命五週年記念の「憲法祭」に出かける。

丁度、一週間續いた最終日のこととて、殊の外、賑はつて居り、本年度のミス・暹羅の當選も發表されてゐた。

今年初めて特設されたと云ふ「日本館」に招待され、日暹兩國要人の多數に引合はされ、バンチョン氏父子を始め、三井物産の平野支店長、三菱商事支店長の新田義實氏、美術學校部長の三木榮氏、高野山留學生の藤井眞水氏、日高洋行の日高秋雄氏、等々と快談數刻、御馳走になつた冷たいレモナードは、北方から着いた許りの暑がり屋には、殊の外、おいしかつた。

次いで、此の日本館を背景にして記念撮影を行ひ、三木・藤井氏等の案内で、憲法祭の博覽會場を一巡し、演藝館で餘興の暹羅歌劇を見物する。日本へも來訪したことのある國立美術學校の女生徒たちの出演で、古典劇を現代化した、リズミカルな賑かなものであつた。

翌十五日は、早朝から、暹羅の古都アユーチヤの見物に出かけることにしたので、此の盤谷の第一夜は、比較的に早くベットに潜り込んだ。

常夏の國とは云へ、夜間は何分にも涼しくて、快適である。しかし蚊帳が年中必要であるのだから、流石に熱帶の都だ。

それに、ヤモリが壁や天井に、どこにでも、へばりついてゐて、時々、キヤツ〳〵と大きな聲を出して鳴き叫ぶ。これが、南國の家鼠に見立てられてゐるやうだが、あまり氣味の良いものではない。

――だが、永の航海の疲れのせいか、いつしか華胥の國に遊んでしまつた。

古都アユーチヤへ

十二月十五日（水）は、早朝起床する。南國の朝まだきは、如何にも、すが〳〵しい。

托鉢の比丘たちの黄衣姿が、街々を流れて行くのが、涙ぐましい程に尊く見える。

盤谷中央停車場から北線に乘つて、七時十五分に出發し、平坦な田園風景を賞し乍ら北上、ドンムアンの飛行場なども過ぎて、七十二キロ来を走つて、九時二十四分アユーチヤ驛着、荒れた驛前通りを眞直ぐにメナム河岸に出で、渡し舟で對岸に移り、此處でモーター・ボートを傭つて南下すること約半時間、日本人街遺跡に至る。

此處に山田長政を記念する、ささやかな神社、と云つても、そこらあたりの裏町にある稲荷さん程度のものだ。

しかも、此の土地の指定は、最近のことであつて、在暹二十八年にもなる美術學校部長三木榮氏あたりの考證によつて、日本人會や日暹協會などの奔走で、土地も千坪あまり求め、この小祠を營造するに至つたのである。

尚ほ、昨年（一八三六年）九月廿六日には、新造さるべき記念碑の地鎮祭が、向ふの日暹協會の手で催され、寄附金なども集りつつあるから、支那事變の勃發がなければ、既に建設の運びに至つてゐたものらしい。

所で、茲に一寸問題となつてゐることは、鳥居などを建てて、長政神社らしくすることは考へもので、それよりも長政寺にした方が、暹羅の國情からしても、至極よろしからうと云ふことだ。

我々は此處で、我が南進の大先輩、山田長政及び其の一黨の英靈に對して弔慰を表し、再び雜魚しきりに飛び上る中を引返し、持參の辨當をボート内で食し乍ら尚も北上し、ビトレスクな水上マーケットの間を通過して、舊王城のルインに近き河岸でモーター・ボートを棄て、王宮の主要ルインから、ワット・プラ・スリサンベル（王宮寺）の廢墟、及び其の本尊たる素晴らしいブロンズの大佛などを巡禮する。

次いで河岸から、しつこくついて來たリヤカー式の人力車に乘り、陸路、先きの渡船場に歸る。その途中の博物館も訪ねたが、これは大したものではなかつた。

歸りは午後一時二十一分發の列車でアユーチヤ發、三時三十分には既に歸盤、直ちにタクシーでメナム・ホテルに歸へる。

盤谷の名刹巡禮

ホテルには三木氏、藤井氏などが來訪されて居て、寸時をも利用して、市内の重要寺院の見物を案内して下さるのであつた。

その最初に、先づワット・ポー（これは通稱で、具さにはワット・プラ・ジエツボンと呼ぶ）を訪ふ。これは盤谷で一番廣大な寺であつて、その有名な大きい寢釋迦の像は、長さ十五丈に餘るものだ。

次に、同寺の門を出で、右に直進してメナム河（大河の意）の河岸に出て、ワット・アルン（日出寺の意、通稱はワット・チヤン）を遠望して、その壯美なるに驚く。

更に轉じて一九三二年四月竣工の現代的な素晴らしい新鐵橋をドライヴして渡る。これはラマ第一世皇帝——現チヤツクリ王朝の始祖——の銅像のある公園廣場に面接せしめ、王朝及び建都百五十年を紀念して建設されたものだ。

吾々は車を引返して、左側にスワンクラーブ・カレヂを見、右側にワット・リヤツプを訪ふ。この寺院の境内には、一廓を仕切つて、日本人納骨堂なるものが營まれてゐる。ジヤパニーズ・テンプル（日本寺）などとも英稱されてゐる。その設計は、三木榮氏らの手になるものとかで、昭和十一年春の竣工にかかり、純粹の日本古典式のものであるのも嬉しい。

現堂守が高野山留學生の藤井眞水氏であるのも頼母しいことだ。維持は日本人會が之に任じてゐると云ふから確かなものであらう。南進に先驅し乍ら、不幸にして異域に斃れられた同胞の英靈に對して、私等は心からなる弔慰を表した次第であつた。

吾々は更に轉じて、ワット・サケツト（灌頂寺の意）に詣す。此寺は名古屋の覺王山日暹寺へ分骨された佛舍利の元本を奉安せる大本山であつて、その奉安塔を戴く小山は、煉瓦とセメントで築き上げられた十六丈餘りのものである。（我が佛骨奉迎使節は明治三十三年夏のこと）。

時間がないので先きを急ぎ、更らにドライヴして、ワット・ベンチヤマボビル（大理石寺）に詣す。此寺は、大正五年一月の竣工にかかる近代的建築物で、その内陣などの美麗なことは、全くヴエルサイユの「鏡の間」以上だ。廻廓には、各時代及び各民族の代表的な佛像の模造が陳列してあり、日本の佛像も、初代公使の稻垣滿次郎氏から寄贈せるものが一隅を飾つてゐる。此處の住持タンマコサチヤン師と紀念撮影をする。

南國の太陽は、急に落ちてしまふ。夕暮なしに眞赤な太陽が、ツルベ落しに沒するのである。今日の慌しい名刹巡禮は、如何に急いでも、もう之れ以上は不可能のことだ。

ホテルへの歸途、ラージヤタムノエン街の瀟洒たる三木氏のお宅に立寄り、おいしいザボン（暹羅の名産ださうだ！）などを饗せられた。そして種々快談の間に、我が求法南進の一大先驅たる眞如法親王の奉讃の件に就てほぼ意見の一致を見て、大いに愉快に感じた。本日、案内を共にせられた藤井氏も全く同意見で、大いに此の方面の御活動を願へることになつたのだ。早晩、何とか具體化したいものである。取り分け、既に數年前から、眞如法親王奉讃のことに就て、愚案をめぐらしてゐた私としては、いよ／＼何とか實現せねばならぬことを痛感せしめられた。幸ひに内外同胞各位の御賛同を得て、これが達成に精進いたし度いものである。

今夜も、アユーチヤ行きから、市内見物などの疲れによつて、夕食後、暫らく雜談したのみで、靜かにベツトに潜つた。

公使招待の午餐會

十二月十六日（木）、盤谷到着第三日目である

朝食後、ニューロードの日本人理髮店に行き、内地出發以來の御面相に少々手入れをする。因みに此の床屋さんは、現外相ルアン・プラヂツト・マヌダルン博士の御氣に入りだと云つてゐた。

それから正金銀行の支店で、爲替を現金に換へ、商船支店を訪ねて歸航の船賃を拂ふ。次いで一度、ホテルへ歸へり、一同揃つて公使官邸に於ける午餐會に伺ふことにした。

しかし、その間、まだ一時間許りあるのを利用して、直ちに日本人小學校を訪れ、少壯校長渡邊文人氏の眞面目な經營振りを拜見して、頼母しく感じた。

更らに、有名な蛇病院なるものを見物する。これはロツクフエラー財産の寄附によつて創設せられたもので、

世界的な施設として、頗る整備せるものだ。後庭に、コンクリート造りの蛇の飼養所があつて、各種のコブラなど、ひどい毒蛇が澤山にウヨ〳〵してゐるのは、餘り良い眺めではない。

しかし、此の貴重な研究所は、その入口の壁間に、大きくラテン語で——

祖國のために（Pro Patria）
科學のために（Pro Scientia）
人類のために（Pro Humanitate）

と掲げてゐるやうに、まことに重大使命を荷ふべきものであらねばならぬ。

此處からも、幾多の我がドクトル野口英世の如き獻身者が出てくるやうに!!

正午には、先日挨拶に參上した公使官邸に伺つた。既に村井公使を初め、伊東總領事、天田副領事、笠原事務官など日本人側外交官、さらに日本人會長三原博士、美術學校部長三木榮氏、それに暹羅人側では例のバンチョン氏の面々の參集あり、次いで外相代理プラ・リヱム・ヴイラチバクヤ氏（副大臣、禮典長）及び少し遲れて文相ルアン・シング・ソンカムジヤーヤ氏（海軍大佐）の參來あり、吾々一行を合せて十四人、少時歡談の後、テーブルに着く。その座席は次の如くであつた。——

君　士　相　使　相　君　長
田　博　原　公　總　根　部
武　三　文　村　井　元　園　三

天田副領事	笠原事務官
小松原	淺野
伊東總領事	外相代理
暹羅人側	日本人側

なごやかな此の午餐會は、午後二時頃に終つた。かうした會合に臨む時、私は一層用語の問題を痛感させられる。暹羅側の三要人は、何れも英語は勿論、佛語や獨語等まで上手だのに、我々の側はお話しにならぬ有樣だ。日本語が國際語になる時代が急に來ないものだとすると

もう少し考へねばなるまい。

ラトヴイヤ僧との會談

午後は、三木氏の案内で、支那人の「福利」など云ふ骨董屋を漁つたりしたが、私は例のラトヴイア僧の來訪を受けることになつてゐたので、ホテルに歸つて之と會談した。六十五歳と二十六歳の兩僧で、此の若い方は、英佛獨など、何れも自由なもので、大いに談することが出來た。要するに「大乘は金、小乘は銅」と云ふのである。以前、西藏で修行したものだと云ふが、小乘の暹羅はつまらぬから、大乘の國「大日本」へ行きたいと云ふのである。彼等は必ずしも淺薄な見解の人々ではないらしいが、却つて日本へ來てみて、その所謂「大乘なるもの」に驚くかも知れないのだ。遠美近醜の結果にならなければ幸甚である。とに角、此の兩人に就ては、稿を別にすることにしよう。

夕食後は、午後七時から日本人會で開催された日本人會主催の南京落城を記念する戰勝祝賀會に招待されて之に出席、在留邦人約二百人の參列あり、陸軍武官田村浩中佐の講話があつて、後庭の野天で立食の宴會である。餘興として「南京城」をもじつた「男禁城」などといふ素人劇などまであつて、一入と賑かであつた。

吾々一行にも挨拶を求められたので、年長の故を以て小松原兄に御苦勞を願つた。

此の席上、海軍武官の中堂觀惠中佐は「私は寺の生れです……」と名乘られて、能登の大谷派の末寺の長男で大谷中學に在學されたことまで物語られた。そして明日の午餐に招待したいとのことであつたので、その御厚意を御受けすることにした。思はぬ所に「佛緣」があるもの哉と、しみ〴〵感ぜしめられた。

ホテルに歸つてから、トランクなどを船に積み込むために、先日、上陸した埠頭に車を驅る。西貢丸は明朝出帆するので、三等船室には暹羅水兵が定員五十人の所へ五十七人も詰り、賑かなものだつた。

しかし、吾々も亦、陸路、西貢に出で、そこで再び此の同じ船を把へるわけだ。あはただしい、そして極度に

時間を切りつめて活用しやうとする超非常時型の旅行としては、これは又、當然のことであらう。

王宮參觀

十二月十七日(金)、この朝、再びラトヴイア僧の來訪を受けて會談數刻。

次いで藤井氏を煩はして、支那人店で貝葉、佛具などを求め、午前十一時、國立博物館に至る。既に三木氏は門前にあつて吾等を迎へ、親切な案内の勞を執られる。

此の素晴らしい博物館を見學してから、特別の許可を得てゐるので、王宮の拜觀をする。入口で攝政宮殿下に行き合ふ。その全體としての壯麗さもさること乍ら、王宮内のワット・ブラ・ケオ(玉佛寺の意)と呼ばれる王宮寺は、寶玉の本尊を奉安し、國王は御手づから此の玉佛の更衣をされると云ふが、殊の外に輪奐の美を極めたものだ。

特に此の境内には、印度の佛陀伽耶の金剛寶座の模型から、そこの菩提樹の移植も行はれてゐる。また、アンコール・ワットの模型もあつて、之を一望の中に鳥瞰するの便がある。尙ほ廻廊の壁畫は、かの有名なラーマヤーナ物語のそれであつて、極彩色で畫かれた極めて豪華なものだ。

王宮を出て、近くの國立圖書館を參觀し、貴重な資料の多いのに垂涎させられたが、何分にも時間がないので何の調査も出來なかつたのは殘念だつた。

次いで急ぎ、車を飛ばして、中堂武宮邸の午餐會に臨む。特に夫人の御高配によつて、暹羅料理まで頂戴したのは、嬉しい思出である。

午後二時には、文部大臣の招待により文部省に出頭、天田副領事の立會の下に、故國から携行したメッセーヂ(佛教聯合會、大學教授聯盟、日本文化中央聯盟、等々から托されたもの)を公式に傳達する。また記念品を贈り、紀念撮影をして、會談數刻——文相は、日暹兩國の文化的提携に就て、大いに今後とも努力したいと述べ、且つ暹羅の教育制度に就ては、改良すべき點が多々あらうと考へるからして、御氣づきの點は指摘して戴きたいと挨拶された。

之に對して、私は一行を代表して、新興暹羅の青氣的意氣を讃へ、且つ佛教が眞に生きて國民精神の中樞となつてゐる狀態を見て愉快に感ずる次第であるが、今や西歐文化の行きづまりに對して、吾々は東洋文化の聖火を高揚するために、愈々益々同じ佛陀の聖訓の下に提携したいと述べて、挨拶としたが、これを天田副領事は直ちに羅羅語に譯して下さつた。

次いで大臣秘書官の案内で、國立大學チュラロンコン大學を參觀し、特に工學部に力を入れてゐる邊りに、新興暹羅の姿を見取ることが出來た。

一度、ホテルに歸へる途次、新設の文政科大學も參觀し、また書店にも立ち寄つた。

歡迎茶話會

午後四時半からは、日暹協會と暹羅佛教青年會の共同主催にかかる歡迎茶話會に臨む。會場は中央ステーション・ホテルである。

このホテルは、その名をラヂヤダーニ・ホテル(Rajdhani Hotel)と呼び、暹羅鐵道院の經營で、盤谷市の代表的な社交場でもある。

來會者は、日暹兩方面の要人で、約六十餘名の出席あり、着席に際して、バンチョン氏は、私を代表に見立てて、五色のリボンの花輪(あの香氣馥郁として、きつく鼻をつく熱帶の花輪だ!!)を首にかけて呉れた。そして以下一行の諸君には、それ〴〵異つた單色のものをかけて呉れた。

そして我が全日本佛教青年會聯盟及び日暹佛教協會からのメッセーヂを、バンチョン氏に傳達せるに對して、同氏の答辭があり、次いで暹羅佛教青年會の現會長ルアン・ジャヴエンサクチ・ソンクラム氏(陸軍少佐、内務省監獄局長)が立つて歡迎の辭を朗讀された。

右に對して、私は一行を代表して、答辭を述べ、行きづまつた西洋文明に對して、今や東洋文化の興隆さるべき時代が來た、今や全アジア數億の佛教徒は、同じ佛陀の聖法の下に、衷心からの相互理解を深め、アジアの全

民族の振起に精進いたし度いと述べた。此の私のスピーチは、直ちに三木氏によつて暹羅譯され、滿場の拍手を呼んだものだつた。

次いで伊東總領事は、缺席せる村井公使を代理して今次の訪暹日本佛教使節團が、さうした崇高なる使命の下に來訪されたるを多とすると前提され、之れ正に兩國精神文化親善の上に、一つのエポックを劃するものであるとされ、今後益々その聖業の實現增進に努力あらんことを祈る旨を述べて挨拶とされた。

次いで小松原兄が立つて、日暹佛教協會に就て說明し且つ眞如法親王の奉贊に就ても述べて呉れるところがあつた。

さて、記念品として、バンチョン氏は、象牙の舍利塔を、また親日翁として有名なプラ・ビビツ・サーリー氏は貝葉を、それ〳〵全員拍手裡に、代表格の私に手交された。かくて此の會合は、極めて盛會裡に、有意義に終つた。

次いで吾々は、夕暮の街を、サーリー翁や藤井氏、渡邊校長などの案內で、ワツト・ラージヤボビールに至り本年八月廿五日、七十九歲の高齡で薨去された法親王チンナウオン殿下の御遺骸に參拜した。暹羅では、高貴な人ほど、早急には火葬に附さないのである。

それから更らに、ワツト・サケツトに大僧正タンマチエリヤ(法塔の意)を訪ね、各自に暹羅貝葉を贈られた。同師は六十三歲乍ら、モダン僧で英語がわかるから、暫し會談を行つた。

尙ほ、同寺の若い比丘の案內で、境內の火葬場を見學する。全く公開式の野天に等しいものだ。それ故、今や之が改良問題も起きてゐるとか云ふが、仲々簡單には行かぬらしい。

次いで川向ふにドライヴして、明治二十年代に織田得能氏が留學してゐたと云ふワツト・ビジヤヤート(Wat Pijaiyat)を訪れた。それから又、支那店で若干の土產物を買ひ求め、ホテルに歸つたのは七時過ぎだつた。

明朝は愈々もう出發だ。夕殘り惜しい一夜ではある。

カンボチヤ國境へ

十二月十八日(土)早朝に起き出で、盤谷滯在の最後の朝まだきの街を散策して、黃衣の比丘たちの托鉢行に今更らの如き感激を覺へる。

今日は、東線の七時三十分發の列車で、中央ステーションを發つわけだ。驛に至れば、既にバンチョン氏あり手荷物などの事まで甲斐々々しく世話して下さつたことは、恐縮の至りだつた。

日本人側も多數に、また暹羅側もサーリー翁を初め多數に、それにラトヴイア僧も見送つてくれて、感謝に堪へないものがあつた。プラツトホームでも記念撮影をして、愈々發車に及んで一同名殘りを惜んだが、特にラトヴイア僧兩名は、列車の動き出すのにつれて、日本語で「萬歲々々!」と手を高く擧げて高聲に叫び乍ら、プラツトホームを何處までも追つて來るのであつた。如何にも情熱的な、劇的なシーンであつた。

汽車が暹羅平原を東北に進むに從つて、次第に丘陵性の風光が展開する。ホテルから持參した日本辨當を車中で開いて、舌鼓を打つ。但し、十二月だと云ふのに、日中の車中はたまらなく暑い。ただ車窓に展開する原始的な風光に慰められるだけだが、それも寧ろ單調に過ぎる。それでも時々は林中に野猿を見付けたり、また水牛や、雜色の熱帶鳥類の群がるのを見るのも、たしかに珍らしい眺めだ。

盤谷から二五五キロ米を走つて、東線の終點たるアランヤ・プラテサ驛に着いたのは、午後三時十分。西貢の大南公司から廻して置いて貰つた自動車に乘つて、直ちにアンコールに向ふ。

驛から六キロ米で、佛領印度支那のカンボチヤ國境に到着、手荷物とパスポートの檢査で三十分ばかりを費す。

アンコールへの道

國境を過ぐれば、愈々フランス領で、いはゆる植民道路が良く營まれてゐる。然し、何と云つても、原始的な平原のこととて、極めて平凡なドライヴだ。ただ青、黃

赤、白、黒の雜色の鳥が群れ遊んでゐる有樣は、何とも云へない原始的な雄大さである。

百マイルを三時間半で突破して、七時半にシーム・レアプに到着、直ちに宏壯なグランド・ホテルに投宿する。

このホテルは、特設の觀光ホテルだけあつて、流石に設備萬端は行きとどいたものだが、宿賃も一泊最低十二ピアストル（邦貨十五圓）だから、相當なものだ。

夕食後は凉風に額をなでられ乍ら、月明の下を、小川に沿ふて散策し、水車のきしる音などを聞いたのは、また格別の風情であつた。

世界的な大廢墟

明くれば十二月十九日（日）、午前五時と云ふ暗い中に起き出で、朝食も簡單に、直ちに自動車に命じ、六時から十時までの四時間で、此の世界的な一大ルインを見物したわけだ。しかし、此の絶大な文化的廢墟たるアンコール・ワット並びにアンコール・トム等に就ては、別に詳說することにした方が良からう。

見物に滿喫して、一應またホテルに引返し、少し早目に午餐を濟まし、再びドライヴして、陸路カンボチヤを横斷して、西貢への道を急ぐ。

但し一行中、小松原兄たけは、印度へ廻ると云ふので、此處にもう一泊して、明朝の郵便車で暹羅へ引返すことにしたものである。

首都プノン・ペン

フル・スピードのドライヴだ。途中コンポン・トムに停車小憩し、更にドライヴして、プノン・ペンに夕方到着。

此のプノン・ペンは、カンボチヤ王國の首都で、人口十餘萬の美しい南國の都だ。あらかじめ打合せてあつた大南公司の支店（唯一の日本人商店！）に立寄つてから、ドライヴで三十分間ばかり夕方の市内見物を行ひ、丘の上の名刹ワット・プノンを參訪して、そこの大僧正からカンボチヤ貝葉を贈られたが、何分、土語しか通じないので、充分な話しも出來ないのは殘念であつた。

再び引返して、同支店で晩餐を供せられ、夜中の道路をドライヴして、アンコールから合計三五〇マイルを突破し、西貢に着いたのは、丁度、眞夜中であつた。思へば、暹羅國境からカンボチヤを横切つて、實に七百キロを長驅したわけだつた。

西貢では、直ちに埠頭に横付けられた西貢丸に駈けつけさせ、船室に納まつた時は、本當にホツとした。これでもう日本に歸つたも同樣だと云ふ氣持ちが、しみ〴〵と、こみ上げて來た。

そして今度の旅行が、これで大過なく、否、可なり上首尾に果遂されたのだと云ふことに對する感謝感に浸り乍ら、むし暑い船室のベツトに横たわつた。

愈々歸航へ

明けて十二月二十日（月）は午後六時出帆と云ふので午前中は再び市内見物に出かけ、特に鹽田氏の案内で、高臺教の發祥地が市内にあるのを視察見學に行つた。此の高臺教は、近來、この地方で、偉大な勢力を張つてゐる新興宗教であるが、その名稱だけは、私は既に、もう十年も前に、ヨーロツパに留學してゐた時分から聞き及んでゐたのと、日本や支那などの新興宗教も研究してゐる關係上、殊の外に興味を覺えたので、相當に突き込んだ調査を行つた。開教以來、近々十數年にしかならないのに、既に全佛領印度支那を通じて、特に安南人の間に百萬に近い信者を擁してゐると云ふことである。その内容は、かの北支などに盛んな紅卍字教や、救世新教などに等しいものだ。（その詳細に就ては別に「印度支那の新興宗教・高臺教の眞相」なる一篇を書いたから、玆では多くを語るまい）。

尙ほ、中食は都心のフランス料理店で取り、午後は若干の買物などをし、且つ色々と世話になつた大南公司に立寄つて謝辭を述べ、人力車で船に引返し、靜かな晩景裡に、名殘り惜しい出帆氣分を味はふ。

かくして船は廿一、廿二、廿三、廿四の四日を航行して臺灣の南を廻り、廿五日の午後六時、基隆に入港、私は直ちに上陸して臺北に向つた。即ち私は他の諸君と別

れ、臺灣の視察見學のために數日を費やすべく西貢丸をすてたのであつた。

臺灣からは、內臺連絡船に乘換へて、新春早々、內地へ歸つて來たわけである。

惟へば、ほんの四、五十日の飛脚旅行ではあつたが、今度の旅行ぐらゐ、收穫の多くて有意義な旅行は、餘りあるものではないと、非常な滿足感に浸らされてゐる次第である。

支那事變の進展によつて、我が日本のアジアに於ける地位は、一層決定的なものとなりつつあるが、今後の南進國策の立場からは、友邦暹羅國との親善關係こそ益々增强されねばならぬものであることを、玆に特筆して、此の拙なき紀行文の筆を擱くことにしやう。（完）

暹羅の象狩

其の由來

はしがき

象狩は古くから暹羅に行はれて來た。而も國運の隆盛な時代程屢々行はれた模樣である。近年は永らく中斷された形であつたが、今年は新興暹羅を表徵して再びこの豪華な行事の復活を見たのである。以下は前駐日公使ブラ・ミトラカム・ラクサー氏が盤谷ロータリ倶樂部で行はれた象狩に關する興味深い講演をサイアム・クロニクル紙より譯出したものである。

象狩の歷史は古く二千年以上にも及び、印度がその元祖である。象を穽の中に追込む Keddah system による捕象の方法を述べた古い記錄が二千二百年も以前に Megasthenes 及アリアン人によつて綴られて居る。斯樣に象狩といふものが濫觴を印度に發して居るところから、象狩に關聯した色々な神秘的な考へ方が矢張り印度方面から傳へられて居る。併し玆にはその說明を省略することゝし、かゝる神話を承知し度い方には Francis Giles 氏の「象狩の歷史」を讀まれることをお奬めしたい。

暹羅では古來象狩に二つの方法が採用せられて來た。北方のチェンマイ、チェンセン、ナーンの諸地方及び南海岸地方では前述の Kraal 或は Keddah system が行はれ、ペチヤブーンを含む東部コーラートの高原では、象狩は稀に行はれ囮象を使用する方法が用ひられた。この方法は前の象穽の方法よりも一段と熟練と勇氣を必要とするものである。

象狩は今日も尙盛んに行はれるところのもので、それは極度に狩人の敏捷さ、勇氣、熟練等の要素を必要とする業であるが故に、必然的に魔術とか宗敎的な荒修行とか、德行などによつて脚色され、又象狩といふ作業は大抵山の精などが住んで居ると考へられるやうな大密林中で行はれるのが常であるから、之等の山の神の御氣嫌を損じないやう更に進んで種々な加護を享受し得るやうに "Mantras" や "Stanzas" を誦し、生贄を供へ飮食料を奉り、火の神である Agni を禮拜し、呪文を唱へなどして色々な精靈敎的な、邪神敎的な、波羅門敎的な、又佛敎的な形式の祈願を捧げるのである。又象狩が終了して捕へた野性の象が狎れた時にも祭典を執行して狩人達に委囑せられた責務を完了したことを表明し、又暹語でラーテイ・グラーコーンといふ祭典を行ふ。この祭典は山の神に對する謝恩を意味するもので象狩隊長は山の神に對して次のやうな意味の言葉を言ふ。象狩は無事に終了した。捕獲した象は自分達の財產である。自分達は山の神に對する御供に相應しい充分な御利益を頂戴した。今後は何卒山の神の本職に立戻つて自分達の身內に憑かないやうに願ひ度いと、はつきり山の神に對する謝恩と緣切を宣言するのである。

暹羅の歷代王中殊に象狩を愛好せられたのはナラーイ

及びチュラーロンコーン兩大王で、ロブリーにはナラーイ大王當時象狩の爲に特設せられた石穽の一部分が今日尙殘存して居る。チュラーロンコーン陛下も屢々アユチヤで象狩を行はれた。ニコライ二世が皇太子の頃暹羅を訪問せられた際、陛下は象狩を催して皇太子を歡待せられた。

暹羅には名前の異つた色々な種類の象が居る。例へばチヤーン・サムカン(noble elephant)チヤーン・シイ・プラート(extra-ordinary elephant)チヤーン・ニヤム(black elephant)チヤーン・シードー(tuskless elephant)等で最後の無牙象は勇敢で、聰明で、而も力量がある故囮象として多く使用せられる。以上多くの種類の中で最も珍重がられ希求せられるものは勿論チヤーン・プアツク卽ち白象であるが、白象中にも形や毛色によつて色々と區別されて居る。暹羅では最も形態の整つた象といふのは頭部の大きなもので、チヤーン・ナア・ヂヤツク(鬼面象)と言つて居る。この種の象は勿論數多くあるものでは無く、普通一般に見受けるものは頭の小さいチヤーン・ナア・ヌウ(鼠面象)と呼ばれるものが多い。チヤーン・シイ・プラート(extra-ordinary elephant)がヂヤングル中に發見された場合はその地域の管轄當局は早速その旨を上司に報告する責務を有するものであるが、この場合敢て白象が發見された—實際白象であつても—と大膽な報告をするものは恐らく一人もない。といふ理由は象は一群中の他の象との色彩の調和を保たんとする本能を有し、假令毛色の變つた象が居ても、泥や汚物を塗抹して、カムフラージュして居るからその色合を識別することは甚だ困難だからである。右に關聯し私は玆にラマ三世時代私の祖父が經驗した興味ある挿話を紹介しやう。祖父がラマ三世プラナンクラオ王の近習を勤めて居た頃の話であるが、その頃中部暹羅にチヤーン・シイ・プラート(extra-ordinary elephant)が發見された旨の報告があつた。果してそれが白象であるか否かに就いては責任當局も前述の理由で言明を避けたのである。王は祖父に鑑定方を命ぜられた。曾祖父は祖父に對し、國王は今非常に白象を冀求して居られる際であるから報告に一入の期待を懸けて居られるに相違なく、さりとて白象でないものを白象だと申上げる事もならず、事の重大性を說明して愼重考慮す可き事を警告せられた。祖父は不安の餘り不眠の幾夜を過されたと語り傳へられて居る。偖て鑑定の結果報告された象は普通一般のものに過ぎなかつた。そこで祖父の王に對する復命は次の如きものであつた。

閣下に申上げます。件の象は若し連れ戻り磨をかけるに於ては尙幾分の色彩を持つものと存じますと。王はこの拔け目なき返答を了解せられたに相違なく、祖父は王の不興を蒙らずに放免となつた。

外人はよく暹羅を白象國と呼ぶが、實際に象は過去に於て暹羅の歷史に重要な役割を演じてゐる。或時代には白象が遂に戰爭を誘發した事さへもあり、今日に於ても尙白象といへば、幾分の煽動性を持つて居る。白象を見ること歐米人の如くなる迄には尙多少の時日を要するものと思はれる。暹人は象を他の家畜とは全然切離して一種特別の待遇をする。又象は神話中にも、宗敎中にも將又宮廷歷史中に於ても一定の地位を有し、象飼の役目は嘗ては高い名譽ある職掌だとされて居た。象飼は各自に秘傳を藏し、その鍵には工匠頭の地位が約束せられたのである。偶々彼等が默々として、整然たる秩序のもとに象狩の動作に從事して居るのを見物した丈では、彼等が行はねばならない特殊な祭典や儀式及びそれらの複雜性などは感知し得ない。又象使ひは斯樣な事柄を他人に漏すことを欲しないといふのは彼等にとつてはその特殊な儀式や祭典は神聖な意義と性質を持つものであるからである。

來る五月ロブリーの陸軍當局が行ふ象狩はその規模に於てはアユチヤの十倍大のもので、この象穽の中に追込まれる象の種類もアユチヤ平原の象よりもその性獰猛で非常に制御し難いものである。五月十二日は野性の象を穽中に追込む日で、十三日は興奮した象に子守歌を聞かせて鎭靜し、十四日には二、三の象に綱をかける豫定となつて居る。(奧野金三郎氏譯)

雜報欄

○秩父總裁宮殿下戰線御視察

長くも秩父宮殿下には大本營陸軍部參謀の御資格をもつて、五月十日福岡雁ノ巣飛行場御發、空路を上海に向はせられてより、上海、南京をはじめ江南方面及び北支の第一線に尊き御身を運ばせられ、皇軍將兵の輝かしい戰果の跡、また將士の活躍を親しく御視察あらせられ、同十八日には張家口を經て滿洲國に向はせられ、各地御視察の上、六月四日朝飛行機にて奉天御發同午後一時半雁ノ巣飛行場に御歸著、同飛行場内に御小憩の後再び空路を御差なく夕刻羽田飛行場に御歸著遊ばされた。一ケ月に亙る戰場の御旅にも拘らず、殿下にはいとも御元氣に拜せられたることは、洵に感激のほかない次第である。

○秩父總裁宮殿下の有難き御思召

秩父總裁宮殿下の御召に依り、矢田常務理事は三月三十日朝赤坂御殿に伺候し、約二時間に亙り、親しく最近の邊羅國情、日邊關係並に本協會の近況等に付き、御說明申上げたる所、殿下には終始いとも御熱心に御聽取遊ばされた、尙ほ種々御下問に奉答感激して御前を退下した。

殿下が此の如く日邊關係の事に、常に御關心を有せらるゝことは、洵に恐懼に堪へざる次第であると共に、本協會の光榮とする所である。

○秩父總裁宮殿下へ前邊羅公使ラクサ氏より手長猿獻上

昨年十一月歸國した前駐日邊羅公使プラ・ミトラカーム・ラクサ氏は秩父總裁宮殿下へ邊羅產手長猿を獻上申上たいとの希望で、本年四月十八日同氏の令息プリーダ・プナシリ君が留學の爲め再び來朝の際、この手長猿を托送して來たので同二十九日の天長節に矢田常務理事がプリーダ君同伴赤坂御殿に參殿、獻上の手續を了した。この手長猿は、ターザンといふ名でラクサ公使の方で飼つてゐたものである由なるが、とても人なつこい可愛い猿である。

○駐日邊羅公使歡迎晩餐會

客年十月下旬新に着任せられた駐日邊羅公使ピヤ・シー・セナ閣下に對する本協會主催歡迎會は、疾く開催すべきであつたが、近衞會長が當時非常に多忙の爲め、主人役を勤めて戴くことが出來ず、段々延び〳〵になつて居た所、幸ひ會長の都合が付き、漸く五月二十三日午後六時半丸の内東京會館に於て、歡迎晩餐會を開いた次第であつたが、生憎開會直前に至つて近衞會長が公務の爲め出席出來ぬこととなり、已むを得ず德川副會長代つて主人役を勤められ、席上副會長が、近衞會長の歡迎挨拶の辭を代讀せられ、之に對しピヤ・シー・セナ公使の謝辭があつた。關係官廳よりの來賓本協會役員並會員等多數の出席あり、頗る盛會であつた。

尙ほ當夜は偶然歐米視察の途次本邦立寄中の、元駐日邊羅公使で曾ては本協會の名譽會長であつたピヤ・スーパン・ソンバット氏、並に豫て本邦滯在中の、元邊羅國經濟大臣プラ・サラサス・ボラカン氏の兩氏も陪賓として、來臨せられた。

近衞會長の挨拶

閣下並に諸君

本夕は新駐日公使ピヤ・シー・セナ閣下の歡迎を致さんが爲め此晩餐會を催した次第であります。實はもつと早く御歡迎申す筈でありましたが御來任當時は私が多忙を極めて居りましたし續いて議會の開會となり遂ひ延び〳〵になつて今日に至つた次第であります。併し是非とも私が主人役を勤めませうと云ふ考からであつたことは主賓並に來會諸君に於かれても之を諒とし御寬恕下さることと信じます。

ミトラカーム・ラクサ前公使は在任三年有餘の間、我國朝野各方面の人士と接觸を勉められ、能く我國の立場を理解され、日邊兩國親善の增進に寄與せられたことは深き印象として遺されて居るのであります。新任ピヤ・シー・セナ公使閣下は從來

主として暹國内政の樞機に參劃せられたる上、嘗て外務大臣の重責に膺られた難かしき御經歴と其立派なる御人柄とは前任者にも增して我國民の心を把握せらるべきを確信し日暹親善の增進に大なる期待を持つ次第であります。

日暹の關係に就ては從來種々の機會に於て私は既に幾度か所見を述べたのでありますが、暹國に對する我國の態度は親善增進の一語に盡くるのであります。一九三二年の政變後貴國新政府の基礎は着々牢固を加へ諸般の施設順調に進捗し國力の增進著しきものあり而して先般暹國と我帝國との間に平等互惠の立場に於て新條約の締結を見ましたことは兩國の爲め誠に慶祝に堪へない所であります。目下我國は支那事變に際會して居ります爲め、爲替管理其他の關係上暹國の貿易の上にも間接に多少の障碍を及ぼして居るのは遺憾でありますが、軈て事變も終局を告げ日支兩國の關係も親善明朗化するに從ひまして、私は日暹兩國の關係が必ずや一段と緊密の度を加へ、通商關係も正常化し、更に一層振張することを期待するものであります。貴國に於かれましてもどうか此間の事情を篤と御諒察下されることを希望する次第であります。

次に本夕は陪賓として元駐日公使ピヤ・スーパン・ソンバット氏並に暹國前經濟大臣プラ・サラサス・ボラカン氏を御招待することを得ましたのは私の欣快とする所であります。ピヤ・スーパン・ソンバット氏は昭和三年より七年迄暹國公使として我邦に在任せられ、今回渡來視察の途次立寄られたのでありまして豫て日本の諒解者で親友であらせられるのであります。プラ・サラサス・ボラカン氏は昭和十年八月來朝されて以來殆んど三年の間佶々として我國の實情を研究調査せられ過般其研究調査の結晶として日本の金融及銀行組織と題する尨大なる著書をなされた程で、日本の智識を有せらるる點に於ては暹國の第一人者でありましてプラ・サラサス・ボラカン氏の如き諒解者を有することは兩國の親善增進上洵に幸であるのであります。

終りに臨みまして茲に諸君と共に杯を擧げて新任ピヤ・シー・セナ公使閣下並にピヤ・スーパン・ソンバット氏及プラ・サラサス・ボラカン氏の爲めに健康を祝したいと思ひます。

暹羅公使の答辭

會長閣下並に各位

本夕は今回新たに日本駐在暹羅公使の職を拜しましたる私に對し御懇篤なる歡迎晩餐會を御催し下されまして感謝致します殊に會長閣下の只今の御話しの御多用にも不拘特に本夕の御催しに御主人役を御勤めなされたと云ふこと、並に特に私に寄せられました御言葉の數々に對しては衷心滿足、感謝するものでご御座います。

先づ私は茲に暹羅國の日本に對する方針は現存する日暹兩國の親善友好關係の益々緊密となるを希望するに在ることを敢て申上げんとするものであります。國を代表して參ります公使は公務の都合上で變更々迭することがありますが、只今述べましたこの方針は不變のものであります。私の前任者が行ひました幾多の交友接觸、それは後繼の任を帶びました私に於て繼續して行き度く念願して居ります。即ち前任者と同じく出來得る丈け多數の日本の方々と交を結び度く存じます。茲に御列席の中には不肖が過去六ケ月の間に此の點に關し乍微力、力を致し來りましたことを御諒解下されることと存じます。私は日暹兩國の友好親善を增進する爲めには最善を盡し度き覺悟を有して居ります。

暹羅國政府と致しましても、又政府を代表して茲に駐在して居ります私に置きましても、日本の立場、就中現に直面しつつある時局、非常時に際する日本の立場の眞相を知るが爲めには常に留意研究致して居ります。從つて兩國間に置きましては政治上に於ても、又通商上に置きましても滑に參り來つて居ることを申上げ得るのであります。

先程會長閣下も御話しありました通り、我國は五年前の政體變更後、我が政府の基礎は鞏まつて參りました。仕事に熟心なる議員を有する人民代表議會を有し又財政は健實に成長して居ります。政府は時代に適合する爲め或る地域に於て町村自治の制度を施行し軈て之れを全國に普及せんとして居ります。産業の振興に力を致して居るは申す迄もありません。回顧しますると暹羅政府は政體變更後間もなく、國務參議、有力官吏、人民代表議會議員等を貴國に送りまして汎く諸般の施設の視察を致させましたのでありますが、是等の人々は日本の現情を能く了解し視察の結果を携へて本國に歸つたのであります。其の結果其後日本に或は見學に或は學事修得に來たるものが漸次增加し目下日本に滯在して居ります學生の數は百名を超えると云ふ情況であります。

條約のことに就て申しますると暹羅政府は在來の條約が暹羅自身を拘束する幾多の條項を存するのに鑑み一九三六年十一月を以て條約國に對し之が廢棄と改訂商議の用意あるを通告したのであります。條約改訂の商議進行中に於ける日本政府が暹羅政

府に示されたる御好意に對しては忘るることの出來ないものであります。而して日本と我國とは昨年十二月を以て盤谷に於て條約調印を見たのであります。今後暹羅は他の大國間の例の如く國際間に對等の位置として立ち得ることとなつたのであります。暹羅は小國であります。乍然其重要性は亞細亞の他外國に比し劣るものではありません。自國の獨立を保持し國力の充實を期するが爲めには内外に對する政治の運用に就ては細心の注意を必要と致して居ります。常時に於て暹羅は平和を愛好致します。現下の事變が他日終了を告げ其後亞細亞に於ける住民が互に眞正の幸福と福祉を享有せんことを希望するものであります。私は重ねて協會が態々、本夕斯の御盛宴を御開催被下ましたことに感謝の意を表して私の御挨拶を終ります。

茲に各位と共に暹羅協會の御隆盛と會長閣下の御健康を祝する爲め盃を擧げんと存じます。

出席者芳名（イロハ順）順序不同

（主賓）ピヤ・シー・セナ公使閣下

（陪賓）元　公　使　ピヤ・スーパン・ソンバツト殿

元經濟大臣　プラ・サラサス・ボラカン殿

今村信次郎殿　石射猪太郎殿　井上雅二殿　市河彦太郎殿

林　久治郎殿　早淵恒治殿

早川德次殿　花柳德兵衛殿

丹羽善之助殿　西田正雄殿

本間雅晴殿　侯爵德川賴貞殿

遠山峻殿　千葉皓殿

ルアン・ラタナチツプ殿　子爵岡部長景殿

太田正雄殿　小城德太郎殿

渡邊知雄殿　子爵加藤泰通殿

加藤勝太郎殿　糟谷宗一殿

吉田晴風殿　館哲二殿

高崎能彦殿　高橋清一殿

田澤丈夫殿　辻富三殿

南條金雄殿　中村庸殿

中川末吉殿　中川省吾殿

長瀨德太郎殿　ルアン・ヴイラ・ヨーター殿

子爵黑田長敬殿　山岡萬之助殿

矢田部保吉殿　矢田長之助殿

山口武殿　伯爵前田利男殿

前田晴康殿　松谷誠殿

松宮一也殿　伯爵二荒芳德殿

藤井信殿　藤蔭千枝殿

男爵荒木貞夫殿　阿部信行殿

阿部勝雄殿　淺野良三殿

厚地盛茂殿　アルン・ウイチツタラナンダ殿

齋藤鐘三殿　北島多一殿

岸並喜代二殿　伯爵溝口直亮殿

子殿三島通陽殿　水野恭介殿

宮原武雄殿　宮城道雄殿

清水揚之助殿

（主人）會長　公爵　近衞文麿

○暹羅新銀行法實施

一九三七年暹羅國會を通過したる銀行業務取締法は愈々一九三八年四月一日より施行せらるゝ事と成つた。同法によれば一銀行の最小資本金は二萬磅以上拂込濟にして、各銀行は最小五千磅乃至一萬磅を暹羅政府に供託しなければならない。

營業時間は決定され、大藏省は銀行休日を決定する。外國に於て登錄された銀行は貸借對照表を廣告する必要があり、暹羅に於て登錄された銀行は大藏省の承認せる監査役を置かねばならず、積立金が拂込資本金の五割以上になる迄純利益の一割以上を積立てねばならない。

各銀行は大藏大臣宛毎月報告書を提出するの義務を負ふ。前記報告書は規定の用式によるを要し、用式の變更は禁ぜられて居るが、該報告書を闡明する爲附記することは差支へない。而して右報告書の提出を怠るときは免許を取消さるゝことあり、其他同法規定に準據せざる場合其の事由の消滅するまで一日五百磅の罰金を科せらる。

○對日貿易額（一九三六年——三七年）

佛曆二四七九年度（自一九三六年四月一日至一九三七年三月三十一日）に於ける暹羅の對日貿易額は左の通りである。

輸出　五、一〇五、二七八銖

輸入　二八、二五八、七四五

又同年度中主要品目輸出入額は左の通りになる。

本邦より輸入額

品目	金額	品目	金額
罐詰魚	三六五、六二九銖	籐竹藁製品	七一、五三四
罐詰以外の魚	一六八、九二三	藥品類	一五四、九六〇
小麥粉	一四六、七一三	アルミニウム製品	一四四、一九二
罐詰牛乳	四〇七、四二九	亞鉛引鐵板	一、九〇七、四一七
精糖	一七一、〇一二	銅鐵製品	二、三五五、九八九
蔬菜	七六、〇二三	錫製品	五一、一三〇
護謨製品	五九三、七四四	塗料	一二二、〇八八
セルロイド製品	一一〇、七七九	印刷紙	三四八、三二五
化學製品	二一一、九八七	其他紙製品	二三七、五七六
陶磁器	一一〇、九二一	石鹼	七三、二八四
時計	七七、三八二	文房具	八二、一一六
電氣用品	二七三、四四五	綿織物	九、七〇〇、九六〇
硝子製品	五一三、八一二	其他綿製品	一、七八二、二四七
帽子製品	二一六、五五一	絹製品	九八、七七八
莫大小製品	一三九、六八二	毛織物及其製品	八〇、一五三
科學機械	六九、四五五	人絹織物	三、四三九、〇六六
皮革製品	七四、九四五	玩具	八八、二四〇
鐵道機關車	三三六、四五六	傘類	九九、九〇二
自轉車		自轉車	五五、二二三
自轉車部分品	一九五、一二九		
綿絲	九〇四、六八六		
人絹絲	八二、二六〇		
麥酒	二五一、二二九		
其他	一、九三一、〇六〇		
計	二八、二六七、四三二		

本邦へ輸出額

白米	一八三銖
白碎米	二、四二〇、〇五三
棉花	一五五、六二八
獸皮	二九三、八四一
護謨	四六一、一九六
チーク材	一、一六六、一一八
其他唐木類	一二三、一七八
其他	四九七、四八二
計	五、一一七、六七九

○盤谷の日暹貿易斡旋所の開所

日暹通商關係の緊密化を目指す日暹貿易斡旋所は今回、盤谷市ニュー・ロード二二番地に事務所を開設、日本輸出貿易聯合會より派遣された小原友吉氏主宰の下に事務を開始した。

○盤谷市長の交迭

新選出市會議員による第一回盤谷市會が四月十六日 Throne Hall に於て二名の女性を含む一四三名の議員によつて、內務大臣臨席の下に開會、內務大臣は簡單に前市長、チヤオピヤ・ラーム・ラコツプ氏及前市會議員の功績を讃へたる後、新議員に對する希望を述べ、次いで最年長議員たるプラヤー・アタカーンヤバツト氏推されて、臨時議長の席に進み、次いてクン・サマーハーン・ヒタカテ氏を新盤谷市長に、ピヤー・プラキツト・コラチヤツク氏、ピヤー・シリチヤイヤ・プリン氏及ピヤー・ドラヤ・タンマーピロム氏の三氏を市助役に任命する旨の報告書を朗讀した。次いで議長の選擧に移り、開票の結果ピヤー・デバーステン氏當選、第一副議長には、ネンタラクサーマーナ氏が、第二副議長にはルワン・スントーンウイチヤーン氏が當選した。因に新市長クン・サマーハーン氏は昭和十年春、我が國を來訪市制其他の方面に亘り視察せられたことがある。

○暹羅國より註文の機關車完成

曩に暹羅國からの註文により、昨年末以來名古屋日本車輛、大阪汽車製作、神戸川崎車輛、日立下松工場等で建造中であつた機關車四輛が此程完成したので、工場側から各一名宛の組立技術の職工代表と鐵道省から一名合せて五名の人々が附添ひ、機關車と共に五月二十八日神戸出帆の三井ライン明石山丸で暹羅國へ發送された。

○帝國練習艦隊の暹羅訪問

高須少將を司令官とする練習艦隊磐手、八雲の兩艦は各科士官候補生二百餘名を乘せて、四月六日午前六時横須賀軍港出發遠洋航海の壯途に上つたが、五月十八日午前六時、暹羅陸海軍代表、伊東總領事、陸海駐在武官、在留邦人多數の出迎裡に盤谷港外に到著した。高須少將は同日左の如きステートメントを艦上より發した。

「今回余が日本帝國練習艦磐手、八雲の遠洋艦隊司令官として、極東に於いて最も深き親善關係を有する暹羅國を訪問し國王陛下、攝政宮殿下を始め、友邦暹羅の國民に衷心よりの敬意を表し得るは、余の甚だ欣快且つ光榮とする處であります。

御承知の如く練習艦の遠洋航海は士官候補生をして、海上生活の實際を體得せしめ同時に、歴訪國の風俗、文化を觀察し、或は各國民との接觸を通じて視野を擴大し以て、知識を博くせしめんが爲めであつて、今回、吾等の訪暹も此の意味に外ならぬのであります。

抑々日暹間の國交は疾くも數百年以前に結ばれたのでありますが、それ以後兩國の親善は國際關係の目まぐるしき轉變の中にあつて常に繼續して來たのであります。この友好關係は單に兩國がその國家組織及び宗教を共にするにのみ依るに非ずして、實に東洋平和を確立して世界平和に寄與せんとの崇高なる共同目的を有するにあると信ずるのであります。

吾等の訪問が些かなりとも東洋平和の樹立てふ共同使命に結合せる日暹兩國の親善增進に貢獻する處あらん事を希望する次第であります。」

尙艦隊盤谷滯在の模様は次の如くであつた。

五月十八日盤谷著、午後一行は村井公使夫妻の公使官邸に於ける歡迎會に招待された。出席者は在盤各國外交官並領事官、國務大臣（總理、國防相は旅行中、內務大臣は病氣の爲め缺席）を始め日暹協會々長ピヤ・スリシチカーン・パンチョン氏、前駐日公使プラ・ミトラカーム・ラクサ氏等々多數名士を網羅。村井公使の歡迎の辭に次いで司令官の挨拶あつて後、日暹少女のサーヴイスにより宴に入つた。席上艦隊軍樂隊の奏樂は非常なる喝采を拍した。

午後八時士官一行は國防大臣の歡迎晩餐會に出席。

五月十九日、朝一行は海軍駐在武官中堂中佐、伊東總領事同道暹羅海軍代表の案內にてロップブリに開催中の「象狩り」の見物をなす。同地滯在中の攝政首座アテイット殿下、總理大臣、國防大臣に挨拶をなす。

場內アナウンサーは十五頭の象の捕獲狀況を放送し、一同にとつては非常に興味深き一日であつた。高須司令官はロップブリ停事場に於て案內の勞をとられた暹羅海軍士官に美しい日本人形を贈呈した。

五月二十日、午前一行は盤谷に在る大戰記念碑を訪れ、花環を捧げて戰沒將兵の英靈に默禱後、各自、自由行動にて市內見物。

司令官及び士官は海軍參謀本部に於ける暹羅海軍司令長官の午餐會に出席、午後宮殿拜觀、夜は公使官邸に於ける村井公使夫妻の晩餐會に出席、國務大臣、陸海空軍將星陪賓として列席、村井公使の挨拶の後、高須少將は此度の訪暹に示されたる暹羅の熱誠なる歡迎は吾等一同永久に忘れ得ぬものであるとて、外務・國防・宮內各省代表より成る歡迎委員に記念品五個を贈呈、艦隊軍樂隊の奏樂裡に晩餐に入り、午後十一時過散會。

候補生一行はラヂヤタニホテルに於ける日本人會主催の午餐會に出席、午後市內寺院を歴訪して宿舍に引上げた。

五月二十一日午前八時、司令官及び士官は航空省代表の案內にてドン・ムアン飛行場視察、午後市內見物、日本人會主催の晩餐會に出席、候補生一行は午前十一時公使館訪問、公使並に館員一同に別れの挨拶を述べ、鱈艦の爲めバクナムへ汽車にて出發。

五月二十三日午前九時半、司令官及び士官は舊都アユチヤに赴き、山田長政神社に參拜、日本人町の遺蹟を巡つて歸盤、村井公使と共に攝政首座アテイット殿下の晩餐會に出席。

五月二十四日、司令官及士官は盤谷に於ける內外知名の士を

艦内「アツトホーム」に招待、午後六時盤谷出發。

○暹羅國海軍潛水艦受渡式

三菱重工業神戸造船所で、昨年五月進水した暹羅國潛水艦シンサムツタ號及びプライチユンボン號の二隻は工事竣成、四月三十日同所で暹羅公使、山田神戸海軍監督長等多數參列の下にその受渡式が嚴かに行はれた。

○暹羅國海軍留學生と潛水艦の出發

去る昭和十一年六月より二ヶ年間、我邦に於て海軍留學生として八代海軍大佐以下教官の熱心なる指導の下に、潛水艦乘組員としての技術を習得した暹羅海軍留學生スイ大尉以下將士二百餘名は、神戸三菱造船所にて建造のマツチヤーヌ號外三隻の潛水艦に分乘、六月五日神戸港を出帆し、日本式航法で堂々故國へ向つて處女航海の途に就いた。

○暹羅國海軍砲艦受渡式

神戸川崎造船所に於て、昨年七月進水式をなしたる暹羅砲艦アユチヤは、工事竣工、去る六月十五日同所に於て受渡式あり暹羅公使始め暹羅海軍一同、日本側より艦政本部長上田海軍中將、岡田兵庫縣知事其の他多數出席し、滯りなく式を了した。

尚ほ同艦は、六月二十六日神戸發、一路歸暹の途に就いた。

○暹羅燃料局長の來朝

暹羅國防省燃料局長ワニツチ・パナバンダ氏は、四月十七日神戸入港盤谷丸にて來朝、關西方面用務を了したる後四月二十三日入京、關係各方面と懇談、廿七日横濱發太洋丸にて渡米せられた。來る八月頃歸暹の途再び來朝の筈。同氏は一昨年春にも、モムサニツト大佐一行に加はり、來朝せられた事がある。

○暹羅國政府官費留學生來朝

暹羅國政府官費留學生ソンキツド・リンバイロ、スウイ・スタータム、及びヴキツシン・ウオンビヤサの三君は五月十二日着京、直ちに本協會經營の目白暹羅學生會館に入舍。目下日本語の學習中で、研究科目は商業及經理である。

○暹羅國政府留學生の警察事務實習

本年一月警視廳警察練習所の課程を修了した暹羅國政府派遣の警察學生警察少尉チヤムラス・マンダカナンダ、同バンチヨン・ブンヤクラソブ、同ブラチオブ・キラテイブトラの三君は今回警察の實務研究をすることゝなり、六月一日より三田署、上野署、駒込署へそれ〴〵配屬された。

○暹羅學生旅行團來朝

既報の如く在神戸岡崎忠雄氏招致の第一回暹羅學生旅行團一行拾名は、豫定の通り去る四月十七日朝大阪商船盤谷丸で神戸港著、岡崎家、神戸日暹協會、神戸商工會議所の關係者多數並に本協會から態々同地迄赴いた山口、永塚兩氏等に出迎へられて上陸、我邦への第一歩を印した後、左記旅行日程の通り二週間に亙り、東京を中心として其の近縣及名古屋、奈良、大阪、京都、神戸等各都市の見學旅行を了し、五月一日門司港より同じく盤谷丸に乘船歸暹の途に就いたが、其間陸海軍當局に於てもよく此見學旅行の趣旨を了解せられ、事變下に於ても好意を以て見學上多大の便宜を供與せられた、又特に横濱、名古屋、大阪、神戸各地駐在の暹羅名譽領事は、最も熱心に諸事斡旋の勞を採られ、其他各方面からも非常な便宜と歓待を受け、一行の學生は招致者に對する衷心感謝の念と、各方面から受けた好意を喜び、頗る滿足且つ感激して名殘を惜しみつゝ歸國した。

尚又今回の岡崎氏の計畫に對しては、各方面から寔に機宜に適した計畫にして、今後も續行されんことを希望するとの聲が多かつた。要するに第一回の試みとしては先づ成功と云ふべく、度を重ねるにつれ、嬢ては日暹兩國の親善增進に、大なる效果を齎すに至るものと信ぜられる。

尚旅行團と往復共、同船せられたる在盤谷三木榮氏は船中並に旅行團の各都市見學中も常に行動を共にせられ、一行に對し種々便宜を供せられた。

旅行日程

四月十七日(日)午前　九時　神戸入港　同十時半上陸

正午　神戸商工會議所主催歓迎午餐會（於商工會議所）

午後　湊川神社參拜、須磨、舞子海岸見物

同　三　時　岡崎氏訪問、茶菓饗應、記念撮影、元町通見物、老松旅館宿泊

四月十八日(月)午　前　中　東神倉庫、生絲檢査所、神戸港灣設備一般見學

午　後　阪神公園、朝日新聞社主催聖戰博覽會見物

三井物産會社神戸支店主催歡迎晩餐會(於沖天閣)

同七時五十分　三宮驛發列車にて上京

四月十九日(火)午前七時卅分　東京驛着　神宮外苑日本青年館投宿

同　十時より　暹羅公使館、暹羅協會、文部省大日本少年團聯盟、外務省、三井暹羅室訪問

正　午　三井暹羅室主催歡迎晩餐會(於三越別室食堂)

午後　二　時　東京朝日新聞社見學

同　三時半　暹羅協會主催歡迎茶會(於霞山會館)記念撮影

同　六　時　觀劇(東寶劇場)

四月二十日(水)午前八時より　市中見物(遊覽バス)

同時に明治神宮參拜、靖國神社參拜の外(神宮外苑運動競技場海軍參考館、繪畫館、築地西本願寺、國技館、淺草公園、上野公園、動物園等見物)

午後　四　時　暹羅公使主催歡迎茶會(於公使館)

四月廿一日(木)午　前　中　東京帝國大學、市立第一中學校見學

午後　一　時　帝國議事堂參觀

同　二時半　國際學友會主催歡迎茶會(於國際學友會館)

同　四時より　野間劍道々場、講道館、東京外國語學校見學

同　七時半　東京外國語學校暹羅語科生徒主催歡迎晩餐會(日比谷松本樓)記念撮影

四月廿二日(金)午　前　中　横濱見物

(三菱重工業横濱船渠、ビクター蓄音機工場、本牧八聖殿、武道館、野毛山公園暹羅館等見學)

午後　零時半　倉田領事主催歡迎午餐會(於南京町平安樓)

同一時半より　横須賀軍港、軍艦三笠及山城見學

同　七　時　大日本少年團聯盟主催歡迎晩餐會(於日本青年館内大和亭食堂)

四月廿三日(土)午前七時五分　東武鐵道淺草驛發　日光見物(東照宮、中禪寺湖、華嚴瀧等)

午後　七　時　淺草驛着歸京、淺草公園夜景見物

四月廿四日(日)　自　由

四月廿五日(月)午前　九　時　東京驛發列車にて名古屋に向ふ

午後二時五分　名古屋驛着

(知事、市長訪問後名古屋城、東山動物園見物、日暹寺參拜)

同　七時半　加藤領事主催歡迎晩餐會(於觀光ホテル)小松屋旅館宿泊

四月廿六日(火)午　前　中　名古屋製陶會社工場、日本毛織會社工場見學

正　午　伊藤次郎左衛門氏主催歡迎午餐會(於揚輝莊)

午　後　安藤七寶製造工場見學

同五時十五分　名古屋驛發列車にて奈良に向ふ

同七時四十分　奈良驛着、大佛旅館宿泊

四月廿七日(水)午　前　中　春日神社參拜、鹿寄せ並奈良公園其他市内見物

午後　一　時　電車にて奈良發大阪に向ふ

同　二　時　大阪北六驛着、大阪城、電氣科學館見學

同　六　時　大阪日暹貿易協會主催歡迎晩餐會(於大新樓)金水旅館宿泊

四月廿八日(木)午　前　中　造幣局、鐘紡淀川工場見學

午　後　大阪商船會社、朝日新聞社訪問

同　三　時　大阪發　同四時京都着

同　七時　都踊見物、旅館鳥居樓支店宿泊

四月二十九日(金)　午前八時より遊覽自動車にて市内見物（桃山御陵三十三間堂、清水寺、知恩院、平安神宮、金閣寺、大丸デパート等）

午後　三時半　京都發　同五時神戸着

同　六時　岡崎氏主催歡迎晩餐會（於日毛ビル食堂）老松旅館宿泊

四月三十日(土)午　前　中　三菱造船所に於ける暹羅海軍潜水艦引渡式に列席後同造船所並川崎造船所見學

午後　六時　國際協會學生部主催日暹學生交驩晩餐會（於商工會議所）

同九時十六分　三ノ宮驛發　下關に向ふ

五月一日(日)午前七時　下之關驛着

正　午　門司より大阪商船盤谷丸に乘船歸暹の途に就く。

團員氏名

氏名	年齢	備考
サナン・ラタナセン	一八	本年三月外國語專門學校（日本語科三年）卒業
ユポン・ヤマバヤ	一九	同右
ピスオング・オサタノン	一八	同右
ビヤン・ソムブーン	一七	同右
テイパモン・ブーング・コーングチユン	一七	同右
ウドム・クオング・ハドウング	一八	日本人會經營日本語講習會六ケ月終了
プラバア・ミンプラバーン	二二	シルバコン藝術學校學生
パイトウーン・ジエームケツ	二二	同右
スコン		私立ミンプラバーン小學校教師
ブンテイヤン・パニツトバン	一九	同右
プラツプ・セーリム	一八	第八郵政局事務員
	同右	官立シビヤ普通商業學校學生
	同右	

○東京商科大學並專修大學學生の暹羅國視察旅行

今般東京商科大學内太平洋倶樂部に於ては、暹羅國視察研究の爲め暹羅班を組織して、七名の學生を同國に旅行せしめることゝなり、七月下旬出發の筈。又專修大學内南洋事情研究會に於ても同樣、八月初旬暹羅國並佛領印度支那方面の視察研究旅行に、教授一名學生五名を派遣する由にて、本協會へ之れが斡旋方依頼が有つたが、此の如く大學生間に暹羅に關する研究熱の高まつて來たことは、卽ち暹羅國に對する認識の度が增して來た所以で、寔に喜ばしい傾向であるので、本協會は、在盤谷帝國官憲其の他に宛てた視察上の便宜供與方の紹介依頼狀を托送して置いた。

○石黑外務事務官轉任

是迄外務省東亞局第一課に於て專ら暹羅關係の事務を擔當して居られた外務事務官石黑四郎氏は、今般大使官三等書記官に轉任、上海在勤を命ぜられたので、外務事務官千葉皓氏が其後任として、暹羅關係事務を執掌せられることゝなつた。

○暹羅公使館附海軍武官交迭

駐暹公使館附海軍武官中堂中佐は今般歸朝を命ぜられ、後任として海軍大佐鳥越新一氏が任命せられた。依て本協會は三井暹羅室と合同で、四月二十日東京會館に於て、晩餐會を催し送別の徽意を表した。

因に同氏は四月二十八日東京出發赴任の途に就かれた。

○羅暹公使館附陸軍武官の交迭並に商務官の新設

駐暹公使館附陸軍武官田村中佐は今般歸朝を命ぜられ、齋藤二郎中佐が其の後任に任命せられた。又外務省では今度新に暹羅に商務官を駐在せしめることゝなり、田澤丈夫氏が商務書記官に任ぜられ、赴任せられるので、本協會は三井暹羅室と合同で、本月二十二日工業倶樂部に於て、兩氏の爲め送別晩餐會を開催した。

因に齋藤中佐は五月二十四日出發、臺灣、上海經由で赴任、又田澤商務官は三十日神戸出帆の西貢丸にて、赴任の途に就か

れた。

○前駐暹公使館附武官中堂海軍中佐歸朝

過般鳥越海軍大佐と交替せられた前駐暹公使館附武官海軍中佐中堂觀惠氏は、大阪商船西貢丸にて六月十五日神戸着、無事歸朝せられた。

○貴族院議員の暹羅視察旅行團派遣決定

五月十八日の貴族院各派交渉會に於て、貴族院旅行團派遣の件が決定されたが、其の中には暹羅方面視察のため七名の議員を派遣することも含まれてゐる。

○東京外國語學校速成科本年入學者氏名

本年四月十一日より開講の第二回暹羅語速成科に左記十二名が入學した。

橋本誠一君　伊東良一君　木下正夫君　鈴木忍君　小嶋節次君　松本喜一郎君
謝瑞西君　若山新次郎君　柳澤憲治君
高澤義君　和田弘君　辻貞一君

○暹羅新聞從軍記者の歸暹

客臘上海戰線より再び來朝し、我國の一般情勢を研究中であつた暹羅新聞從軍記者スーパー・シリマン君は、豫定の研究を終へ、五月十七日神戸出帆の朝日山丸にて、歸暹の途に就いた。

○拓務省より本協會へ補助金下付

豫て本協會より拓務省に對し、補助金下付方申請中の所、同省より三月八日附指令拓亜二第一一六號を以て、移植民團體助成金の名義にて金貳百圓下付の旨、東京府經由通達があつた。

○本協會臨時理事會の開催

六月十一日丸之内常盤家に於て、三島、矢田兩常務理事海外旅行に付、送別を兼ね本會臨時理事會を開催し、左の事項に付報告又は協議を爲した。

○協議事項

一、常務理事不在中の職務代行に關する件
二、日暹文化協會設立に關する件

○會員異動

其後本協會々員の異動は左記二名の新入會員があつたのみである。

（通常會員）宮城道雄君（東京）　音樂家
（〃）須々木平次君（横濱）　辯護士

○會員動靜

木戸幸一侯（名譽會員）文部大臣兼厚生大臣であつた同侯は、去る五月二十六日本官を免じ厚生大臣專任となられた。

陸軍大將荒木貞夫男（名譽會員）去る五月二十六日文部大臣に就任せられた。

林久治郎氏（名譽會員）今般南洋協會理事長の職に就かれた。

大倉喜七郎男（理事）去る五月中旬より北支方面並滿洲へ視察旅行中の處六月二十六日神戸入港の吉林丸で歸朝された。

三島通陽子（常務理事）今般大日本少年團聯盟伊太利派遣團長として、又貴族院代表として、萬國議員同盟會議並に萬國議員商事會議に出席のため、六月三十日平安丸にて米國經由、七月二十八日ナポリ着、伊本利に二週間滯在、獨逸に一週間滯在の上、八月和蘭海牙に開催の議員會議に出席し、尙ほ九月波蘭ワルソーに開催の商事會議に出席の後、歸途再び米國に渡りパナマ經由、十一月下旬歸朝せられる筈。

矢田長之助氏（常務理事）今回日本貿易振興會主催の第七回世界一周實業視察團長として、歐米視察旅行の途に上られることゝなり、六月十五日郵船太洋丸にて出發せられた。先づ七月一箇月間米國各地を視察し、八月一日倫敦着、英、佛、白蘭、獨、致、瑞西、伊等順次各國を視察の後、九月廿五日ナポリより郵船宮崎丸に乘船埃及古倫母を經て十月十五日新嘉坡着、夫れより暹羅に立寄り、盤谷より陸路アンコールワットを經て西貢に出て、同地より乘船十一月下旬歸朝の豫定。

高楠順次郎博士（理事）今般布哇大學よりの招聘に應じ、來る八月中旬布哇に赴き、一箇年に亘り、同校に於て佛教に關する講義を、受持たれることゝなつた由。

兒玉謙次氏　今般中支振興會社總裁就任に内定せる由。

稲田昌植男 貴族院遣外議員として、來る八月海牙に開催の萬國議員同盟會議、並に九月ワルソーに開催の萬國議員商事會議に列席の爲め不日渡歐の筈。

川合玉堂氏 今般大正四年以來二十餘年間に亘り、教鞭をとつて居られた東京美術學校を辭職せられた。

宮原武雄氏 三井暹羅室々長である同氏は、プラ・サラサス氏と共に、六月二日東京出發滿洲國へ視察旅行に赴き、二十一日歸京せられた。

松宮一也氏 日語文化學校の幹事である同氏は、今般外務省文化事業部の計畫に依る、盤谷日語學校設立準備事務の依囑を受け、渡暹せられた。

ルアン・ラッタナテープ氏 駐日暹羅公使館三等書記官であつた同氏は、豫て歸朝を命ぜられてゐたが、去る三月二十日出發歸暹の途に就かれた。

○寄贈圖書及寄贈品

左の通り各々寄贈を受け厚く感謝する次第である。

一、暹羅に於ける列國經濟勢力(鈴木優)　一部　神戸商大　鈴木　優氏

一、在盤谷「日暹協會々報」自第一號至第三號(暹羅語)　各五部　在盤谷日暹協會

一、在盤谷「日暹協會々報」第四號(暹羅語)　十三部　在盤谷日暹協會

一、日暹會話便覽(三木榮)　一部　三木　榮氏

一、アンコール歌行脚(三木榮)一部　同　氏

一、暹羅名勝歌案内記(三木榮)三部　同　氏

一、國際讀本第四卷ソヴイエト讀本(外務省情報部)　一部　外務省情報部

一、國際讀本第五卷獨逸讀本(外務省情報部)　一部　同省同部

一、國際讀本第六卷佛蘭西、西班牙讀本(外務省情報部)　一部　同省同部

一、國際讀本第七卷英吉利讀本(外務省情報部)　一部　同省同部

一、國際讀本第八卷亞米利加讀本(外務省情報部)　一部　同省同部

一、國際讀本第九卷滿洲讀本(外務省情報部)　一部　同省同部

一、國際讀本第十卷南太平洋讀本(外務省情報部)　一部　外務省情報部

一、各國通商の動向と日本(外務省通商局)　一部　外務省通商局

一、日本諸學振興委員會研究報告—第二篇　哲學(教學局)　一部　文部省教學局企畫部思想課

一、日本諸學振興委員會研究報告—第三篇國語國文學(教學局)　一部　文部省教學局企畫部思想課

一、昭和十二年版拓務要覽(拓務大臣官房調査課)　一部　拓務大臣官房調査課

一、昭和十一年拓務統計(拓務大臣官房調査課)　一部　同　官房調査課

一、諸君的商務廳(暹羅國經濟部商務廳)一部　十五部　暹羅國經濟省商務局々長

一、諸君的商務廳(暹羅國經濟部商務廳)　一部　横濱暹羅國領事館

一、昭和十三年版日本文化團體年鑑(田口章太)　一部　日本文化中央聯盟

一、圖書分類目錄附逐次刊行物目錄—昭和十二年六月末現在(日本商工會議所)　一部　日本商工會議所

一、震日會館圖書分類目錄(昭和十二年九月末現在)(震山會館)　一部　震山會館

一、Statistical Year Book of the Kingdom of Siam B. E. 2476—2477 (1933—35) No. 18　一部　在東京暹羅國公使館

一、Contemporary Manchuria (Vol, I, No. 2)　三部　滿鐵東京支社

一、Contemporary Manchuria (Vol, I, No. 8)　三部　同　社

一、North China in Transition　三部　同　社

一、Communist Ploting in the Far East　三部　同　社

一、Japan Today and Tomorrow　一部　大阪毎日新聞社

一、The Bulletin and the Spirit of Young Asia　一部　松本君平氏

一、暹羅國憲法發布記念博覽會日本館寫眞帖

一冊　暹羅國日本商工會議所　名譽會長　駐日暹羅公使　ピヤ・シー・セナ
一、暹羅國海軍潛水艦乘組員日本留學記念寫眞帖　同　駐暹日本公使　村井倉松
一冊　暹羅潛水艦乘組指導官　理事長　子爵　岡部長景
八代大佐　常務理事　子爵　三島通陽
同　矢田長之助
○暹羅關係新刊書籍　理事　伊藤次郎左衛門
一、Annual Statement of the Foreign and Navigation of the Kingdom of Siam, Year 2479 (April 1936 to March 1937)　同　伊東延吉
同　石射猪太郎
一、Statistical Year Book of the Kingdom of Siam B. E. 2476—2477 (1933—1935) Fighteenth Number.　同　男爵　大倉喜七郎
同　加藤恭平

○財團法人暹羅協會總裁及役員

（昭和十三年六月現在）

總裁　秩父宮雍仁親王殿下　同　文學博士　高楠順次郎
名譽總裁　アテイツト・デイバヤ・アバ殿下　同　鶴見左吉雄
役員（イロハ順）　同　南條金雄
會長　公爵　近衛文麿　同　伯爵　二荒芳德
副會長　侯爵　德川賴貞　同　國府精一
同　村田省藏
同　淺野良三
同　伯爵　酒井忠正
同　醫學博士　北島多一

理事　伯爵　溝口直亮　同　安住伊三郎
同　三好重道　同　醫學博士　北島多一
監事　門野重九郎　同　關屋貞三郎
同　藤山雷太　主事　遠山峻
評議員　井上雅二　日白暹羅學生會館學監　高久正義
同　犬丸徹三
同　侯爵　德川護立
同　公爵　德川圀順
同　岡崎久次郎
同　河井彌八
同　子爵　加藤泰通
同　加藤勝太郎
同　文學博士　高楠順次郎
同　子爵　黑田長敬
同　倉田猛郎
同　正木直彥
同　榎並充造
同　江口定條
同　出淵勝次

日本—盤谷航路定期出帆表（昭和十三年七月以降）

大阪商船會社

	横濱 月日	名古屋 月日	大阪 月日	神戸 月日	門司 月日	基隆 月日	海防 月日	西貢 月日	盤谷着 月日
盤谷丸	七、一六	七、一七	七、一九	七、二一	七、二二	—	—	七、三〇	八、一
西貢丸	八、三	八、四	八、六	八、八	八、九	八、一二	八、一七	八、二一	八、二三
代船（船名未定）	八、二二	八、二三	八、二六	八、二七	八、二八	九、一	九、五	九、九	九、一一

三井物産船舶部

	横濱 月日	名古屋 月日	大阪 月日	神戸 月日	門司 月日	盤谷着 月日
明石山丸	七、五	七、六	七、八	七、九	七、一〇	七、一八
朝日山丸	七、二二	七、二三	七、二五	七、二六	七、二七	八、四
明石山丸	八、一五	八、一六	八、一八	八、一九	八、二〇	八、二八

〔非賣品〕

昭和十三年六月二十五日　印刷納本
昭和十三年六月三十日　發行

東京市麹町區霞ヶ關三丁目四番地三
發行所　財團法人　運羅協會
電話銀座二六五六番
振替口座東京一四八三一番

發行兼編輯人　遠山峻
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地

印刷人　河田保治
東京市淀橋區戸塚町一丁目二二〇番地

印刷所　明立印刷株式會社